佐佐木信綱校閲
鴻巣盛廣著

新古今和歌集遠鏡

東京　博文館藏版

納本
43.2.10
内交

わが父の詩を
祈りて此書を
さゝぐ

新古今和歌集遠鏡序

和歌の歴史を通觀するに、光彩陸離たる黄金時代は、前に萬葉集時代、後に新古今集時代あり。古今集時代は、この見地よりすれば、萬葉新古今兩時代の連鎖たるべし。また德川時代は、これら三時代の復活時代なり、折衷時代なり。

萬葉時代と新古今時代とは、幾多の天才巨匠輩出して、咲き亂れたる言葉の花目もあやに、吾人をして憧憬の感に堪へざらしむる點に於いては、一なりといへども、更に進むで兩者を比較し來れば、もとより差異少なからず。而してこの比較は、實に和歌史上興味ふかき問題たらずんばあらず。

一には時勢に觀よ。建國以來漸う成熟し來りし國民の精神が、大陸文明の精華をとりいれて、燦然たる上代文明をつくり出でしは、萬葉の時代にあらずや。雄健豪壯の意氣漲りわたれる時代の響は、吾人はこれを萬葉集の歌調にきくを得。飜つて、新古今の時代は如何にと觀むか、平安朝優美の文化は漸う末になりて、夕日に映ゆるうら紫の藤波の色香、なほ九重の雲に殘れども、驕るもの久しからで、平家が昨日の榮華を西海の波に洗ひし無常の風は、萬人の心にしみわたりぬ。新古今の和歌の、華麗なるうちに一種のいひしらぬ哀調をよむもの、誰かこゝに時勢の反映を認めざらむ。

二には作者に觀よ。彼には、あまねく上下の階級にわたりて、作者の範圍は寧ろ庶民的と稱すべかりしもの、此には、狹く朝廷の一角に限られて、殆ど凡てこれ上流の才子才女、然らずんば僧侶なり。彼の如き時代に生れて、自然奔放の情に、泣くも笑ふも喜ぶも、たゞ一むきなりし萬葉作者の性情を、多感多涙、喜のうちに泣き、涙のうちにほゝゑみ、こまやかなる觀察と、鋭どき情感とに惱多くも暮らしけむこれの時代の作者に較べ來らば、誰か其差のいちじるしきを見ざらむ。同じく一天萬乘の君におはしながら、全國の富をあつめて、東大寺の盧舍那佛に豪華のあとを耀やかし給ひし聖武の帝に對へては、天下の政權幕府にうつりし鬱悶の情を、わづかに水無瀨離宮の御遊に遣り給ひし後鳥羽上皇おはす、『をす國の遠のみかどに、汝等し斯く罷りなば、平らけく吾

は遊ばむ、手うだきて我はいまさむ』と、節度使に給ひし壯なる御製を、彼の『奥山のおどろが下もふみわけて』と、道ある代を願ひ給ひし悲痛の御聲とともに誦せば如何に。あらき石見の旅路に、妻をのこしゝ人麿の悲しび、『雨まじり雪ふる夜』に、貧窮をかこちし憶良がなげき、はた『酒壺になりにてしがも』と打興ぜし旅人が心は、自ら攝政良經が『袖に玉ちる』貴舟川の涙にあらず。『尾上の鐘』によせし定家が恨と同じからず。はた家隆が『鶯さそへ』のすゞろごころにあらず。『田子の浦に打出で見し』富士の姿は、こゝには『霞になびく曙の空』にたゞよふ烟の美しさとなり、『あとなき舟』の思は、西行寂蓮はた慈圓が歌のふかきあはれとなりぬ。もし亦、これを女歌人に見むか、或は沈痛に、或は熱烈に、或は眞心ふかく、いづれもひたふるなる情緒をせきあへざりし笠女郎、茅上娘子、はた安倍女郎が心ざまは、式子內親王、宮內卿、俊成女が物はかなげに優しき中にも自ら才氣のあふれて深く思ひ入りたると、趣を異にす。

而して、三にはこれを和歌古今の歷史に觀よ。紀記の混沌時代やうゝ整齊の域に入りて、こゝに自然にして莊重素朴なる上代歌風の隆盛を示しゝ萬葉と、すでに古今が純雅の趣味を傳へて以來、歌合に、歌論に、百首に、三百年の敎養を經、技の圓熟と、想の精緻と相俟ちて　景情ともなへるところ、餘韻幽遠の趣と現じ來れる中世歌風の極致と、かれが自然單純の美は、こゝには技巧複雜の妙となる。彼には、野に咲き亂れたる秋草の色あれば、

これには、霞を隔てゝ見る遠山櫻の匂あり。かれは、直情徑行の上古人が、山に野に立ちてうそぶきし態を傳へ、これは、教養ある大宮人が、みやびたる勾欄のもとに沈吟せし風をとゞむ。

かくの如くにして、この兩時代は、互に相對して、和歌史上の壯觀たり。吾人はこゝに、たゞ簡單に言ひ及びたるに過ぎずといへども、精しき觀察は、幾多の興味多き問題をもたらすべく、更に進んで、新古今時代の歌風が、後世の和歌史に於ける消長、德川時代に於ける復活の意義等、また注意に價すべき問題たるべし。

萬葉時代を代表する唯一の歌集は、言ふまでもなく萬葉集なり。新古今時代に至りては、或はその前に立てる千載の歌風をも、これに含ましめつべきも、なほその代表たるものは、新古今集なり。

さるに、この新古今集は、斯くの如く和歌史上意義ある時代を代表する尊とぶべき歌集なるにも拘はらず、古來そを注釋せし書、萬葉古今に比していと少なし。元祿の新文運以前に屬するものに、一二の著ありしかど、古學復興以來は、萬葉古今の如くは顧みられざりき。本居宣長はじめて美濃の家づとの著あり。その門下石原正明ついで尾張の家づとを著はしぬ。近き頃にいたりて、鹽井正男氏の新古今集詳解いでたり。

さるを、こたび鴻巣盛廣君、新古今集遠鏡の著あり。君は和歌史の研究に志深くして、現に大學院にあり。君が遠鏡の著は、即ち宣長が古今集遠鏡の例にならひしにて、初學の爲め、俗言を以て解せしもの。和歌を說くに俗解のはたしてよきや否やは、には

かに定むべからず。例へば情味を說くに十分ならざる憾はあらむも、語意を解釋して讀者の心に明瞭なる印象を與ふる點に於いては、蓋し最も勝れたらむ。殊に新古今集の如き、歌意に含蓄ふかく、難解の傾ある集に於いては、その必要多くして、しかもまた困難の業たり。今や鴻巢君、よくその困難に打かちて、この書を著はさる。歌壇の爲に、喜びて一言し、以て序に代ふ。

明治四十二年十二月

佐佐木信綱識

新古今集を概說して序に代ふ

奈良朝の末期に於て萬葉集編まれし頃より、天平時代の歌壇の隆盛は頓に其勢を減じ、平安朝の初期に於ては殆其影を潛めて、只漢詩の跋扈に委するのみ。然るに時勢の推移は再び國民の自覺心を喚起して、漸く其勢を恢復し來り、醍醐天皇の延喜五年には、紀貫之等四人に勅して古今集を撰進せしめらる。是に於てか、寥々たりし歌壇は、萬木凋落せる嚴冬を去りて、百花爛漫たる陽春に入るの觀ありき。次で村上天皇は後撰集の撰あり。花山院亦勅して拾遺集を撰ばしめ給ひ、後白河天皇の應德三年後拾遺集成る。眞に歌壇の慶事なり。然れども是等は概ね古今の風格を模倣するのみして、毫も進歩の跡を見ず。具眼の士は早くも革新の旗を飜して弊竇を除かむとせり。次て出てたる金葉、詞花の二勅撰集には、其消息を認むることを得。然れども此改革は徒らに新を衒ひ、奇を求むるに忙しくして、愼重の態度を缺くものありき。新舊の二潮流を併せて一丸となし、巧に是を調和したるものを次に出てたる千歲集となす。

新古今集は實に此歌風を基として更に進歩大成せるものなり。

後鳥羽上皇は英達の君主にまし〳〵、政事に勵み給ふと共に、又敷島の道に御志深く、右衛門督源通具、大藏卿藤原有家、左近中將藤原定家、前上總介藤原家隆、左近少將藤原雅經に勅して、新古今集を撰ばしめ給ふ。元久元年二年廿六日稿なりて撰進す。寂蓮法師も亦撰者の一員たりしが、不幸成るを俟たずして歿せりといふ。卷數凡て二十、部門を分ちて春、夏、秋、冬、賀、哀傷、離別、羇旅、戀、雜、神祇、釋敎の十二となす。大體に於て古今集以來の體裁に遵據せるものにして、千載集のものを其の儘襲踏したるなり。歌數は本によりて少異あり、流布の二十一代集は千九百八十一首なれども、北村季吟の八代集抄本は、千九百八十三首なり。然も八雲御抄、拾芥抄等の記する所は、千九百七十八首にして、勅撰次第には千八百七十四首と見えたり。蓋し本集は撰進後屢改竄せられたるものゝ如く、撰者の一人藤原定家の手記なる明月記にも出入掌を反すが如しと記せり。又別に隱岐本と稱するものあり。後鳥羽上皇彼島に渡御の後、最初の奏覽本を更に精査し、取捨し給ひしものにして、卷數は廿

なりと雖、歌數は減じて千六百に過ぎず。親から認め給へる跋文を讀まば、其成立に就いて知ることを得べし。此他、圖書寮には後鳥羽上皇の隱岐に於て爲し給ひし合點と、定家、家隆、有家、雅經の四人の撰者の點とを附したる本あり。御室に納めたる定家の自筆本を基とし、家隆の自筆本を以て校合したりと奥書にあれば、今日に傳はれる諸本中最正確なるものにはあらじか。珍書といふべし。(此本の點者中通具の名見えず。彼は名門の子にして撰者中の主宰者とも見るべきものなれば、或は自から手を下さざりしか。或は又、此點は此集撰進の後、試みに各其好む所を記したりしものにして、通具はこれにあづからざりしか。これによりて面白き新事實の發見せらるゝも知るべからざれば、茲に記して後に問ふものなり。)

〳〵此集には假名及び眞名の兩序あり。これ眞名序ある古今集を正本と信じて模倣したるものなるべし。假名序は後京極攝政良經の作る所にして、歌の起源、功德、歷代の勅撰より說き起して此集を撰べる理由を述べ、轉じて編輯の方針、結構を論じ、終りに上皇の御歌を多く入れたる理由を說き、終功の年月日と、此集の萬代に傳はりて後

人の忍びくさたらむことを述べて結末とせり。上皇の親から宣へる體に作れり。眞名序はこれを權中納言親經の漢譯したるものにして、駢麗の體飽く迄古今のものに倣へり。

次に少しく此集の修辭について述ぶる所あらむと欲す。上古に於て歌界を獨占したりし五七調は、平安朝の中期に至りて其影を潜め、此集の頃に至りては全く七五調に歸し了れり。此集は一句切れ三句切れの非常に增加したりしは即ち其證なり。萬葉に於ては、一句切れは殆無く、三句切れは僅かに百五十首を算し、古今は一句切れ十九首、三句切れ百四十首なるに、新古今には一句切れ百八首、三句切れ四百十七首の多きに上れり。豈非常なる增加にあらずや。次に此集を披讀して著しく感ぜらるゝは、名詞止の多きことなり。萬葉には全體を通じて百六十一首、即ち廿六分の一、古今は五十二首、即ち廿一分の一强に當り、拾遺は六十四首、即ち廿一分の一强、金葉は五十三首、即ち十三分の一强なるに、此集に至りて四百五十六首、即ち四分の一弱に當れり。以て其增加の勢を察すべし。省略法は亦盛に用ゐられたり。名詞止も此方法の一種と見ることをうべし。簡單なる助辭の略せらるゝは言ふを俟たず、說明語の省かれたるものも往々にしてあり。

すみなれし人影もせぬわが宿に有明の月の幾度ともなく（澄メリ）

有明の同じながめは君もとへ都の外も秋の山里（ト同ジク淋シキ處ナレバ）

時しもあれたのむの雁の別さへ（添ヒテ）花ちるころのみよしのゝ里（ハ非常ニ悲シ）

次に倒裝の多きことも亦注意せざるべからず。此法は古くより盛に行はれたる所なりと雖、未だかくの如くなるはあらず。加之、萬葉の倒裝は間々三句切れのものあれども、多くは二句或は四句目にて切れて上に返るものにして、古今も亦概ね是に同じかりしが、此集に至りては、二句、三句、四句のいづれよりも返り、中には

たのもしな、野の宮人の植うる花時雨るゝ月にあへずなるとも。

花ぞ見る、道の芝草踏み分けて吉野の宮の春のあけぼの。

の如く一句にて切れて倒裝となりたるものあり。斯くの如きは萬葉古今に決してあらざりし所なりとす。かけ詞及び緣語の使用も益盛となれり。かけ詞は萬葉には枕詞、

序詞以外には用ゐられしこと極めて少かりしが、古今に至りて頓に其數を增し來り、此集となりては全歌の略四分の一は、かけ詞を有するものにして、中には一首中に其數個を具ふるものあり。

海人のかるみるめをなみにまがへつゝなぐさの濱を尋ねわびつる。

緣語は萬葉になし。古今には少しく使用せられたり。此集に至りて激增して古今に數倍せり。一首中に四五を連ね、相關連せしめたる例に乏しからず。

ふしわびぬ篠の小笹のかり枕はかなの露や一よばかりに。

夏びきの手引きの絲の年へても絕えぬ思ひにむすぼほれつゝ。

難波人如何なるえにか朽ちはてんあふことなみに身をつくしつゝ。

の如し。枕詞、序詞を用ゐることは少くなれり。偶これあるも多くは古來常套の「足引の」「梓弓」「神風や」「さゝ波や」の類に過ぎず。序詞は數に於ては極めて鮮きも、幾分の工夫を凝したるものに乏しからず。歌意に呼應して神韻の縹渺たるを覺えしむるものあり。

櫻咲く遠山鳥のしだりをのながゝし日もあかぬ色かな。

の如し。又單に語調を整ふる爲に用ゐられしも固より少からずと雖、其多くは巧妙なり。譬喩は萬葉集に於ける修辭の最重要なるものにして、直喩、隱喩、諷喩、併び用ゐられたり。古今以後の諸集亦これを忘れざりしと雖、其使用の方法に於て少しく變化を來せり。即ち單純なる直喩は漸く減じて隱喩、諷喩の盛となりしことなり。隱喩には「涙の淵」「月より落つる雁」「梢によするあまのつりふね」「入日を洗ふ沖つ白波」等の如きあり。諷喩は、

うつろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛のうら風。

是、和泉式部が、其夫和泉守道貞に忘れられて、敦道道親王に通ずと噂立ちたる頃、赤染衞門が戒めたる歌なり。斯くの如く全く他をいふが如き態度を以て叙述したるものなり。次に

長らへてなほ君が代をまつ山のまつとせし間に年ぞ經にける。

里はあれぬ尾の上の鐘のおのづから待ち來し宵も昔なりけり。

の如く句の項に同音を繰り返すも少からず。此修辭は萬葉以來のものを習套したるものなり。字餘りは萬葉に比しては頗る減少したれども、古今に比して大差なし。西行の、

風になびく富士の烟の空に消えて行方もしらぬわが思ひかな。

の如く二個新にあるもあり。或は、

さもあらばあれ暮れ行く春も雲の上にちる事しらぬ花し匂はゞ、

の如く二字も多きあり。されど多くは母韻を含めるものにして、耳に快ならざるが如きは稀なりとす。反覆は萬葉に於ては盛に用ゐられしものなるが、古今に至りて殆其あとを絶ち、新古今に於ては皆無なり。唯一首

明日よりは志賀の花園稀にだに誰かは訪はむ花のふるさと

といふものあれど眞の反覆にはあらず。次に又漢詩文の影響の格調用語の上にあらはれたるは注意せざるべからざる所なり。

青柳の糸に玉ぬく白露のしらずいく世の春か經ぬらむ。

の漢詩文の直譯調なるは既に先輩の言へる所なるが、此他

いつしかと荻の葉むけの片よりにそゞや秋とぞ風もきこゆる。

窓近きいさゝむら竹風吹けば秋に驚く夏の夜の夢。

昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山時鳥。

の如きも亦其影響にはあらじか。

新古今の修辭について記すべきこと大約右の如し。然らば是等は如何なる動機によりて試みられ、又如何なる結果を與へたりや。約言すればそは在來の單調、纖弱なる調に倦きて、これを矯正せんとしたる結果なり。省略法、名詞止を用ゐ、漢詩文調を加味すれば歌調は自から緊張せらる。倒置法は言はんと欲する重要部分を最初に披瀝するを以て、深き印象を與ふるを得べし。隱喩、諷喩、かけ詞、緣語を用ゐ、枕詞序詞、反覆等を鮮くし、或は全く廢止したるが如き、內容の充實をはかりたるものなり。斯くの如くにして新古今の歌風はなれり。

此集の價値については古來論議の存する所、然れども予を以て見れば、此集を排す

るものは皆紀記萬葉の古扑に迷ひて、他を忘れたるものにして、彼の眞率はもとより貴ぶべきものなりと雖、是の技巧も亦賞せざるべからざるなり。これを例せば、紀記萬葉は墨畫なり。野生の櫻花なり。淡泊と瀟洒とを以て優る。新古今は彩色畫なり。花壇に植ゑたる牡丹なり。精緻と濃艶とを以て秀てたり。人各好む所を異にすと雖、誰か墨畫を愛して彩色畫を破棄し、櫻花を好んで牡丹に唾するものあらむや。

駒とめて猶水かはん山吹の花の露そふ井手の玉川。

天の原富士の煙の春の色の霞になびくあけぼの丶空。

夕月夜汐みちくらし難波江のあしの若葉をこゆる白浪。

みしま江や霜もまだひぬ芦の葉につのぐむ程の春風ぞ吹く。

うらみわびまたじ今はの身なれども思ひなれにし夕くれの空。

君まつと閨へも入らぬ槇の戸にいたくなふけそ山の端の月。

稀にくる夜半もかなしき松風をたゑずや苔の下にきくらむ。

ほの〳〵と春こそ空に來にけらし天のかぐ山霞たなびく。

山里の春の夕くれ來て見れば入あひの鐘に花ぞちりける。

道のべの草の青葉に駒とめてなほ故郷をかへり見るかな。

武藏野や行けども秋の果ぞなきいかなる風の末に吹くらむ。

其艶麗、其幽寂、焉んぞこれを他集に見ることを得むや。又技工は最も重んずる所にして是他集に類なき所なり。

難波潟かすまぬ波もかすみけりうつるもくもる朧月夜に。

小山田の庵ちかくなく鹿の音に驚かされて驚かすかな。

緣語の使用の盛なりしも亦技巧を重じたるによる。次に注意せざるべからざるは、叙景歌の發達なり。遠く萬葉の頃にありては長歌にも叙景の歌尠からずと雖、古今以來は多く主觀にのみ陷り、天然の情景を客觀的に描寫したるもの殆なかりき。然るに時代の推移は此方面の開拓を促し、此集に至りては、其數に於て、果又技倆に於て、嶄然として秀づるに至れり。其秀逸なるものをあくれば。

旅人の袖ふきかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし。

和歌の浦を松の葉越にながむれば梢によするあまの釣舟。

花の色にあまぎる霞立ちまよひ空さへにほふ山ざくらかな。

ほの〳〵と有明の月かげに紅葉ふきおろす山おろしの風。

なごの海の霞の間よりながむれば入日をあらふ沖つ白浪。

志賀の浦や遠ざかり行く波間より氷りて出づる有明の月。

以上は此集の長所にして他集の及ばざる所なりと雖、しかも其間に自から病弊の存するは免れ難きなり。即ち往々にして難解に、或は曖昧なるものあり。

年もへぬいのるちぎりは初瀬山尾の上の鐘のよそのタぐれ。

故郷も秋は夕を形見とて風のみおくる小野の篠原。

知られじな同じ袖には通ふとも誰が夕ぐれとたのむ秋風。

尋ねても袖にかくべきかたぞなき深き蓬の露のかごとを。

は内容を多からしめむとして難解に陥れるもの、又、

霞立つ末のまつ山ほの〳〵と波にはなるゝ横雲の空。

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ。

の如きは一讀意味明瞭なるが如しと雖、人毎に解釋を異にし、其いづれが作者の意志なるかを疑はしむ。これ徒らに餘韻に重きを置きたるが爲ならずんばあらず。

猶一つ忘るべからざる點は、此頃に至りて本歌取りの盛に行はれしことなり。元來古の詩或は成句を暗誦して慢りとなすは、平安中期頃よりの傾向にして、其時代の物語を見ば古詩歌、故事の引用の多きに驚くべし。これが歌にあらはれしもの即ち本歌取りにして、古歌の詞をかり、趣興を模して一讀其いづれより來れるかを知らしむるが如く作れるなり。

今日だにも庭を盛りとうつる花消えずはありとも雪かとも見よ。

は古今の「今日こずは明日は雪とぞふりなまし消えずはありとも花と見ましや」の詞をとれるなり。

むかし見し春は昔の春ながらわが身ひとつのあらずもあるかな。

は古今「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」を本歌とし、

ことわりの秋にはあへぬ涙かな月の桂もかはる光に。

は古今の「千早ふる神のいかきにはふ蔦の秋にはあへず紅葉しにけり」「久方の月の桂も秋は猶もみぢすればや照りまさるらむ」の二歌を合せて一つとしたるが如きもの、

駒とめて袖打ち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ。

は萬葉の「くるしくも降りくる雨か三輪が崎佐野のあたりに家もあらなくに」より脱化したるものなり。かくの如きの類枚擧に遑あらず。此方法は即ち思想が因襲的となりしことを示すものにして、即ち古き型に囚はれたるものなり。巧は即ち巧なりと雖、これ決して此集の愽りにはあらざるなり。

前にも言へることく此集の特色は技巧にあり。内容の充實を努めたりと雖、言ふ所皆在來の思想を補綴するのみ。茲に思想の他と異る點については多く述ぶべきなし。若し強ひて言はば、戀の歌の愈女々しくなりて、逢はれぬにつけ、つれなきにつけ、さては後朝の別れにつけて、徒らに涙をながし、或は涙川に身も浮きぬべきをなげき、床の霜枕の氷に契りかたからぬ人をうらめる類のみ。萬葉に見えたる熱烈の戀は勿論、

古今のそれよりも尙一層女性的となれり。厭世の觀念は集中至る所にあらはれたり。これ固より當時の思潮をあらはすものにして、さらぬだに佛敎の勢力漸く扶殖せられし時にあたりて、花の如く榮えし平家の、一朝にして西海の泡沫と消えしを見たる時人、いかでか世の無常を感ぜざらん。千載集に始めて神祇、釋敎の部を置かれ、此集も亦それにならへるは蓋し時世の要求に從へるもの、而して其神祇といふも、本地垂跡、和光同塵のことを歌へるもの多くして、眞にわが祖神の盛德、威靈をたゝへしものは尠なし。就中、社頭納涼の如き題を設けしは神に對する畏敬の念薄きを示すものにして、宣長正明の二人の爲に痛罵せられし所なり。

此集の歌人は後鳥羽上皇を始めとして、攝政藤原良經、源通具、藤原定家、同家隆同雅經、同有家、同秀能、等は各歌壇の雄將なり。僧にては西行、寂蓮、慈圓を最とし、女流にては式子內親王、俊成女、宮內卿等を優れたりとなす。上皇の御製の品位高くして洵に王者の如くなるは申すも畏し。

見渡せば山もとかすむ水無瀨川夕は秋と何思ひけむ。

みよしのゝ高根の櫻散りにけり嵐も白き春の曙。

淋しさは深山の秋の朝くもり霧にしをるゝ槇の下露。

の如き誰かよく企て及ぶ所ならん。道に志深くまし〳〵て、隱岐にうつり給ひて猶眞砂の月に古を偲びて此集を放ち給はざりしこと、承るだに畏き極みならずや。良經は身華胄に生れ、若冠にして位人臣を極め、頗る多技多能なり。和歌は最長ずる所、有名なる人すまぬ不破の關屋の板庵あれにしあとはただ秋の風。

の詠の如きは此集歌風の代表として見らるゝものにして其他秀逸極めて多し。不幸中年にして夜賊の爲に刺されて薨ず。歌集あり月清集といふ。號を秋篠月清といふを以てなり。通具は土御門內大臣通親の子にして家系を以てまさり。撰者中の主宰者なりしもの〻如し。其詠ずる所常に白樂天の詩風ありと稱せらる。時人の推重する所なりき。

深草の里の月かげさびしさも住みこしまゝの野邊の秋風

定家は千載の撰者俊成の子にして、門地に於て既に他を壓せるに、歌に巧みにして實に此集の大立者なり。歌風巧緻、只管字句の彫琢をことゝす。

春の夜の夢のうきはしとたえして峯にわかるゝ横雲の空。

歸るさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月。

の如き蓋し最も得意の詠ならん。然れども彼は此集の撰については充分其意志を遂行することは能はず、常に娛まざりしことは明月記に述ぶる所を以ても明らかなり。後、新勅撰を撰びて其意を果せりと傳へらるゝも蓋し眞ならん。後人歌聖として人麿貫之と併び稱す。徹書記の如きは「歌道に於て定家を難ぜん輩は冥加もあるべからず。罰をも蒙るべきなり」と言へり。其尊重推して知るべし。斯くの如き所以は固より其子孫の歌界の支配者となりしによると雖、彼の實力のこれに伴ふにあらずんば焉ぞよくかゝるを得んや。歌集を拾遺愚草といふ。家隆は中納言光隆の子、宮內卿に任ぜられ二位に至る。世に壬生二位と號す。歌を俊成に學ぶ。俊成彼を以て未來の歌仙たるべしと言へりといふ。西行曾て其歌稿御溜裳川及び宮川の兩歌合を「末代に貴殿ばかりの歌よみはあるまじき也」といひて家隆に托して修行の途に上れりと傳へらる。又後鳥羽上皇始めて歌を學ばんとせられし時、良經が師として彼を推擧したるが如き、如何

に其名聲の嘖々たりしものなるかを知るに足らむ。且や新古今撰進の當時は。已に齢たけて歌界に古老として尊ばれし時なりしなり。彼は傳ふる所によれば一代のうち詠歌六萬首に上れりといふ。蓋し其詠ずるや多くは興に乘じたる即吟にして、かの定家等の如く想を構へ辭を練るに腐心するが如きことはあらざりしなり。されば其詠ずる所生氣に滿ちて活躍するが如きものあれば、又時に凡庸見るに堪へざるものなきにあらず。

下紅葉かつ散る山の夕時雨ぬれてやひとり鹿のなくらむ。

明けぬるか衣手寒し菅原や伏見のさとの秋の初風。

あけば又越ゆべき山の峯なれや空行く月の末の白雲。

は平板にして而も餘韻の嫋々たるもの、蓋し彼が作中の尤なり。歌集を壬二集といふ。

雅經は刑部卿頼經の子、左兵衛督從三位に至る。飛鳥井家の祖なり。歌を俊成に學ぶ。其詠ずる所一種の神韻ありて品位高し。

たづね來て花に暮せる木の間より待つとしもなき山の端の月。

うつり行く雲にあらしの聲すなり散るかまささのかつらぎの山。

の如きは眞に絶唱と稱すべし。若かりし時、加茂に參詣して「よの中に數ならぬ身の友千鳥鳴きてそ渡れ加茂のかはらに」と詠みしに、社司の夢に神託ありて、かゝる歌よみたるものあれば必ずこれを求めよと、社司即ち普く求めて其雅經なることを知りこれを告げたりといふ。事頗る荒誕なりと雖、其歌界に重きをなせるは以て知るべき

有家は大貳重家の子、左京大夫顯輔の孫、即ち六條家の系統の歌人なり。其歌風慎重にして輕浮の體なく、而も優麗なり。

夢かよふ道さへ絶えぬ吳竹の伏見の里の雪の下をれ。

秀能は北面の武士なり。歌に巧なるを以て上皇の寵を得、精撰の歌合に於て九首の歌を入れられ、且上皇の對手となりしは時人のうらやむ所なりき。

露をだに今はかたみのふぢ衣あだにも袖をふくあらしかな。

西行は俗名を佐藤義清といふ。後鳥羽院に仕へて北面の武士たり。若くして歌をよくす。後薙髮して圓位と號し諸國を遍歷して詠歌を事とし、奇行多かりしことは皆人の知

る所なり。其歌風は幽寂の趣に富みて、些の苦心のあとを見ず、佳調妙趣人を感ぜしめざるはなし。

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮。

道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ちとまりつれ。

津の國の難波の春は夢なれや芦のかれ葉に風渡るなり。

の如きは人口に膾炙する所なり。寂蓮は俗名を定長といふ。俊成の甥にして若かりし時は養はれて其子たりしも、定家生れしを以て自から退いて僧となる。歌才あり。彼は鎌首を捧げ、顯昭は獨鈷を持ちて、常に歌の論議を闘はしたるは、有名なる話なり。勅命を蒙りて新古今の撰者たりしも早く歿したり。

くれて行く春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟。

今はとてたのむの雁も打ちわびぬ朧月夜の明けぼのゝ空。

の如き秀逸に乏しからす。慈圓は關白忠通の子、若くして西行に師事し、風體自から其に似たり。

ちりちらず人も尋ねぬ故里の露けき花に春風ぞふく。

然れども歌數の多きに比して、佳なるもの尠きは、多作の殃する所か。式子内親王は後白河天皇の皇女なり。加茂の齋院に立ち給ひしが、後薙髪して法名を承如法と申し給ふ。

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする。

桐の葉も踏みわけかたくなりにけり必ず人をまつとなけれど。

の如きは名吟なり。俊成女は歌才父の娘たるに耻ぢず。通具に嫁す。

あだに散る露の枕にふしわびてうづらなくなり床の山風。

詠ずる所技巧に過ぎて却て趣を失へるものあるは瑕瑾といふべし。宮内卿は右京太夫師光の女にして、後鳥羽上皇の官女なり。道に志深く一歌を詠ずるにも終日終夜籠居して苦心慘澹たりしといふ。千五百番歌合に若年の身を以て特に選ばれしは斯界の名譽として永く後世に傳はる所なり。惜むべし夙に歿す。歌風纖細女子の特性をあらはせり。

うすく濃く野邊の綠の若草にあとまで見ゆる雪の村消え。
逢坂や梢の花を吹くからに嵐ぞかすむ關の杉村。

予はこれを以て大體に於て此集の評論を終れり。尙此集に關する先輩の著書に就いて一言せむ。

此集の註釋書は多からず。最も古きは藤原爲家の作なりと稱せらるゝ

九代抄

なり。難句の註をなせるものにして今日より見ればとるに足らず。次に

新古今集聞書　一卷

あり。東野州常縁の註にして細川幽齋の增補せるものなり。一々引き歌をあげたるを便利とすべし。德川時代に入りて、

新古今集增抄　二十卷

あり。これ松永貞德の高弟加藤盤齋の著はす所、野州の聞書に自說を加へたるものにして、解釋叮嚀從ふべき說多し。季吟の抄に壓せられてあらはれざるは惜むべし。是と略同時に出てたるを北村季吟の

八代集抄

となす。古來の諸說を網羅し、且つ自說をもあげ、極めて便利なる書なり。されど解釋の正鵠を失へるもの多きを失とす。此頃よりして國學漸く起り來り、從て歌學も眞研究に入り、歌論盛となり、紀記萬葉の古體を尊ぶもの、古今の正雅を重んずるもの新古今の華麗を愛するもの、各其所見をあげて論難したり。荷田在滿論八の國歌は即ち新古今を以て規範となすべしといへる有力なるものにして、種々の反對論ありしにも拘はらず、其所論は一部の歌人に認められたり。其結果として此集の價値を示すべくこれが註釋を企てしものあり。即ち本居宣長の

美濃の家苞

は集中の佳調と、難解のものとを抽出して、丁寧に註釋せるもの、從來の誤謬を破れる點極めて多し。然れどもあまりに字句に拘泥して、往々肯綮にあたらざるものあり。

次て石原正明は
尾張の家苞
を著す。其意宣長の所説の誤を指摘し、新古今の眞價を世に紹介せむとするにあり。議論明快、眞に快刀亂麻を斷つが如し。蓋し美濃の家苞に優れる好著なり。明治以前の註釋書は右の數種に過ぎず。此他註釋にはあらざれども、契沖の門人野田忠肅の著に

新古今和歌集類礎　五卷

あり。集中の歌を各句の末字によりて類別したるものなり。正德五年に成りしものにして、新學風の未だ盛ならざりし時代の產物なりと雖、其勞は多とすべし。又此集の佳調を選べる市岡猛彥の

新古今もろかづら

といふあり。美濃家苞の影響によりて成れること其序にも見えたり。

明治に入りては些々たる標註の如きは無きにあらざれども、先人の説を抽出したるのみにして見るにらず。足其間にありて鹽井正男氏の

新古今集詳解　明治書院發行

は解釋頗る詳細且批評をも加へ眞に詳解の名に背かず。良書といふべし。

新古今集に關する文獻は右に述ぶる所を以て盡きたり。これを萬葉古今の豐富なるに比するに實に十が一に及ばず。これ學界の恨事にあらずや。況んや此集が彼の二集にして難解の歌多きに於てをや。予や不敏自から顧みず此書を著はす。若し此缺陷を補ふの一助たらば幸甚。

明治四十二年十二月

著者識

凡例

一、本書は本居宣長の「古今和歌集遠鏡」に倣ひ、口語を用ゐて新古今和歌集を註せるものなり。

一、口語は現代標準語に據れり。

一、助辭の解釋法は、大體に於て宣長が遠鏡に規定せる所に則れり。今煩を厭ひて茲に說かず。

一、書中㊀㊁㊂とあるは枕詞又は序詞をあらはせるなり。是等は一首の解釋上要なきものなれば、此記號を附して省略に從へり。圈中の白字は句の順序を示せるなり。序文の解釋中、方形を以て圍みたる文字あるも亦枕詞的に用ゐられしを示せるものにして、等しく不要の文字なり。

一、解釋の側に線を引きたるは、歌の詞には無くして、おのづから其意の含まれたるを補ひあらはしたる部分なり。

一、贈答の歌の外は、作者の身分によりて用語の差別を設けず。贈答の歌は一首の風韻を傳へんが爲必要に應じて敬語を用ゐたり。

一、歌に句讀は要なきが如くなれども、意義を解く上に於て便利多ければこれを附したり。句點は獨立したる文章に分るゝを示す場合の外、歌の中途に附することなし。文法上終止形となりながら、讀點を用ゐたるは、倒置法即ち下よりかへりて續く體なるを示せるなり。

一、美濃とあるは本居宣長の美濃の家苞を、尾張とあるは石原正明の尾張の家苞を、又單に抄とあるは北村季吟の八代集抄を指せるなり。

一、先輩の解釋區々に別れ、而も予に創見のこれを排するに足るべきなきは、比較的優れりと思へる說に從ひて說けり。書中往々尾張に從ふ、詳解に從ふ、等とあるはこれなり。

一、古說の批評は歌意の註釋と共に著者の怠らざりし所なり。

一、本書は北村季吟の八代集抄本を基とし、流布の二十一代集本を參考して補訂せり。

目次

序……一頁
春歌上(卷第一)……九頁
春歌下(卷第二)……四〇頁
夏歌(卷第三)……六三頁
秋歌上(卷第四)……九五頁
秋歌下(卷第五)……一三九頁
冬歌(卷第六)……一七二頁
賀歌(卷第七)……二一七頁
哀傷歌(卷第八)……二三四頁
離別歌(卷第九)……二七〇頁
羈旅歌(卷第十)……二八三頁

戀歌一（卷第十一）……三一二頁
戀歌二（卷第十二）……三三九頁
戀歌三（卷第十三）……三六一頁
戀歌四（卷第十四）……三八九頁
戀歌五（卷第十五）……四二一頁
雜歌上（卷第十六）……四五〇頁
雜歌中（卷第十七）……四九八頁
雜歌下（卷第十八）……五三〇頁
神祇（卷第十九）……五八〇頁
釋教（卷第三十）……六〇二頁
漢序……六二四頁

新古今和歌集遠鏡

文學士　鴻巣盛廣著

新古今和歌集序

やまとうたは、昔天地開けはじめて、人の仕業いまだ定まらざりし時、蘆原の中つ國の言の葉として、稲田姫素戔嗚尊と御結婚ナサレテ素戔嗚尊ト稲田姫トガ御結婚ナサレテ素戔嗚尊ト云フ里デ「八雲立つ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を」ト御詠ミナサレタノカラ尊ハッテキルワイ。「蘆原の中つ國の言の葉」の葉は蘆の緑なり。芦原の中つ國は日本國の異名なり。

和歌ト云フモノハ、昔天地ガ始メテ開ケタバカリデ人ノ爲スベキ業モ未キマラナカッタ時、日本國ノ言葉トシテ素戔嗚尊ト稲田姫トガ御結婚ナサレテ素戔嗚尊ト云フ里デ「八雲立つ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を」ト御詠ミナサレタノカラ尊ハッテキルワイ。「蘆原の中つ國の言の葉」の葉は蘆の緑なり。芦原の中つ國は日本國の異名なり。

しかありしより此方、其道盛りに起り、其流今に絶ゆること無くして、色に耽り心を述ぶる媒とし、世を治め民を和らぐる道とせり。

夫レカラシテ以來、其和歌ノ道ガ盛ニ起ッテ、其和歌ノ系統ガ今迄絶エルコトガ無ク、男女ガ戀ニ溺レ、心ヲ思ッテキルコトヲ言ヒアラハス取リツギノ物トシ、又ハ世ヲ治メ、民ノ心ヲ穩カニスル道トシタ。

かゝりければ、代々のみかどもこれを捨て給はず、撰び置かれたる集ども家々の弄び物として、言葉の花、殘れる木の下難く、思ひの露、洩れたる草がくれもあるべからず。

斯樣ナ有樣デアツタカラシテ、代々ノ天子樣モ此道ヲ御捨デ遊バサレズ、撰ンデ置カレタ澤山ノ勅撰集ナドヲ、家々ノ慰ミ物トシタノデ、美シイ詞ノ花ヲ飾ツタ歌ガ今迄ノ歌ノ集ニ選ビ殘サレタ所モ減多ニナク、又心ニ思ツテヰル「ヲ述ベタ立派ナ歌ガ(思ひの露)取リ洩サレテ居ル所モアルマイ。大抵昔ノ歌集ニ出テ居ルダラウ。木の下は花に、草かぐれは露によせて言へり。

しかはあれど、伊勢の海清き渚の玉は拾ふとも盡ること無く、泉の杣繁き宮木は引くとも絶ゆべからず。物皆かくの如し。歌の道また同じかるべし。

然シナガラ伊勢ノ海ノ綺麗ナ濱邊ニ落チテヰル玉ハイクラ拾ツテモ拾ヒ盡スコトガ無ク、泉ノ杣ガ切ツテ引キ出ス澤山ノ皇居ヲ立テルノニ使フ材木ハ、イクラ伐リ出シテモ無クナルコトハナイ。何デモ物ハ此通リデ殘ラズ取リ盡スト云フ「ハ出來ナイモノダ。歌ノ道モ亦コレト同樣デアラウ。昔カラ澤山ノ歌集ガ出來テヰルガ殘ラズ選リ盡シテハ居ラヌ。＊萬葉集「宮木引くいづみの杣に立つ民のやむ時もなく思ひ渡るかも」

是によりて右衞門督源朝臣通具、大藏卿藤原朝臣有家、左近衞中將藤原朝臣定家、前上總介藤原朝臣家隆、左近少將藤原朝臣雅經等におほせて、昔今時を分たず、高き賤しき人を嫌はず、目に見えぬ神佛の言の葉も、鳥玉の夢に傳へたることまで、廣く求め、普く集めしむ。

ダカラシテ、右衞門督源朝臣通具、大藏卿藤原朝臣有家、左近衞中將藤原朝臣定家、前上總介藤原朝臣家隆、左近少將藤原朝臣雅經等ニ申シ付ケテ、昔ノ歌デモ今ノ歌デモ時ノ區別ヲ立テズ、又詠ンダ人ノ身分ノ高イノデモ低イノデモ、人ニ寄ツテ選リ嫌ヒヲセズ、或ハ又目ニ見エナイ神佛ノ歌ノ「烏玉の」夢ニ見タト傳ヘラレテヰルノ迄、何デモカデモ廣ク捜シ、一タイに世ノ中ニ行キ渡ツテ集メサセタ。

各選び奉れる所、夏引の絲の一筋ならず、夕の雲の思ひさだめ難き故に蘆の下根の亂れるふしも多かれば、綠の洞花香はしき晨、玉の砌風涼しき夕、難波津の流を汲みて澄み濁れるを定め、淺香山のあとを尋ねて深き淺きを分てり。

此五人ノ人々ガメイ〳〵ニ選ンデ奉ツタ歌ハメイ〳〵其好ミ〳〵デ「夏引の糸の」一筋デナク、色々デ「夕の雲の」何トモハッキリ極ツタ所ガナイカラ、從テ「芦の下根の」マチ〳〵ニ亂レタ所モ多カツタノデ、俺ハ仙洞御所ノ花ガ良イ香ニ咲イタ朝ヤ、玉ヲ敷イタヤウナ立派ナ庭ニ、風ガ涼シク吹ク夕方ナドニ、此等ノ歌ヲ、歌ノ父ト言ハレテヰル昔ノ難波津ノ歌ノ風ニ從ツテ、善イカ悪イカヲ定メ、又歌ノ母ト云ハレル淺香山ノ歌ニヨツテ歌ノ上手下手ヲ分チ定メタ。サウシテ此集ニ入レタノダ。難波津の歌は「難波津にさくやこの花冬ごもり今を春べと咲くやこの花」。淺香山の歌は「淺香山かげさへ見ゆる山の井の淺き心は我がもたなくに」。

萬葉集に入れる歌これを除かず。古今より此かた七代の集に入れる歌をばこれを載することなし。

萬葉集ニ入ツタ歌ハ取リ除ケズニ此集ニ入レテアル。又古今集以下ノ後撰拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、ノ諸集ニ入ツタ歌ハ又此集ニ載セルコトハナイ。

たゞし詞の園に遊び、筆の海を汲みても、空飛ぶ鳥の網を洩れ、水に棲む魚の釣を免れたる類昔も無きにあらざれば、今も亦知らざる處なり。

然シナガラ詞ノ園ニ遊ンデヨイ歌ヲ尋ネテモ、筆ノ海ヲ汲ンデ、澤山ノ内カラ選ンデモ、空ヲ飛ブ鳥ガ獲師ガカケタ網ニカヽラズニ通ゲテ終ヒ、水ニ棲ンデヰル魚ガ釣針ニカヽラズニ助カルヤウニ善キ歌ガ選バレズニ洩レタ例モ昔ノ歌集ニアルヿダカラ、此度モ矢張左様ナヿガ無イトハ受合ハレヌヿダ。

すべてあつめたる歌、二ちゞはた卷、名づけて新古今和歌集と云ふ。

集メタ歌ノ總數ハ二千首、卷數ハ廿卷デ、新古今和歌集ト云フ名ヲ付ケタ。

春かすみ龍田の山に初花を偲ぶより、夏は妻戀ひする神なびの郭公、秋は風に散る葛城の紅葉、冬は白妙の富士の高根に雪つもる年の暮まで、皆折に觸れたるなさけなるべし。しかのみならず、高き屋に遠きを望みて民の時を知り、末の露本の雫によそへて人の世を悟り、玉鉾の道の邊に別れをしたひ、天さかる鄙の長路に都を思ひ、たかまの山の雲居のよそなる人をこひ、長柄の橋の波に朽ちぬる名を惜しみても、心内に動き詞外にあらはれずといふことなし。

春霞立田ノ山ニ咲イタ初咲ノ櫻ガ霞ノ奥ニ見エナイノヲ、最早咲イタカドウダカト思ヒヤル春ノ歌ヲ始メトシテ、雪ヲ慕ツテ鳴ク神南備山ノ郭公ヲヨンダ夏ノ歌、秋風ニ吹カレテ散ル葛城山ノ紅葉ヲ詠ンダ秋ノ歌冬眞白ナ富士ノ高根ニ積ツタ雪ヲ詠ンダ歌ナド、春夏秋冬ト經テ年ノ暮迄四季ノ間ノ歌、コレハ其時イロイロノヿニ感ジタ人ノ情ガアラハレタモノデアラウ。ソレバカリデナク、高キ御殿ニ御登リナサレテ遠ノ烟デ人民ガ富ンダ時ヲ知リ給フ賀ノ歌、草ノ葉末ニ宿ツタ露ト葉ノ本ノ方ニ留イタ露ノ落チルノガ遅イト云フモ早イト云フモ僅カノ差デアルヿニ例ヘテ此世ノハカナイコトヲ悟ツタ哀傷ノ歌玉鉾の道ノホトリデ離別ヲ悲シム離別ノ歌天さかる田舎ノ遠イ道ヲ辿リナガラ、都ヲ慕フ羇旅ノ歌、高間ノ山ノ頂ニカヽツタ白雲ノヤウニカケ離レテ近ヅクコトノ出來ナイ人ヲ戀フル戀歌、長柄ノ橋ガ波ノ爲メニ朽ツテシマツテ、長柄ト云フ名ニ反シテヰルコトヲ惜ム雜歌ナド、心ガ身ノ内ニ起ルトハ、言葉トナツテ外ニ顯ハレヌト云フヿハナイ。

1. 此集卷「行かむ人來む人しのべ春霞立田の山のはつざくら花」 2. 同夏「おのが妻戀ひつゝ鳴くや五月暗神南備山の山ほとゝぎす」 3. 同秋「飛鳥川もみぢ葉流るゝ葛城の山の秋風吹きぞしぬらし」 4. 同冬「田子のうらに打出てゝ見れば白妙の富士の高れに雪はふりつゝ」 5. 同賀「高きやに登りて見れば烟立つ民のかまどは賑ひにけり」 6. 同哀傷「末の露本の雫や世の中のおくれさきだつならひなるらむ」 7. 同離別「玉鉾の道の山風寒からば片見がてらに君なんとぞおもふ」 8. 同羇旅「天さかる鄙の長ぢを漕きくればあかしのとより淡路島見ゆ」 9. 同戀「よそにのみ見てやみなむ葛城や高間の山の峯のしら雲」 10. 同離「年ふれば朽ちこそまされ橋柱昔なからの名だにかはらで」

況や住吉の神はかたそぎの言葉を殘し、傳敎大師はわが立つ杣の思を述べ給へり。斯の如き知らぬ昔の人の心をもあらはし、行きて見ぬ境の外の事をもしるは唯此道ならし。

マシテ其他ニモ住吉ノ神ハ「夜や寒き衣やうすきかたそぎの行きあひの間より霜やおくらむ」ト云フ歌ヲ殘シテ置カレ(神祇)。又傳敎大師ハ「あのくだら三みやく三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせ給へ」ノ歌ヲ詠ンデ思ヒヲ述ベテ居ル(釋敎)。此樣ナ知ラヌ昔ノ人ノ心マデモ明ラカニスルヿガ出來、又行ツテモ見ナイ他所ノコトナドモ知ルヿノ出來ルノハ唯此歌ノ道バカリデアラウ。以上四季ヨリ神祇、釋敎迄十二部に

分ちたることをいへるなり。

抑昔は五度讓りし跡をたつねて天づ日嗣の位に備はり、今は八隅知る名を免れて藐姑射の山にすみかを占めたりといへども、皇（スベラギ）は怠る道を守り、星の位は政を輔けし契を忘れずして、天の下の繁きことわざ雲の上の古にもかはらざりければ、萬の民春日野の草のなびかぬ方無く、四方の海秋津洲の月靜に澄みて、和歌の浦のあとを尋ね、敷島の道を弄びつゝ、此集を撰びてながき世に傳へんとなり。

一體俺が位ニ即イタ時ハ五度モ辭退シテカラ即位シタ古ノ賢イ天子ノ爲タ〻サマネテ、幾度モ辭退シテカラ天子ノ位ニ上リ、サウシテ今ハ天下ヲ支配スル天皇ト云フ名ヲ免レテ、位ヲ退イテ上皇トナツテ、仙洞御所ニ住ンデハヰルガ、併シ今ノ天子様ハ無爲ニシテ化スト云ト聖人ノ道ヲ守ツテ政ヲ自分デナサレズ、又、朝廷ノ家來ドモハ、前方、俺ガ天子デアツタ時ニ政ヲ補佐シタ關係ヲ今モ忘レナイデ、從テ俺ハ天下ノ面倒ナ政治ヲ取アツカフ〻ガ、天皇デアツタ昔ト變ル所ガナカツタカラ、天下ノ澤山ノ人民ドモガ、春日野ノ草ガ風ニ靡クヤウニ靡カナイモノハナク、四方ノ海ノ上モ、日本國内モ靜カニ治ツテ、和歌ノ道ノ古イ跡ヲ尋ネ、歌ノ事ヲ慰ミニシテ、此集ヲ撰ビ拵ヘテ遠イ後ノ世迄モ傳ヘヨウトスルノダ。

かの萬葉集は歌の源なり。時うつりことへだゝりて今の人知る事かたし。延喜のひじりの御代には四人に勅して古今集を撰ばしめ、天暦のかしこき帝は五人に仰せて後撰集をあつめ給へり。其後、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載等の集は皆一人これをうけたまはれる故に聞き洩らし見及ばぬ所もあるべし。よりて古今、後撰のあとを改めず。五人のともがらを定めて記し奉らしむるなり。

アノ萬葉集ハ歌ノ本モトダ。併シナガラ今デハ時ガダチ、事柄モ遠イ昔ニ距ツテヰルカラ、今ノ人ガ此集ノ〻ヲ知ル〻ハムツカシイ。延喜ノ聖代ト云ハレル醍醐天皇ノ御代ニハ、紀貫之、凡河内躬恒、紀友則、壬生忠岑ノ四人ニ勅ヲナサレテ古今集ヲ撰バシメラレ、天暦ノ賢帝村上天皇ハ、源順、大中臣能宣、坂上望城、紀時文、清原元輔ノ五人ニ命セラレテ後撰集ヲ編輯ナサレタ。其後、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載等ノ集ハ皆一人デ其撰ヲシタカラ聞キ洩ラシタリ目ノ屆カナカツタ所モアルデアラウ。ダカラ、此度ハ左樣ナ缺點ノ無イヤウニ、古今、後撰ノ時ノコトヲ改メズニ、五人ノ輩ヲ定メテ歌ヲ記シテ獻上セシメラル、ノデアル。

其上自ら定めて手づから磨けることは、遠くもろこしの文の道を尋ぬれば濱千鳥の跡ありといへども、我國大和言の葉の始まりて後、吳竹の世々にかゝるためしなんなかりける。

且又、天皇ガ御自分デ歌ノ善惡ヲキメ、御手ヲ下シテ親シク御選ビナサルト云フ〻ハ、遠ク支那ノ文學ノ〻ヲ調ベテ見レバ、天子ガ詩文集ナドヲ撰バレタ文書モ殘ツテ傳ツテ居ルガ、吾ガ日本デハ歌ノ道ガ始マツテ以來吳竹の代々斯ウイフ例ハ無カツタ。

此うち、自らの歌を載せたること、古き類はあれど、十首には過ぎざるべし。しかるを今、かれこれ選べる所三十首にあまれり。これ皆人の目立づべき色も無く、心止むべき節もありがたき故に、かへりていづれとわき難ければ、森の朽葉數積り、汀の藻

屑かき捨てず成りぬる事は、道に耽る思深くして、後のあさけりを顧みざるなるべし。

此代々ノ撰集ノウチニ天皇ガ自身ノ歌ヲ載セタコトハ古イ例ハアルケレドモ、ドレモ十首以上ニ越シタコトハナイヤウダ。所ガ、今俺ノハ選ンダ歌ガ三十首以上デアル。是等ノ歌ハドレモ人ガ良イ歌ダト目ヲツケル程ノ色モナク、心ヲ留メルヤウナ所モナク皆同ジヤウナツマラナイモノダカラ、却ッテドレヲ取ラウトモ分別ガツカナイカラ森の朽葉自然ト數ガ多クナリ、汀の藻屑捨テルヿモセズニ、其儘皆載セタヿハ、歌道ニ熱心ガ深クテ、後世ノ人ノ嘲ヲモ何トモ思ハナイカラデアラウ。

時に元久二年三月二十六日になん記し終りぬる。

目を賤しみ耳を貴むるあまり、石の上古き跡を恥づといへども、流を汲みて源を尋ぬる故に、富の緒川の絶えせぬ道を興しつれば、露霜はあらたまるとも、松ふく風のちりうせず、春秋はめぐるとも、空行く月の曇なくして、此時にあへらんものはこれを喜び、此道を仰がんものは今をば偲ばさらめかも。

時ニ元久二年三月二十六日ニ記シ終ッタ。

目ニ見エル近イ所ヲツマラナイトシ、耳バカリデ聞イテ目デハ見エナイ遠イ古イコトヲ貴イト思フノデ、ツヒ石の上古イ昔ノ撰集ノマネヲシタヿヲ恥カシク思フガ、併シ俺ハ歌ノ流ヲ汲ンデ、歌ノ起リヲ調ベタ爲ニ富の緒川の絶エナイ此歌ノ道ヲ盛ニシタカラ、此集ハ縱令年月ハ立ッテモ此歌ノ集ガ松ふく風の散ッテ無クナルヿナク、春秋ハメグリカハッテ何年立ッテモ空行く月の曇ルヿガナクテ、此撰集ノ時ニ生レアッタモノハ此事ヲ喜ビ、此歌ノ道ヲ尊ブ後世ノモノハ、此撰集ノアッタ今ノ時ヲ結構ナ時ダト思ヒヤラナイコトガアラウカ。屹度誰デモ思ヒ出スデアラウ。

新古今和歌集卷第一

春歌上

春立つこゝろをよみ侍りける。　攝政太政大臣

○みよし野は山も霞みて白雪の降りにし里に春は來にけり。

吉野は川ヤ野ヤ里ハ雪フ迄モ無ク、山迄モ霞ガ照ッテ、此間迄雪ガ降ッテ居タ故里ニモ春ガ來タワイ。

春のはじめの歌。　太上天皇

○ほの〳〵と春こそ空に來にけらし。天の香具山霞たなびく。

多分春ガ空ニ來タノデアラウ。天ノ香具山ニハ、ホノノリト霞ガ靡イテ居ル。天の香具山は大和にあり。

百首歌奉りし時、春の歌。　式子内親王

○山深み春とも知らぬ松の戸にたえ〳〵かゝる雪のたま水。

山ガ深イノデ、春ガ來タトモ知ラズニヲルト、松ノ枝ヲ切リ結ンデ拵ヘタ戸ニ、折々トギレドギレニ雪解ケノ水ガ軒カラ落チカヽルヨ。春とも知らぬ松と續きたる所に工夫あり。尾張惡し。

五十首歌奉りし時。

宮内卿

かきくらし猶ふる里の雪の内に跡こそ見えね、春に來に鳥。

空ガ盡ッテ矢張冬ノヤウニ雪ガ降ッテキル故里ノ雪ノ中ニ、來タ樣子コソ見エナイガ、慥カニ春ガ來タワイ。尋ネテ來ル人ハナイガ、春ハチヤント遲ハズニ來タヨ。あとこそ見えれは雪のみ降りて春の來れる樣子は無しの意と、人ならば足跡あるものなれど、春には足跡無しの義とにかけたるなり。尾張惡し。抄足らず。

入道前關白太政大臣右大臣に侍りける時、百首歌

皇太后宮大夫俊成

よませ侍りけるに、立春のこゝろを。

今日といへばもろこし迄も行く春を都にのみと思ひけるかな。

立春ノ日ト云フト、春ハ此處バカリデナク、唐土迄モ同ジヤウニ行キ渡ッテ、春ニナルモノダノニ。私ハ都バカリニ春ガ來ルヤウニ思ッタワイ。三の句の解美濃惡し。

題知らず。

俊惠法師

○春といへば霞みにけりな、昨日迄波間に見えし淡路しま山。

昨日迄遙カ沖ノ方ニ波ノ間ニ見エテキタ淡路ノ島山ハ、春ガ來タト云フト直ニ霞ンダナア。今日ハ霞デ淡路島ガ見エヌ。尋ハレヌモノダ。

西行法師

○岩間とぢし氷も今朝は解け始めて苔の下水道もとむらむ。

春ガ來タノデ、今迄岩ノ間ヲ閉ヂ籠メテキタ氷モ、今朝ハ解ケ始メテ、苔ノ下ノ水トナッテ、流レル道ヲ捜スコトデアラウ。道もとむらむの説、美濃惡し。

よみ人しらず

風まぜに雪はふりつゝしかすがに霞たなびき春は來にけり。

今日ハ風ニ混ッテ雪ハ降ッテキル。然シソレデモ、空ニハ霞ガカヽッテ、春ガ來タト云フコトガヨク分ルワイ。尋ハレナイモノダ。此歌萬葉九に、「風まじり雪はふりつゝしかすがに霞たなびき春さりにけり」とあり。

時は今春になりぬとみ雪降る遠き山邊にかすみたなびく。

冬ガ過ギテ、時節ハ今春ニナッタト、思ッテ、アノ雪ガ降ッテキル遠イ山ニ霞ガ靡イテキル。春ニナッタト云フト直グニ霞ガカヽルモノダ。此歌萬葉八に一の句「時は今は」として出てたり。

堀川院御時、百首の歌奉りけるに、殘りの雪の心を

よみ侍りける。

權中納言國信

春日野の下もえわたる草の上につれなく見ゆる春の泡雪。

春日野ノ雪ノ下カラ生エ出シタ草ノ上ニ、無情ニモ泡ノヤウナ春ノ雪ガ積ツテキル。君ハ心ノ内デ思ヒ焦レテキルノニ、其上ニ雪ガ知ラヌ顔ニ積ルトハ無情イコダ。

題しらず。　　山邊赤人

明日からは若菜つまむとしめし野に昨日も今日も雪は降りつゝ。

明日カラハアノ野ヘ行ツテ毎日若菜ヲ摘マウト思ツテ當テニシテキタノニ、其野ニ、昨日モ今日モ雪ガ降ツテキル。毎日毎日日延ベバカリデ困ツタコダ。此歌萬葉八に出づ。

天暦の御時屏風の歌。　　壬生忠見

春日野の草は綠になりにけり。若菜摘まむと誰れかしめけむ。

春日野ノ草ハ青々ト綺麗ニナツタワイ。此美シイ春日野デ、若菜ヲ摘マウト誰レガ思ヒ定メテキルダラウ。

崇德際に百首歌奉りけるとき、春歌、　　前參議教長

若菜つむ袖とぞ見ゆる、春日野の飛火の野邊の雪の村消え。

春日野ノ飛火ノ野ハ、春ガ來タノデ、今迄一面ニ眞白デアツタ雪モ所々消エテ居ルガ、最早若菜ヲ摘ム時節ナノデ、其村消エノ雪ガ若菜ヲ摘ミニ來タ少女ノ白イ袖デハナイカト思ハレルヨ。飛火野は春日にあり。此

歌貫之の「春日野の若菜摘みにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ」より脫化せり。

延喜御時屏風に　　紀貫之

行きて見ぬ人もしのべと春日野のかたみに摘める若菜なりけり。

此若菜ハ春日野ヘ行ツテ見ナカツタ人モ、其面白カツタコトヲ思ヒヤレト思ツテ春日野ノ形見トシテ籠ニ摘ンデ入レテ來タ若菜デアルワイ。かたみは形見と籠とにかけたり。

述懷百首歌よみ侍りけるに、若菜。　　皇太后宮大夫俊成

澤に生ふる若菜ならねど徒に年をつむにも袖は濡れけり。

澤ニ生エテキル若菜ハ袖ヲ濡シテ摘ムモノダガ、私ハ澤ニ生エタ若菜ヲ摘ムノデハナイガ、官位モ進マズ只年バカリ積ンデ居ルニツケテモ悲シクテ涙ニ袖ガ濡レタワイ。四の句つむは積む摘むにかけたり。五の句は澤の縁なり。

日吉の社によみて奉りける子の日のうた。

さゝ波や志賀の濱松ふりにけり。たが世に引ける子の日なるらむ。

サヾ波ノ志賀ノ濱邊ノ松ハ年取ツテキルワイ。志賀ハ古ノ都デアルカラ、定メテ宮人等ガ子日ニ松ヲ引イテ來テ此處ニ植エタコトデアラウガ、此濱松ハ一タイイツ誰ガ引イテ來テ植エタモノデアラウカ。さゝ波は地名なり。

百首の歌奉りし時。

○谷川のうち出る波もこゑたてつ。鶯さそへ、春の山かぜ。

藤原家隆朝臣

春風ニ解ケタ谷川ノ氷ノ間カラシテ打チ出ス波スラモ面白イ聲ヲ立テヽ居ル。ダノニ春ニナレバ鳴クモノトキマッテ居ル鶯ノ鳴ク聲ガ聞エナイ。早ク鳴クヤウニ鶯ヲ催促シテクレ、春ノ山風ヨ。古今集の「谷風にとくるゝ氷の隙ごとに打出る波や春の初花」、「花のかを風の便にたくへてぞ鶯さそふしるべにはやる」の二首によれり。

和歌所にて關路鶯といふことを。

○鶯の鳴けども未だ降る雪に杉の葉白き逢阪の山。

太上天皇

春ガ來テ鶯ハ鳴クケレドモ、マダ相變ラズ雪ガ降ルノデ、逢阪山ハ杉ノ葉モ眞白ニ見エル。上の句古今集の「梅が枝にきゐる鶯春かけて鳴けども未雪は降りつゝ」より出づ。

堀川院に百首歌奉りける時、殘雪の心をよみ侍りける。

春きては花とも見よとかた岡の松のうは葉にあわ雪ぞふる。

藤原仲實朝臣

春ハ花ノ咲ク時ダカラ春ガ來ルト花ガ咲イタノダト見テクレト云フヤウニ丁度花ノヤウニ、片岡ノ松ノ梢ノ葉ニ泡雪ガ降ルヨ。ヨイ眺メダ。雪ハ冬のもの花は春のものなればかく言へるなり。片岡はかた〳〵の岡の心ありと云へる八雲御抄説いかゞ。

題しらず。

まきもくの檜原も未曇らねば小松が原にあわ雪ぞ降る。

中納言家持

卷向ノ檜原デモマダ空ガ曇リモシナイノニ、小松ノ生エテキル原アタリハ泡雪ガ降ツテキルヨ。一體ドコカラ降ル雪デアラウカ。三の句曇るを霞の事としたる古抄、八代抄などの説悪し。こは古歌に、卷向の松原の霞とよめるもの多きに惑はされたるなるべし。曇られねば曇らぬにの意なり。此歌萬葉には、小松が末にとあり。卷向は大和の地名なり。

いまさらに雪降らめやも、かげろひのもゆる春日となりにしものを。

讀人不知

最早冬モスギテ陽炎ガ立ノボル春トナッタノニ、今更雪ガ降ルベキ筈ハナイ。ソレダノニ雪ガ降ルトハドウシタフヤラ。

いづれをか花とはわかむ、故里の春日のはらにまだ消えぬ雪。

凡河内躬恒

故里ノ春日ニハ最早名物ノ梅ノ花ガ咲イタノニ、タダ雪ガ消エズニヰルガ、梅ノ花モ雪モ眞白ナモノダカラドレガ雪トモ花トモ區別ガツカヌ。ドレヲ花トシタモノデアラウカナア。

家の百首歌合に、餘寒の心を。

○空はなほ霞もやらず風さえて雪げに曇る春の夜の月。

空ハマダ霞モシナイデ風ガ寒ク吹イテ雪ガ降リサウデ春ノ夜ノ月ガ盛ツテ見エル、一の句を三四の句にかゝるとした美濃、尾張共に悪し。二の句にかゝるものとして、まだの雅に見るべし。

攝政太政大臣

和歌所にて、春山月といふ心をよめる。

山深み猶影さむし、春の月、空かき曇り雪はふりつゝ。

宵ニナツタクレドモ奥山ノコトデアルカラ空ガカキ曇ツテ雪ガ降ツテ、マダ春ノ月ノ光モ寒サウデアル。一四五三二と句を次第して見るべし。

越前

詩を作らせて歌に合せ侍りしに、水郷春望といふことを、

みしまえや霜もまたひぬ芦の葉につのぐむ程の春風ぞ吹く。

三島江デハ夜降ツタ霜ガ未乾キ切レナイ芦ノ枯葉ノ上ニ、芽ヲ出サウナ位ナ程ヨク暖カイ春風ガノヨ〳〵ト吹イテキルヨ。美濃の説は一應尤なれどもあまりに理窟にすぎたり。

左衛門督通光

藤原秀能

○夕月夜しほみちくらし、なには江の芦のわか葉をこゆる白波。

月ノ出テキル夕方ニ眺メルト多分夕方ノ潮ガ滿チテ來ルノデアラウ。難波江ニ生エテキル芦ノ若葉ヲ白波ガヒタ〳〵ト越エルノガ見エル。

西行法師

春の歌とて。

○ふりつみし高根のみ雪とけにけり。清瀧川の水のしらなみ。

今迄冬ノ間降リ積ツタ高イ山ノ雪ガ解ケタノニ相違ナイワイ。清瀧川ハ此頃水嵩ガマシテ川ノ水ガ白波ヲ立テ、流レテキル。

源重之

梅が枝に物うさほどにちる雪を花とも言はじ、春の名立てに。

マダ咲イテキナイ梅ノ枝ニ、怠氣サウニクズ〳〵ト少シバカリ降ル春ノ雪ヲ、春ノ名ヲ立テル爲ニ花ノヤウダトハ言フマイ。花トイフト、時節ニナツテモ花ヲ咲カセナイ春ノ忘ヲアラハシテ、春ノ名折トナル譯ダカラ春ノ名ヲ立テル爲ニ、花トハ言フマイ。

山邊赤人

梓弓春山近く家居して絶えず聞きつる鶯のこゑ。

私ハ●春ノ頃山近クニ住ンデキテ、鶯ノナク聲ヲ始終聞イタヨ。都デハナカ〳〵聞クコトガ出來ナイノニ。サテ〳〵嬉シイコトダ。

よみ人しらず

梅が枝に鳴きてうつろふうぐひすの羽白妙に泡雪ぞふる。

鳴キナガラ梅ノ枝ニ彼方此方飛ビ移ツテキル鶯ノ羽根モ眞白ニ春ノ泡雪ガ降ルヨ。此歌萬葉十春雜歌中に出づ。

百首歌奉りし時。

惟明親王

うぐひすの涙のつらら打とけて古巣ながらや春を知るらむ。

冬ノ間籠チコメラレタ悲シサニ泣イタ鶯ノ涙ガ氷ツテ居タノニ、此頃ハ其氷ガ解ケテ來タノデ、未ダ何處ニモ出ズ冬ノ儘古巣ニキルケレドモ、春ガ來タノヲ知ルデアラウ。尾張つらゝの説よろし。但し鶯の悲身に氷が張れるものとせるは、過きたりといふべし。古今集の「雪の中に春は來にけり鶯の氷れる泪今やとくらむ」より脱化せること勿論なり。

題知らず。

志貴皇子

岩そゞぐたるひの上の早蕨の萠え出づる春になりにけるかな。

岩ノ上ニ注ギカヽル水ガ氷ツテ垂氷トナツテ下ツテキル上ノアタリノ蕨ガソロ〳〵萠エ出ス春ニナツタワイナア。此歌萬葉八に志貴皇子懽御歌として「石はしる垂見の上のさわらびの萠え出づる春になりにけるかも」とあり。垂見は攝津の地名なり。茲には垂氷と改め趣向を復雜にしたり。

百首歌奉りし時。

前大僧正慈圓

天の原富士のけぶりの春の色の霞に靡くあけぼのゝ空。

大空ヲ見渡スト富士ノ山ノ頂カラ立ノボル烟ガ、春ノ色ノ紫ノ霞トナツテ、横ニ靡イテキル何トモ言ヘナイ美シイ曙ノ空ノ景色ヨ。美濃大體に於て誤解なり。尾張是を駁したるは宜し。されど五句を暗の頃としたるは惡し。

崇德院に百首の歌奉りける時。

藤原清輔朝臣

朝霞深く見ゆるや烟立つ室の八島のあたりなるらむ。

朝空ニ立ツテキル霞ガ、他所ヨリモ取分ケ濃ク見エル所ハ、アレガ多分常ニ烟ガ立ツテキル室ノ八島ノ近邊デアラウ。彼處バカリ霞ガ深ク見エルノハ烟ガ立ツテキルノニ違ヒナイカラ。

晚霞といふことを。

後德大寺左大臣

○なごの海の霞の間より眺むれば入日をあらふ沖つ白浪。

奈古ノ海ニ夕靡イタ霞ノ切レ間カラ眺メルト海ニ沈マウトシテキル入日ノ上ニ沖ノ白浪ガ打カケ打カケシテ丁度入日ヲ洗フヤウニ見エル。一の句なごの海やとあるべしといへる美濃尾張の説面白し。

をのこども詩をつくりて歌に合せ侍りしに、水郷春望といふことを。

○見渡せば山もと霞む、水無瀬川、夕は秋と何思ひけむ。

太上天皇

水無瀬川ノアタリチヅット眺メ渡シテ見ルト、山ノ麓ハ霞ガ罩メテキル。誠ニ靜カナ面白イ春ノ夕方ノ景色ダ。嗚呼何故ニ今迄夕方ノ景色ハ秋ニ勝ルモノハナイト思ッテ居ッタデアラウカ。夕よせなしといへる尾張の説は甚しき僻論なり。

攝政太政大臣家の百首歌合に、春曙といふ心を詠み侍りける。

藤原家隆朝臣

○霞立つ末の松山ほの〴〵と浪に離るゝ横雲の空。

陸ノ方ヲ眺メルト、霞ガ立チ罩メタ末ニ末ノ松山ガボンヤリト見エ、海ノ方ハ漸ク明クナッテ來テ横雲ノ棚引イテキル空ガ涙ト離レルノガ見エル。末の松山を涙の越ゆるものとしたる美濃悪し。宣長は海陸の景色を分ちて言へることに氣つかざりしなり。此歌調は優れたれども描寫の方法に無理あり。

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに。

藤原定家朝臣

○春の夜の夢の浮橋とだえして峯にわかるゝ横雲の空。

春ノ夜ニ夢ガ途中デ覺メテ、嗚呼惜シイ事ナシタト外ノ方ヲ眺メルト丁度棚引イテキタ雲ガ峯ヲ離レ行ク明方ノ空デアッタ。美濃の論偏したり。

ささらぎ迄梅の花咲き侍らざりける年よみ侍りける。

中務

知るらめや、霞の空をなかめつゝ花も匂はぬ春をなげくと。

霞ノ立チ罩メタ空ヲ眺メナガラ、春ガ來テモマダ花モ咲カナイ春ヲ私ガ嘆イテ居ルト云フコトヲ、梅ハ知ッテキルデアラウカ。ヨモヤ知ッテ居マイ。

守覺法親王家五十首歌に。

藤原定家朝臣

○大空は梅のにほひに霞みつゝ曇りもはてぬ春の夜の月。

空ハ咲キミチタ梅ノ香デ霞ミ渡ッテ、春ノ夜ノ月ハ、ハッキリ照リモセズ、サウカト云ッテ、雲ガ蔽ッテ居ル程曇リキリモセズ。薄クボンヤリトシテキル。誠ニユカシク見エルヨ。四の句「照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜に如くものぞなき」が本歌とせり。

題しらず。

宇治前關白太政大臣

折られけり、くれなゐ匂ふ梅の花、今朝白妙に雪は降れゝど。

今朝ハ一面ニ眞白ニ雪ハ降ッテキルケレドモ、紅ノ色ニ美シク咲イテ居ル梅ノ花ハ、白イ梅ト違ッテ、雪ニモ隠レル「ガナイカラ、折リ取ルコトガ出來タワイ。

かきねの梅をよみ侍りける。

○あるじをば誰とも分かず、春はたゞ垣根の梅を尋ねてぞ見る。

藤原敦家朝臣

春ニナルト家ノ主人ガ誰デアラウトモ關ハズニ、唯家ノ垣根ニ咲イテ居ル梅ノ花ヲ尋ネテ、何處ト云フコト無ク見テ歩クヨ。白氏文集の貌隨年老欲何如、興遇春來尚有餘、遙見人家花便入、不論貴賤與親疎の觀案にや。新撰朗詠にも紀齊名、至無定家尋花而不問主とあり。或は是によれるにや。

梅花遠薫といへる心をよみ侍りける。

心あらばとはましものを、梅が香は誰が里よりか匂ひ來つらむ。

源俊頼朝臣

此ユカシイナツカシイ梅ノ花ノ香ハ、遠イ方カラ匂ッテ來ルヤウデアルガ、一タイ誰ガ居ル里カラ匂ッテ來ルノデアラウカ。若シ此梅ガ香ニ心ガ有ルナラバ汝ハ何處カラ匂ッテ來ルノダト問イテ見度ク思フノニナア。心ノ無イモノダカラ仕方ガナイ。

百首歌奉りし時。

梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそふ。

藤原定家朝臣

庭ニサイテキル梅ノ花ノ匂ガ移ッテ、何トモ言ヘナイ佳イ香ニ染ミタ私ノ袖ノ上ニ、軒ノ隙間カラ洩レル月ノ光モ亦梅ガ香ニ負ケマイト爭ヒ競ッテ袖ノ上ニ光ヲウツシテキル。

藤原家隆朝臣

梅が香に昔をとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる。

昔ニカハラナイ梅ガ香ガシテキルノデ、別ニ誰ニモ問フベキ人モナイカラ、梅ガ香ニ昔ノコトヲ尋ネテ見ルト、梅ハ默シテ答ヘズ。朧ナ春ノ月ノ影ガ矢張何トモ言ハズニ私ノ袖ニ映ッテキルヨ。上の句、業平の「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして」の歌より來る。されども、奠濃の說に此歌は業平の心にてよめるといへるは言ひすぎたり。尾張是か歌して大かたの懷古の歌とおもふべしといへるは當れり。

千五百番歌合に。

右衛門督通具

○梅の花誰か袖ふれし匂ひぞと春やむかしの月にとはゞや。

此今咲キ匂ッテキル梅ノ花ハ、一タイ昔誰ノ袖ガ觸レタカラ遺慶其イ香ニナッタノカト昔ノ春ノ宿ノ月ニ問イテ見タイモノダナア。月ハ昔ノ通リダカラ、多分昔ノコトヲ知ッテキルダラウカラ。二の句古今集の「色よりも香こそ哀れとおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」四の句、仝「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身一つはもとの身にして」の意をうけたる詞なり。

梅の花あかぬ色香もむかしにて同じかたみの春の夜の月。

皇太后宮大夫俊成女

梅ノ花ノイクラ見テモ飽キ足ラナカッタ色香モ昔ノ通リデ、昔ノ形見トナルガ、月ノカゲモ昔ニカハラナイカラ、春ノ夜ノ月モ矢張昔ノ形見トナルヨ。二の句古今集「よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は

「折りでなりけり」より取れるか。

梅の花にそへて大貳三位につかはしける。　　權中納言定頼

來ぬ人によそへて見つる梅の花散りなむ後の慰めぞ無き。

花ガ盛リニ咲イテ居タ時分ハ、貴方ガ來ナイ時ハ其梅ノ花ヲ貴方ダト思ツテドウカ斯ウカ慰メテ居マシタガ、散ツテ終ツタ後ニハ何ヲ慰メトシタモノデセウ。何モ慰メトスル物ガアリマセヌヨ。

返し。　　大貳三位

春ごとに心をしむる花の枝に誰かくほざりの袖か觸れつる。

春毎ニ毎年々々私ガ氣ヲ付ケテ居ル梅ノ枝ニ、誰ガ一寸訪ネテ行キテ袖ヲ觸ハラセタバカリデ、其後少シモ尋ネテ來ナイデ、主人ニ這麼恨ミヲ言ハレルヤウナコトヲナサルノダラウ。其樣ナ情知ラズノ人モアリマスカナア。定頼は三位の來ぬを恨みたるに、三位は知らざる眞似してそれを他人のことにして、さる無情のもありやと驚きたる樣に返事せるなり。

同詠に、折梅花而插頭、二月雪落衣とあり。

二月ノ雪落衣といふことをよみ侍りける。　　康資王母

梅ちらす風も越えてや吹きつらむ。香れる雪の袖に亂るゝ。

梅ノ花ヲ頭ニ挿シテヰルト、香リノアル雪カト思ハレテ、梅ノ花ガチラ〳〵ト袖ニカヽルガ、多分サシタ梅ヲ散ス風ガ、我頭ノ上ヲ越シテ吹イタノデアラウ。

題しらず。　　西行法師

○とめこかし、梅盛りなるわが宿を。うときも人は折にこそよれ。

梅ノ盛ニ咲イタ我宿ヲ梅ヲ見當テニ尋ネテ御出デナサレ。イクラ疎遠ニシテヰルトイフテモ、時ト場合トアルモノダ。梅ノ咲イタ時丈位ハ尋ネテ來テクレテモヨサウナモノダ。四の句を一の句の上に置きて見よといへる奚濃の說は解しがたし。

百首歌奉りしに、春のうた。　　式子内親王

ながめつる今日は昔になりぬとも軒端の梅は我を忘るな。

斯ウシテ私ハ今軒端ニ咲イテヰル梅ヲ見テヰルカ今日ガ過ギ去ツテ昔トナリ、私モ死ンデシマツテモ梅ヨオ前ハ今ノ儘デヰルノダラウガ、私ノコトナンハ誰モ思ヒ出シテクレル人モアルマイガ、オ前丈デモ私ノコトヲ忘レズニ居テクレ。

土御門内大臣家に、梅香留袖といふことをよみ侍りける。　　藤原有家朝臣

散りぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖に春風の吹く。

今迄咲イテ居タ梅モ最早散ツテ終ツタカラ、香バカリガ袖ニ殘ツテヰルノニ、梅ノ花ガマダ咲イテ居ルト思

ッテカ、春風ガ袖ヲ吹クヨ。本歌古今集、「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやこゝに鶯のなく」

題知らず。　八條院高倉

ひとりのみ眺めて散りぬ、梅の花、しるばかりなる人は訪ひ來て。

梅ノ花ノ色ヲモ香ヲモ知ッテキル程ノ聯ノヤカッタ人ハ一人モ訪ネテ來ナイデ、唯私獨リデ見テキタ間ニ、梅ノ花ハ空シク散ッテ終ッタ。嗚呼、惜シイコトナシタアイ。本歌、古今集の、「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」

文集嘉陵春夜詩、「不明不暗朧々月といへることをよみ侍りける。　大江千里

○照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものぞ無き。

ハッキリト照ルト云フ程デモ無ク、ソレカト言ッテ又曇リキルト云フ程デモナイ春ノ夜ノ朧ノ月夜ニ及ブモノハナイヨ。皮ニ春ノ朧月ハヨイモノダ。

祐子内親王、藤壺にすみ侍りけるに、女房うへ人などさるべき限物語りして、春秋のあはれ何れにか心ひくと爭ひ侍りけるに、人々多く秋に心をよせ侍りければ。　菅原孝標女

淺緑花も一つに霞みつゝおぼろに見ゆる春の夜の月。

淺緑色ノ空モ奇麗ニ咲イタ花モ一様ニ霞ミ渡ッテ、春ノ夜ノ月ノ光ガ朧ニ見エルヨ。ナント面白イデハアリマセンカ。昔サンハ秋ガヨイト仰ルガ秋バカリデハナイ。春ニモ此様ナ良イ景色ガアリマスヨ。

百首歌奉りし時。　源具親

難波潟霞まぬ浪も霞みけり、うつるも曇るおぼろ月夜に。

難波潟ヲ見渡スト、今夜ハ朧月夜ダ。朧月ト云フモノハ波ニウッテモ空ニアル時ト同ジヤウニ曇ッテキルモノダカラ、平常ナラバ霞ム筈ノナイ浪マデモ今夜ハ霞ンデ見エルアイ。

攝政太政大臣家の百首歌合に。　寂蓮法師

○今はとてたのむの雁も打ち詫びぬ、朧月夜の曙の空。

花ヲ見ステ、カヘルヤウナ情無イ田ノ面ニ居ル雁デスラモ、今ハ愈歸ルベキ時デアルト立チカケタガ、アマリニ朧月ガ殘ッテ白ミカ、ッタ春ノ曙ノ空ガ美シイノデ、見捨テ、歸ルコトガ殘リ惜シク困ッテ鳴イテキルヨ。

刑部卿頼輔歌合し侍りけるに詠みて遣しける。　皇太后宮太夫俊成

聞く人ぞ涙は落つる、歸る雁鳴きて行くなるあけぼのゝ空。

故郷ニ歸ッテ行ク雁ガ、今別ヲ惜ンデ曙ノ空ニナイテキルガ、アノ悲シサウナ雁ノ聲ヲ聞ク人ノ方ガ却テ鳴ク雁ヨリモ悲クテ涙ガ落ツルヨ。

題しらず。

故郷に歸るかりがねさ夜更けて雲路にまよふ聲聞ゆなり。

讀人不知

故郷ニ歸ツテ行ク雁ガ、夜更ケテ雲ノ上デ路ニ迷ツテ鳴イテキル聲ガ聞エルワイ。早ク家ニ歸リタイデアラウニ、サゾ困ツテキルコデアラウ。

歸雁を

忘るなよたのむの澤を立つ雁も稲葉の風の秋の夕ぐれ。

攝政太政大臣

此ヨイ春景色ヲ情ナク振リ捨テ、田ノ面ノ澤ヲ立ツテ故郷ニ歸ル雁デモ、稲葉ニ風吹キ渡ル秋ノ夕暮ノ哀ナ景色ヲ忘レズニ、秋ニナツタラ復此所ヘ尋ネテ來テクレヨ。

百首歌奉りし時。

かへる雁今はの心有明に月と花との名こそ惜しけれ。

藤原定家朝臣

故郷ヘ歸ル雁ガ、歸ラネバナラヌ時トナツタ、今ハ歸ラウト思フ心ガアツテ出カケテ行ク此有明ノ時分ハ、月モ朧ニ花モ美シク咲イテキル良イ景色デアルノニ、此景色ガ雁ヲ引止メルコガ出來ヌトハ月ヤ花ノ名折ニナル。惜シイコダヨ。

守覺法親王五十首歌に。

霜まよふ空にしほれし雁がねの歸る翅に春雨ぞ降る

大僧正行慶

霜ノ降リ亂レテ爽イ秋ノ空ニ、翅モ萎レテ難儀シテ來タ雁ガ、歸ル時節トナツテハ又其翅ニ春雨ガ降リ注クヨ。矢張翅モシホレテ難儀シテ歸ツテ行クヨ。

閑中春雨といふことを。

つくづくと春のながめのさびしきはしのぶにつたふ軒の玉水。

伊勢

春ノ長雨ニ、ツクヅクト眺メテキテ淋シク思ハレルノハ、軒端ニ生エテキル忍草ヲ傳ツテ、落チテ來ル雨滴ノ樣デアルヨ。二ノ句ながめは長雨、眺めの兩義なり。

寛平の御時后の宮の歌合の歌。

水の面に綾織り亂る春雨や山の緑をなべて染むらむ。

攝政太政大臣

水ノ上ニ綾ヲ織リ亂シテ降ル春雨ガ、山ノ緑ノ色ヲ一タイニ染メルデアラウ。水デハ綾ヲ織リ、山ニハ緑ヲ染メテ、而白イ春雨デアルヨ。

百首歌奉りし時。

ときはなる山の岩ねにむす苔の染めぬ緑に春雨ぞふる。

山ノ岩ニ生エテキルイツデモ色ヲ變ヘナイ苔ノ緑色ハ春雨ガ染メタノデハナイノニ、苔ノ緑色ノ、上ニサモ

自分デ染メタノラシク春雨ガ降リカヽルヨ。ときはなるを岩と苔とにかけて見るといふ奥深説は悪し。苔のみにてあるべし。

清輔朝臣のもとにて、雨中苗代といふことをよめる。　勝命法師

雨降れば小田のますらをいとまあれや、苗代水を空にまかせて。

雨ガ降ルト田デ仕事ヲスル百姓トモハ暇デアルワイ。アタリマヘナラ、自分デ骨折ッテ苗代ヘ水ヲ入ルベキデアルガ。ソレヲ空ガ散クノニ任セテ置イテ、自分ハ何ニモセナクテモヨイカラ、

延喜御時御屏風に。　凡河内躬恒

春雨のふりそめしより青柳の絲の緑ぞ色まさりける。

青柳ノ枝ハ糸ノヤウニ細イノデ青柳ノ糸ト云フガ春雨ガ降リ初メテカラシテ、雨ガ染メルト見エテ、青柳ノ糸ノ緑色ハ増シテ來タワイ。

題知らず。　大宰大貳高遠

うちなびき春は來にけり。青柳の蔭ふむ道に人のやすらふ。

㊀春ガ來タワイ。往來ノ人ガ青ク芽ヲ出シタ柳ノ下蔭ヲ通ル道ニ休ンデヰル。春ラシイ景色ダ。うちなびくは春の冠辭にして、うちなびきは冠辭にあらず。されども此頃既に用ゐ誤りたりと見え金葉集にも「うちなびき春は來にけり山河の岩間の氷今日や解くらむ」とあり。金槐集にも「うちなびき春さりくれば椙生ふるかた山かげに鶯ぞなく」とあり。故に此歌も冠辭と見て可ならむ。柳が打靡きてと解するは不可なり。但し梓弓とせずして、うちなびきとしたるは下の柳に呼應せしめたるものなり。

みよしのゝ大川のべの古柳蔭こそ見えね、春めきにけり。　輔仁親王

吉野ノ大川ノ岸ノ冬枯ノ柳ハ、未枝モ出サズ葉モ茂ラナイカラ、蔭ト云フベキホドノモノコソ見エナイケレドモ、何トナク春ラシクナッテ來タワイ。

百首歌中に。　崇德院御製

あらしふく岸の柳のいなむしろをりしく浪にまかせてぞ見る。

稻ガ風ニ靡クノヲ稻席ト云フガ。私ハ嵐ガ吹キ渡ル川ノ岸ノ柳ガ丁度稻席ノヤウニ靡クノヲ、打カヘシ〳〵寄セテクル川ノ浪ガ其柳ノ上ニカヽルマヽニシテ置イテ、其面白イ景色ヲ見テヰルヨ。

建仁元年三月歌合、霞隔遠樹といふことを。　權中納言公經

高瀨さす六田の淀の柳原みどりも深く霞む春かな。

高瀨舟ト云フ大キナ川舟ヲ棹シテ行クノガ見エル吉野川ノ六田ノ淀ノ岸ノ柳原ハ青々トシテ緑ノ色ガ濃クテ

リウシテ其アタリハ霞ガ解イテキルワイ。面白イ春景色ダ。尾張悪し。

百首歌よみ侍りける時、春の歌とてよめる。　　殷富門院大輔

○春風の霞吹きとく絶間より亂れて靡く青柳の絲。

春風ガ立チコメタ霞ノ幕ヲ吹イテ縫ヒ目ヲ解クト其間カラ風ニ亂レテ青柳ノ糸ガ亂レテ靡クヨ。とく、亂る、糸、絲語なり。

千五百番歌合に、春の歌。　　藤原雅經

白雲の絶え間になびく青柳のかつらぎ山に春風ぞ吹く。

白雲ノ切レ目ニ靡ク青柳ガ見エテ、葛城山ニ春風ガ吹イテキルヨ。青柳のかつらぎ山と續く枕辭なるを、やがて葛城山に柳があるやうに取りなしたるなり。

青柳の絲に玉ぬく白露のしらずいく世の春か經ぬらむ。　　藤原有家朝臣

白露ヲ玉ノヤウニ貫キサス青柳ノ糸ハ、私ニハ分ラナイガ、タ一ィ幾何ノ春ヲ經タノデアラウカ。アンナ面白イコトヲ何年モヤツテキルノダラウ。上句はしらずと呼びおこす爲めの序詞なれども、意味あり。有心序といふべきものなり。へぬらむのへは。糸に絲あり。知らずいく世の春か經ぬらむは漢文直譯調の入りたるものなり。

○うすくこき野邊の緑の若草に跡まで見ゆる雪のひら消え。　　宮内卿

野邊ノ若草ノ緑ノ色ノ薄イ所ト濃イ所トアルノデ、雪ノ斑ニ消エ殘ツテキタ跡迄ガハツキリト見エルヨ。雪ノ早ク消エタ所ハ緑ガ濃ク　遲ク消エタ所ハ緑ガ薄イ。

題知らず。　　曾禰好忠

あら小田の去年のふる根のふる蓬今は春べとひこばえにけり。

去年ノ秋稻ヲ刈ツタ儘手ヲ入レズニ置イタ田ニ、去年ノ苗イ根ノ古蓬ガ、今ハ春ニナツタト言フヤウニ芽ヲ出シテ來タワイ。

やかずとも草はもえなん。春日野をたゞ春の日にまかせたらなむ。　　壬生忠見

火ヲ付ケテ燒カナクテモ、草ハ萠エルダラウ。モウ左樣ナコハセズトモ、春日野ハ唯春ノ日ニ任セテ置イタ方ガヨカラウ。春ノ日ガ照レバ自然ニ生エルカラ。最初のなんは未來完了、次のなんは希望の助辭なり。かすがは春日とかくを以て春の日に任すと言へるなり。

西行法師

よしの山櫻ぬが枝に雪ちりて花遲げなる年にもあるかな。

○吉野山ハ櫻ノ木ノ枝ニ雪ガ花ノヤウニ散リカヽツテ花ノ咲クコトハ遲サウナ年デアルワイ。道麼ニ寒クテハ花ハナカ〳〵咲クマイ。

藤原隆時朝臣

白河院、鳥羽におはしましける時、人々山家待花といへる心をよみ待りけるに。

さくら花咲かばまづ見むと思ふ間に日數經にけり、春の山里。

私ハ花ヲ見ヨウト思ツテ山里ニ來テキルガ、櫻ノ花ガ咲イタナラ、第一番ニ見ヨウト思ツテキル間ニ春ノ山里ニ來テカラモウ大ブン日數ガ立ツタワイ。折角見ヨウト思ツテ早クカラ來テ居ルノニ、ナカ〳〵咲カナイ待チ遠イワイ。

紀貫之

亭子院歌合に。

吾が心春の山べにあくがれてなが〳〵し日を今日も暮しつ。

吾ガ心ハ春ノ山邊ノ面白イノニ浮カレテ、長イ〳〵日ヲ今日モ亦遊ビ暮シテシマツタ。アマリ面白クテ時ノ立ツノモ分ラナイ。

藤原家隆朝臣

攝政太政大臣家ノ百首ノ歌合に、野遊の心を。

思ふどちそことも知らず行き暮れぬ。花の宿かせ、野邊の鶯。

氣ノ合ツタ友達同志、春ノ野山ニ遊ンデ何處ト云フコトナク所モ知ラズ歩イテキタ中ニ、日ガ暮レテシマツタ。野邊ノ鶯ヨ。オマヘハ花ニ住ンデキルガ、私ニ花ノ下ノ宿ヲ貸シテクレ。宿ル所ガナイカラ。本歌古今集「思ふどち春の山邊に打むれてそことも知らぬ旅寢してしが」

式子內親王

百首歌奉りし時。

いまさくら咲きぬと見えてうち曇り春にかすめる世の景色かな。

今ハ丁度櫻ノ花モ咲イタト見エテ、四方ガドンヨリト曇ツテ、此世ノ景色ガスツカリ春景色ニナツテ霞ミ渡ツテキルワイ。今をまうと譯したる尾張の說うけがたし。

讀人不知

題知らず。

ふしで思ひ起きてながむる春の雨に花の下紐如何に解くらむ。

花ノ下ニテ、寢テハ思ヒ、起キテハ眺メテ、咲クノヲ待ツテ居ルノニ、今春雨ガ降ツテキルガ、此春雨ニ花ノ蕾ハ其麼ニ綻ビルデアラウカ。人ガ他カラ戀ヒラレル時ハ、下紐ガ自然ト解ケルト云フガ、自分ガ道麼ニ思ツテキルカラ、イツレ花ノ下紐モ解ケテ、蕾ガ破レルデアラウガ。甚麼ニ開クデアラウカ。

中納言家持

行かむ人來む人しのべ、春霞立田の山の初櫻花。

アチラヘ往ク人モ、コチラヘ來ル人モ、皆春霞ガ立チ罩メテキル立田ノ山ノ櫻ノ初咲キノ花ノ景色ヲ思ヒヤツテクレヨ。霞ガコメテ見エナイダラウガ、屹度咲イタニ違ヒナイカラ。立田山はかけ詞なり。

花の歌とてよみ待りける。　西行法師

吉野山去年の枝折の道かへてまだ見ぬ方に花を尋ねむ。

吉野山ニ去年花見ニ來タ時、道ヅルシチシテ置イタノハマダ殘ツテキルガ、其方ハ今年ハカマハズニ置イテ、道ヅルシノナイ方ニ花ヲ尋ネヨウ。同ジ所ハツマラナイカラ。マダ見タ事ノナイ方角ニ花ヲ尋ネテ見ヨウ。

和歌所にて、歌うかふまつりしに、春の歌とて詠める。　寂蓮法師

かつらぎや高間の櫻咲きにけり。立田の奥にかゝる白雲。

葛城ノ高間ノ山ノ櫻ハ咲イタワイ。立田山ノ奥ニ白雲ガカヽツテキル。アノ雲ガ櫻ニ違ヒナイ。

題しらず。　よみ人しらず

石の上ふるき都を來て見れば昔かざしゝ花咲きにけり。

石ノ上ノ古ノ都ニ來テ來ルト、昔ノ人ガ折ツテ頭ニ挿シタ花ガ相變ラズ昔ノヤウニ咲イテキルワイ。石の上は此處にては枕詞にはあらざるべし。石の上大和にあり。

春にのみ年はあらなむ、あら小田をかへすがへすも花を見るべく。　源公忠朝臣

㊂幾度モ〳〵花ガ見ラレルヤウニ何時デモ一年中皆春デアレバヨイガナア、花ホドヨイモノハ無イ。

八重櫻を折りて人のつかはして侍りければ。　道命法師

白雲の立田の山の八重櫻いづれを花とわきて折りけむ。

白雲ガ立ツテ花ノヤウニ見エル立田山ノ八重櫻ヲバ、アノ人ハ何レヲ花ダト見別ケテ折ツテ來タデアラウカ。ヨク見別ケテ此八重櫻ヲ折ツテ來タモノダナア。立田山かけ詞なり。

百首歌奉りし時。　藤原定家朝臣

白雲の春はかさねて立田山小倉のみねに花にほふらし。

見渡スト白雲ガ春ハ常ヨリモ重ツテ立ツテキルガ、多分立田山ノ小倉ノ嶺ニ花ガサイタノデアラウ。萬葉九の「白雲の立田の山の瀧の上の小倉がみねにさきにほふ櫻の花は……」の長歌を本歌としたりといふ八代集抄、美濃家苞の說は非なり。本歌と見るには及ばざるべし。立田山かけ詞なり。

題しらず。　藤原家衡朝臣

よしの山花や盛りに匂ふらむ。ふる里さらぬみねの白雲。

吉野山ハ今花ガ盛ニ咲イテ居ルノデアラウ。故里ノ吉野ノ里ノ邊ヲ離レズイツモ峯ノ上ノ同ジ所ニ白雲ガカヽツテキル。アレハ雲デハナクテ花デアラウ。

和歌所ノ歌合に、羇旅花といふことを。　藤原雅經

○岩根ふみ重なる山を分けすてゝ花もいくへの跡の白雲。

峻嵯ナ山路ニ岩ヲ踏ミテ、幾重モ重ツタ山又山ヲ踏ミ分ケテ來テ、振返ツテ見ルト、來タ方ニハ花迄ガ幾重モ幾重モ重ツタ白雲トナツテ見エルヨ。誠ニ奇麗ナ花ノ景色ダナア。

五十首歌奉りし時。　前大僧正慈圓

○尋ね來て花にくらせる木の間よりまつとしもなき山の端の月。

花ヲ尋ネテ來テ、咲キ滿チタ花陰ニ一日遊ビ暮シテ、夕方ニナルト、思ヒモヨラヌ春ノ月ガ山ノ端ニ出タ。誠ニ面白イコトダ。花ヲ尊ねて未見ずして日暮れたるなりといへる美濃は大なる誤なり。四の句も只月をまつ事にて花には關係なし。

故郷花といへる心を。

ちり散らず人も尋ねぬ故里の露けき花に春風ぞ吹く。

散ラウト散ルマイト、一向人モ尋ネテ來ナイ故里ノ靜カナ淋シサウニ咲イテキル花ニ、春風ガ吹イテキルヨ。四の句故郷の閑寂の泪も露けき花にといへる八代集抄の說は言ひ過ぎたり。露けきは泪には關係なし。靜かなる意なり。

千五百番歌合に。　右衛門督通具

石上ふる野の櫻誰植ゑて春は忘れぬ形見なるらむ。

石上布留野ニアル櫻ハ、一體昔誰ガ植エテ、春ニナルト其花ガ咲イテ、植エタ昔ノ人ノ「チ忘レナイ爲ノ形見トナル」デアラウ。形見ニ櫻ヲ植エタ人ハ優シイ人ダ。本歌、後撰集、「石上ふるの山邊の櫻花植ゑけむ時を知る人ぞ無き」

花ぞ見る、道の芝草踏み分けて、吉野の宮の春のあけぼの。　正三位秀能

荒レ果テタ吉野ノ宮ノ春ノ曙ニハ、道ニ生エタ芝草ヲ踏ミ分ケテ、花ヲ見ルヨ。何トナク淋シイ景色ダ。

あさ日かげ匂へる山の櫻花つれなく消えぬ雪かとぞ見る。　藤原有家朝臣

朝日ノ光ガ照ラシテキル山ニ咲イテキル櫻ノ花ハ、此ノ日光ニモ辛抱強ク消エズニキル雪ノヤウニ思ハレルヨ。一二の句朝日かげに山櫻花の匂へるなりといふ美濃說穩ならず。朝日影が匂へる山に咲きたる櫻なり。

新古今和歌集卷第二

春歌下

釋阿和歌所にて九十賀し侍りし折、屏風に山に櫻咲きたる所を。

太上天皇

○さくら咲く遠山鳥のしだり尾の、なかく〳〵し日もあかぬ色かな。

櫻ガ咲イテキル遠山ノ眺望ハ㊀㊁長イ〳〵春ノ日ニイクラ眺メテモ倦クコトノナイ美シイ色デアルワイ。

千五百番歌合に、春の歌。

皇太后宮大夫俊成

いく年の春に心をつくし來ぬ。あはれと思へ、みよしの、花。

幾年モ幾年モ花咲ク春ノ爲ニ心ヲツカツタゾ。吉野ノ山ノ花モ少シハ自分ヲ哀レナ者ト思ヘヨ。四の句「諸共にあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」より取れり。

百首の歌に。

式子內親王

はかなくて過ぎにし方を數ふれば花に物思ふ春ぞ經にける。

爲スコトモナクテ無駄ニ何時ノ間ニヤラ過キ去ツタ昔ヲ振返ツテ見ルト花ノ爲ニ心配ヲシタ多クノ年ヲ經タワイ。別ニ何モセズ只花ノ爲ニ心配シタコトバカリ覺エテキル。

內大臣に侍りける時、望山花といへる心をよみ侍りける。

京極前關白太政大臣

白雲のたなびく山の八重櫻いづれを花とゆきて折らまし。

アノ白雲ガ靡イテキル山ニ八重櫻ガ咲イテキルカ、ドレガ花カ、ドレガ雲カワカラナイ。ドレヲ花ト思ツテ行ツテ折ラウカ。花ヲ折リタイニモ折ルコトガ出來ナイ。

祐子內親王家に、人々花の歌とてよみ侍りけるに。

權大納言長家

花の色に天ぎる霞立ちまよひ空さへにほふ山ざくらかな。

山櫻ガ咲イテ居ルノデ、空ヲ立チ罩メタ霞モ花ノ色ニナツテ空ニ棚引キワタツテ空モ山櫻ノ花ノ色ニ見エルワイ。天ぎるは空を遮ること蓋る意なり。

題知らず。

山邊赤人

もゝしきの大宮人はいとまあれや。櫻かざして今日も暮しつ。

一御所ニ仕ヘテキル宮人ハ暇ガアルワイ。櫻ノ花ヲ挿頭ニシテ、今日モ亦遊ビ暮シタ。萬葉十、「百數の大宮人はいとまあれや梅をかざしてこゝろにつとへる」とあり。

在原業平朝臣

花にあかぬ嘆はいつもせしかども今日の今宵に似る時はなし。

今迄花ヲ見足ラナイノデ嘆イタコトハ始終アルガ、今日ノ今夜位ヒドク悲シイコトハナイ。此歌伊勢物語に「むかし春宮の女御の御かたの花の賀にめしあづけられたりけるに」として出てたり。

凡河内躬恒

いもやすく寢られざりけり、春の夜は花のちるのみ夢に見えつゝ。

春ノ夜ハ花ノ散ルコトバカリガ夢ニ見エテ、落チ付イテ眠ルコトガ出來ナカッタワイ。花ヲ惜シイ〳〵ト思フト夢ニ迄花ノ散ルノガ見エル。

伊勢

山櫻散りてみ雪にまがひなばいづれか花と春にとはなむ。

山櫻ノ花ガ散ッテ雪ト見紛ヘルヤウデアッタナラバ、何レガ花カヤカラヌガ、花ハ春ノモノダカラシテ知ッテキルデアラウカラ、ドレガ花カト春ニ問ウテ見ヨウ。

貫之

我宿のものなりながら櫻花散るをばえこそとどめざりけれ。

我宿ニ咲イタモノデアルカラ、自分ノ勝手ニ出來サウナモノデハアルケレドモ、櫻ノ花ノ散ルノヲ止メルコトハ出來ナカッタワイ。花ノ散ルノハ思フ儘ニナラナイモノダ。

寛平の御時、きさいの宮の歌合の歌に。　よみ人知らず

かすみたつ春の山邊にさくら花あかず散るとや鶯の鳴く。

霞ノ罩メタ春ノ山デ、櫻ノ花ガマダ見足ラヌ内ニ散ッテシマウト、盲ッテ嘆クノデアラウカ鶯ガシキリニ鳴イテキルワイ。

題しらず。　赤人

春雨はいたくな降りそ、櫻花まだ見ぬ人にちらさまくも惜し。

春雨ハヒドク降ルナヨ。櫻ノ花ヲマダ見ナイ人ノ爲ニ花ガ散ッテシマウノハ惜シイコトダカラ。

貫之

花の香に衣はふかくなりにけり、木の下蔭の風のまに〳〵。

花ノ木ノ下陰ヲ吹イテ來ル風ガ花ノ香ヲ持ッテクルノデ、私ノ衣ハ花ノ香ガ深ク染ミ込ンダワイ。嬉シイコトダ。

千五百番歌合に。

○風かよふ寢覺の袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢。　皇太皇后宮太夫俊成女

風ガ吹キ通ッテ來ル床ノ上デ、春ノ夜ノ夢ガ覺メルト、目ヲ覺シタ私ノ着物ノ袖ニ花ノ香ガ薫ッテクル。一四五二三と句を轉倒して考ふべし。

守覺法親王、五十首歌よませ侍りける時。　藤原家隆朝臣

此程は知るも知らぬも玉桙の行きかふ袖は花の香ぞする。

此頃ハ知ッテキル人デモ知ラナイ人デモ、誰モ誰モ道ニ行キアフ人ノ袖ガ皆花ノ香ガスルヨ。

攝政太政大臣家に、五首歌よみ侍りけるに。　皇太后宮大夫俊成

又や見む、かた野のみのゝ櫻狩花の雪ちる春のあけぼの。

交野ノ御野ノ櫻ヲ見ニ來テ見レバ、花ガ雪ノヤウニ散ル春ノ曙ノ景色ガ實ニ面白イカ、此樣ナ好イ景色ヲ又再見ルヿガ出來ヨウカ。這麼佳イ景色ハ又ト再ビ見ルヿハ出來マイ。

花の歌よみ侍りけるに。　祝部成仲

散り散らずおぼつかなきは春霞立田の山の櫻なりけり。

最早散ッテ終ッタカ、又ハマダ咲イテキルカ、ワカラナイデ氣ニナルモノハ、春霞ノ立チコメテキル立田ノ山ノ櫻デアルワイ。立田山ハ霞ガカヽッテ居ルカラ何モ分ラナイ。立田山は立つにかけたり。

山里にまかりてよみ侍りける。　能因法師

○山里の春の夕ぐれ來て見れば入あひの鐘に花ぞ散りける。

春ノ夕方山里ニ來テ見ルト、入相ノ鐘ノ鳴ル音ニツレテ、櫻ノ花ガチラ〳〵散ルワイ。淋シイ景色ダ。

題知らず。　惠慶法師

櫻散る春の山べは憂かりけり、世をのがれにと來しかひも無く。

此ツライ世ヲ逃レニト山里ニ來タ甲斐モナク、春ノ山里デ櫻ノ花ガ散ルノヲ見ルト、花ガ惜シクテツライ思ヒヲスルワイ。

花見侍りける人にさそはれて詠みける。　康資王母

山櫻花の下風吹きにけり、木の下ことの雪のむら消え。

山櫻ガ咲イテキル下ヲ風ガ吹イタニ違ヒナイワイ。櫻ノ木ノ下毎ニ花ガ散ッタノガ丁度雪ガ所々消エタヤウニ見エルカラ。

題知らず。　源重之

春雨のそぼふる空のをやみせず落つる涙に花ぞ散りける。

春雨ガショボ〳〵ト少シモ止マズニ降ルノニ、私ガ花ヲ惜ンデ泣ク涙モ少シモ止マナイデ、其涙ノ落チルノト一緒ニ櫻ノ花ガ散ルワイ。

雁がねのかへる羽風やさそふらむ。過ぎ行く峯の花も殘らぬ。

故郷ヘ歸ッテ行ク雁ノ羽風ガ花ヲサソヒ散ラスノデアラウ。雁ガ通ッタアトノ山ノ花ハ皆散ッテ少シモ殘ラテキナイ。

百首歌召しゝ時、春の歌。　源具親

時しもあれ、たのむの雁の別れさへ花ちる頃のみよし野の里。

折モアラウニ、丁度田ノ面ニ下リテキル雁ニ別レルコトガ悲イノニ、其上ニ花ガ散ルノヲ惜ム悲シミ迄モ付ケ加ハッテ、此頃ハ吉野ノ里ハ誠ニ淋シク悲イヨ。たのむは田の面なり。田の上に下りゐる雁をいふ。みよし野の里は武藏國なるをいへり。

見山花といへる心を。　大納言經信

山深み杉の村立見えぬまで尾の上の風に花の散るかな。

山ガ深イノデ、叢ッテ生エタ杉ノ立木モ見エナイホド、山風ニ花ガ散ルワイ。

堀川院の御時、百首歌奉りけるに、花の歌。　大納言師頼

木の下の苔のみどりも見えぬまで八重散り敷ける山ざくらかな。

木ノ下ニ生エテキル苔ノ綠ノ色モ見エナイホド、山櫻ノ花ガ幾重ニモ幾重ニモ散リ敷イタワイ。奇麗ナワダ。

花十首の歌よみ侍りけるに。　左京大夫顯輔

麓まで尾の上の櫻散り來すばたなびく雲と見てや過ぎまし。

若シ山ノ上ノ櫻ノ花ガ麓マデ散ッテ來ナカッタナラバ、山ノ上ノ櫻ハ花トハ氣ガ付カズニ、棚引ク雲トバカリ思ッテ過スコトデアラウ。

花落客稀といふことを。　刑部卿範兼

花散ればとふ人稀になりはてゝ厭ひし風の音のみぞする。

花ノ時ニハ花見ガテラニ來ル人モアッタガ、花ガ散ッテシマウト、尋ネテ來ル人モ少クナッテ、今迄花ノ散ルノヲ恐レテ嫌ッテキタ風ノ音バカリ聞エルワイ。アア淋シイワダ。

題しらず。　西行法師

ながむとて花にもいたく馴れぬれば散る別れこそ悲しかりけれ。

物思ヒニ沈ンデハ外ヲ眺メ〳〵シテ、花ヲ見ルニモ度重ツテ花ト怨憂ニナツダカラ。花ガ散ツテ花トイヨイヨ別レルコトニナルト。悲シクテナラナイヨ。東野州の道心者の心をよめるなりといふ説は愚の極なり。

山里の庭より外の道もがな。花散りぬやと人もこそとへ。

越前

山里ノ道ハ庭ガ道デアルガ、庭ノ外ニ道ガアレバヨイガナア。花ガ散ツタカナド、言ツテ、人ガ尋ネテ來テ、美シク花ノ散リ敷イタ庭ヲ踏ムノハ惜イコトダヨ。

五十首歌奉りし中に、湖上花を。

宮内卿

○花さそふ比良の山風吹きにけり、こぎ行く舟のあと見ゆるまで。

花ヲサソツテ散ラス比良ノ山風ガ吹イタワイ。漕イデ行ク舟ノ通ツタ跡ガ明ラカニ見エル程、琵琶湖ノ上一面ニ花ガ散リ浮ンデキルヨ。

關路花を。

○あふ阪や梢の花を吹くからに嵐ぞ霞む、關の杉むら。

逢阪ノ櫻ノ梢ヲ嵐ガ吹クノデ、關ノ杉ガ叢ツテ生エテキルアタリハ散ル花デ嵐モ霞ンデ見エルヨ。嵐ニハ色モナイモノダガ、花ヲ一緒ニ吹イテ行クノデ嵐モ霞ンダヤウニ見エル。

百首歌奉りし時、春のうた

二條院讃岐

○山高み峯のあらしに散る花の月にあまぎるあけかたの空。

山ガ高イノデ、峯ノ上ヲ吹ク嵐ノ爲ニ、散ル花ガ、夜明ケ方ノ空ニ月ノ光ヲ遮ツテ月ヲ曇ラセルヨ。

百首歌めしける時、春の歌。

崇德院御製

山高み岩根のさくら散る時はあまの羽衣なづるとぞみる。

岩ノ上ニ咲イタ櫻ノ花ガ散ル時分ハ、花ガ眞白ニナツテ散ルノガ、山ガ高イノデ下カラ見ルト、天人ガ天ノ羽衣デ岩ヲ撫デルノデハナイカト見エルヨ。櫻ヲ天ノ羽衣ニ見立てたるなり。天人ガ天ノ羽衣にて岩を撫づること佛説にあり。

春日社歌合とて人々歌よみ侍りけるに。

刑部卿頼輔

ちりまがふ花のよそめは吉野山あらしにさわぐ嶺の白雲。

吉野山ノ亂レ散ル花ヲ他所カラ見タ景色ハ、丁度嵐ノ爲ニ騷ギ動ク嶺ノ白雲ノヤウダ。

最勝四天王院障子に、吉野山書きたる所。

太上天皇

○みよし野の高嶺の櫻ちりにけり。嵐も白き春のあけぼの。

吉野山ノ高嶺ノ櫻ノ花ハ散ツタト見エルワイ。春ノアケ方見渡スト、吹キ下ス嵐モ花ヲ混ゼテ來ルノデ、白ク見エルヨ。

千五百番歌合に、

櫻色の庭の春風跡もなし。問はゞぞ人の雪とだに見む。

五〇　藤原定家朝臣

昨日迄ハ庭ヲ吹ク春風ハ花ヲ吹キ混ゼテ、櫻色ニ見エタガ、今日ハ最早其跡モナイ。惜シイコトダ。併シソレデモ、若シ今日誰カガ來テ見レバ、散リ敷イタ花ガ雪ノヤウニ見エルモノヲ。マダ少シハ面白イノニ、誰カ來ナイカ知ラン。下句は古今集の「今日こずば明日は雪とぞ散りなまし消えずはありとも花と見ましや」よりとれり。

ひと年忍びて大内の花見にまかりて侍りしに、庭に散りて侍りし花を硯のふたに入れて攝政の許につかはし侍りし。　太上天皇

今日だにも庭をさかりとうつる花消えずはありとも雪かとも見よ。

庭ノ上ヲ花盛トナシテ、散ツテキタ美シイ花ヲ、今オマヘノ所ヘ遣ルガ、セメテ今日デモ是ヲ雪ト見テクレヨ。二タイ眞ノ雪ナラバ消エルモノダガ、是ハ消エズニツ殘テキルカラ、雪トハ見ラレナイカモ知レナイガ是ヲ雪ト思ツテ慰メテクレヨ。四の句消えずにありと思ひてと解ける美濃の説は誤れり。又此歌を全く不可解なりとせる尾張家笹の言こそ不可解なれ。本歌、金葉集「けさ見れば夜のあらしに散りはてゝ庭こそ花盛のりなりけれ」古今集「今日來ずば明日は雪とぞちりなまし消えずはありとも花と見ましや」

かへし。　攝政太政大臣

さそはれぬ人の爲とや殘りけむ、明日よりさきの花や白雪。

明日ニナルト花ハ雪ト見エルヤウニ散ルモノデスガ、明日ニナラヌ中ノ今日白雪ノヤウニ見エル此花ハ御召連レ遊バサレナカツタ此私ノ爲ニ消エズニ殘ツテ居ツタノデアリマセウ。

家の八重櫻を折らせて、惟明親王のもとに遣はしける。　式子内親王

八重にほふ軒端の櫻うつろひぬ。風よりさきにとふ人もがな。

八重ニ美シク咲キマシタ軒近クノ櫻ノ花モ最早盛ガ過ギマシタ。ドウゾ、風ガ吹カナイウチニ尋ネテ來テ此花ヲ見テ下サル御方ガアレバヨイト思ヒマス。風ガ吹イテハダメニナリマスカラ。

返し。　惟明親王

つらさかな、うつらふ色に八重櫻とへとも言はで過くる心は。

八重櫻ガ盛過ギテ色アセル迄モ、尋ネテ來ヨトモ仰ラズニ默ツテ御出デニナッタアナタノ御心ハ情ナイコトデアリマスワイ。とへは十重に音通ず。八重ざくらとへともいはてと詞のあやをなせり。

五十首歌奉りし時。　藤原家隆朝臣

さくら花夢かうつゝか白雲のたえてつれなき峯の松風。

一體コレハ夢デアルカ、ソレトモ實際ノコトデアルダラウカ。櫻ノ花ガ散ッテ終ッタノデ、峰ノ上ニカヽッテヰタ、白雲モ中ガ絶エタ。誠ニ無情ナ嶺ノ松風ダナア。たえては絶えて、誠にの爾意にかゝれり。しら雲はしらぬにかゝれり。本歌、古今集、「風ふけば峰にかゝれるしら雲の絶えてつれなき君が心か」、

題しらず。

皇太皇后宮大夫俊成女

うらみずや、浮世を花のいとひつゝさそふ風あらばと思ひけるをば。

浮世ヲ花ガ厭ッテ、誘フ風サヘアラバ何時デモ散ラウト風ノ吹クノヲ待ッテヰル心ヲ恨マズニ居ヨウカ。私ハ恨ムヨ。四の句、小町の「わびぬれば身を浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」の詞をとれり。

後德大寺左大臣

はかなさを外にも言はじ。さくら花咲きてはちりぬ。あはれ世の中。

世ノ中ノハカナイコトヲ、外ニ例ヘテ言フニハ及バナイ。櫻ノ花ガ咲クカト思ヘバ散ルヤウナ物ダ。嗚呼ハカナイモノダナア、世ノ中ハ。

入道前關白太政大臣家に、百首の歌よませ侍りける時。

俊惠法師

眺むべき殘りの春を數ふれば花と共にも散る涙かな。

今カラ後花ヲ見ルコノ出來ル春ガイクラアルカト數ヘテ見ルト、私ハ最早年ヲ取ッテシマッタノデ是カライクラモ長生キシナイカラ、花ガ散ルノヲ見ルト、花ト一緒ニ涙モ落チルワイ。

花の歌とてよめる。

般富門院大輔

花もまた別れむ春は思ひ出てよ、咲き散るたびの心つくしを。

花ガ咲クニツケ散ルニツケテ私ガ色々心配シタコトヲ、私ガ死ンダ後ノ春ニハ、花モ亦思ヒ出シテクレヨ。

千五百番歌合に。

左近中將良平

ちる花の忘れ形見の嶺の雲そをだにのこせ、春の山風。

峯ノ上ノ雲ハ散ッタ花ノ忘レ形見デアルカラ、花ハ無クナッテモ最早仕方ガナイガ、セメテ其雲ダケデモ殘シテ置イテクレ、春ノ山風ヨ。二の句古今集の「あかでこそ思はん中は離れなめそをだに後の忘れかたみに」といふ歌の詞をとれり。

落花といふことを。

藤原雅經

花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしは匂へ、春の山風。

春の山風ヨ。オマヘハ花ヲサソッテ、散ラシテ終フガ散ル花ノ名殘ノ香ヲ雲ノ中ニ吹キ止メテ置イテ、暫クハ香リノアル雲トシテ匂ッテクレヨ。

題しらず。

後白河院御歌

惜しめども散はてぬればさくら花今は梢をながむはかりぞ。

櫻ノ花ノ散ルノヲ惜ンデモ、花ハ皆散ッテ終ッタカラ、今ハ只梢ヲ眺メルバカリダゾ。矢張惜シクテ花ノ木ガ眺メラレルワイ。

攝政太政大臣

殘春の心を。

吉野山花の故里あとたえて空しき枝に春風ぞ吹く。

吉野山ノ花ノ散ッテ終ッタ後ノ故里ハ、尋ネテ來ル人跡モ絶テ果テ、シマッテ、花ノ無イ枝ニ春風ガソヨソヨト吹イテヰルヨ。花の故里は花の散り過ぎたる跡と、故郷との兩義なり。四の句甲斐なき枝の義ありとせる尾張の説わろし。

大納言經信

題知らず。

ふるさとの花のさかりは過ぎぬれど面影さらぬ春の空かな。

故郷ノ花ノ盛ハトウニ過キ去ッタケレドモ、マダ春ノ花ノ景色ガ目ノ前ニ見エテ居ルワイ。

式子內親王

百首歌の中に。

花は散りその色と無くながむれば空しき空に春雨ぞ降る。

花ハ散ッテ終ッタ。花ノアル時ハ花ノ色ヲ眺メタガ、モウ花モ無イノデ、何ノ色ヲ眺メルト云フコト無シニ眺メヲ見レバ、花ガ散ッテ終ッテ、何モ無イ空ニ春雨ガ降ッテ居ルヨ。アヽ淋シイ。二三の句伊勢物語の「くれがたき夏の日くらしながむればその事となく物ぞ悲しき」より取れり。

小野宮のおほきおほいまうち君、月輪寺に花見侍りける日よめる。

清原元輔

誰が爲めに明日は殘らむ。山櫻こぼれて匂へ、今日の形見に。

山櫻ヨ。今日ノ形見トシテ散ルマデモ咲イテシマヘ。誰ノ爲ニ明日迄咲キ殘ッテ居ルベキコトデアラウゾ。今日ハ貴イ御方ノ御出テダカラ、勢一杯咲イテ御覽ニ入レロ。明日迄咲イテヰテツマラナイモノニ見ラレテモ何ニモナラヌカラ。

曲水宴をよめる。

中納言家持

から人の舟を浮べて遊ぶてふ今日ぞ、わがせこ花かつらせよ。

今日ハ唐ノ人ガ舟ヲ浮ベテ遊ブト云フ曲水宴ノ三月三日デアルゾヨ。吾ガ同輩ノ人々ヲヨ。花ヲ髮ニツケテ遊ビナサイ。此歌萬葉卷十九にあり。

紀貫之曲水宴し侍りける時、月入テ花ノ流レ瀨ニ晴シといふことをよみ侍りける。

坂上是則

花流す瀬をも見るべき三日月のわれて入りぬる山のをち方。

三日月ノ光デ、花ノ流レル瀬ヲモ見ルコトガ出來ルノニ、三日月ガ不道理ニモ山ノ遠方ニ入ッテ終ッタヨ。殘ホナ〻チシタ。われては無理にの義、三日月の形に緣あるべし。

雲林院の櫻見にまかりけるに、皆散りはて〻はつかに片枝に殘りて侍りければ。

良暹法師

尋ねつる花も我身も衰へて後の春ともえこそ契らね。

殘ッテキル花ガ有ルカト思ッテ來テ見レバ、花ハミスボラシク少シ殘ッテキルバカリデアルガ、私ノ身モ最早衰ヘタカラシテ、又來年來ヨウト花ト約束ヲスルコトモ出來ナイ。

千五百番歌合に。

寂蓮法師

思ひ立つ鳥は古巢もたのむらむ。馴れぬる花のあとの夕暮。

モウ古巢ニ歸ラウト思ヒ立ツ鶯ハ、古巢ヘ歸ルト云フ頼モアルデアラウ。併シ自分ハ今迄ハ馴レテ來タ花ガ散ッテ終ッタタ暮ニ何處ヘモ歸ル所モ無ク誠ニ寂シイ事ダ。

散りにけり、あはれ恨の誰なれば花のあととふ春の山風。

花モ、ハヤ散ッテ終ッタワイ。嗚呼花ヲ散ラシタ恨ノアルモノハ誰デアルト思ッテ、花ノ散ッタ後ヲ春ノ山風ガ尋ネテ歩クノデアラウカ。風ガ自分デ花ヲ散ラシタ癖ニ。

春ふかく尋ねいるさの山の端にほの見し雲の色ぞ殘れる。

權中納言公經

春モ深クナッテ近所ニ花ガ無クナッタノデ深ク入佐山迄モ尋ネテ入ッテ見ルト、此山ニモ曾テ雲カト思ッタ花ハ今ハ無クナッテ終ッテ、山ノ端ニ雲ガ先頃見タ花ノ色ヲシテ殘ッテキルヨ。入佐山ハ入るにかけたり。

百首歌奉りし時。

初瀬山うつろふ花に春くれてまがひし雲ぞ峯に殘れる。

摂政太政大臣

初瀬山ハ花ガ散ッテ、春モ暮レテ、先頃花ノ盛ノ時ニ花デハナイカト思ハレタ雲ダケガ、山ノ上ニ殘ッテキルヨ。

よしの川岸の山吹咲きにけり。峯の櫻は散り果てぬらむ。

藤原家隆朝臣

吉野川ノ岸ノ山吹ガ咲イタワイ。コレデハ山ノ上ノ櫻ノ花ハ最早散ッテシマッタデアラウ。

皇太后宮大夫俊成

○駒とめてなほ水かはむ、山吹の花の露そふ井出の玉川。

山吹ノ花ノ露モ一緒ニ混ツテキル井出ノ玉川ニ、馬ヲ止メテモット水ヲ飲マセテ居ヨウ。露ヲ宿シタ山吹ノ花ガ奇麗ダカラ、何時迄モ眺メタイモノダ。

堀川院御時、百首歌奉りけるに。　　權中納言國信（サヂ）

岩根越す清瀧川の早ければ浪をりかくる岸の山吹。

岩ノ上ヲ越シテ流レル清瀧川ノ水ガ早イカラシテ、岸ノ山吹ノ花ノ上ニ浪ガ打寄セ打寄セシテカヽルヨ。

題しらず。　　厚見王

蛙鳴く神なび川に影見えて今や咲くらむ山吹の花。

蛙ノ鳴ク神無備川ニ影ヲ映シテ、今丁度山吹ノ花ガ咲イテキルデアラウ。此歌萬葉八に出てたり。古今六帖には千早振神なび川として出でたり。

延喜十三年亭子院歌合の歌。　　藤原興風

足引の山吹の花散りにけり。井出の蛙は今やなくらむ。

●山吹ノ花ガ散ッタワイ。山吹ノ花ノ頃ハ蛙ガナクモノダガ、コレデハ、井出ノ蛙ハ多分今頃鳴クデアラウ。井出は山城の名所なり。

飛香舎（梅）にて藤の花の宴侍りけるに。　　延喜御歌

かくてこそ見まくほしけれ、萬代をかけてしのべる藤浪の花。

萬代モ末長クッヾクカト思ハレテ、盛リ長ク咲イテ居ル藤ノ花ヲ、斯シテ何時迄モ盛ノ時ニ見タイモノダナア。

天暦四年三月十四日、藤壺にわたらせ給うて、花惜しませ給ひけるに。　　天暦御歌

團居して見れども飽かぬ藤浪のたゝまくをしき今日にもあるかな。

多クノ人ガ集マッテ、一緒ニ見テモ藤ノ花ハ飽クコトガ無クテ、今日ハ坐ヲ離レルコトガ惜シイワイ。本歌古今「思ふどちまとゐせる夜はからにしき立たまくをしきものにぞありける」

清慎公ノ家の屏風に。　　貫之

ゝれぬとは思ふものから藤の花咲ける宿には春ぞ久しき。

春ハ既ニ暮レテ終ッタト思フケレドモ、藤ノ花ノ咲イテキル家ニハ春ガマダ久シク續イテキルヤウニ思ハレルヨ。藤原氏を祝へるなり。清慎公ハ藤原實賴なり。

藤の松にかゝれるをよめる。

みどりなる松にかゝれる藤なれどものが頃とぞ花は咲きける。

常磐ノ松ニカ、ッテ居ル藤ノ花デアルケレドモ、自分ノ咲クベキ時デアルト思ッテ花ハ咲イタワイ。松ノ色ハ何時モ同ジダカラ時ヲ知ラヌカト思ッタニ。

藤原道信朝臣

春の暮方、實方朝臣の許につかはしける。

散り殘る花もやあると打ちむれて深山がくれを尋ねてしがな。

春ハクレテ花ハ無クナッタガ、ソレデモヒヨットシタラ散ラズニ殘ッテヰル花ガアルカト、アナタト一緒ニナッテ、奥山ノ陰ニ花ヲ尋ネテ見タイモノデスナア。

大僧正行尊

修行し侍りける頃、春の暮によめる。

木のもとのすみかも今は荒れぬべし。春し暮れなば誰れか問ひ來む。

花ノ木ノ下ノ私ノ家モ最早荒レ果テ、シマウデアラウ。花ガ咲イテ居タ間ハ人モ訪ネテ來タガ、花ガ散ッテ春モ暮レテシマッタナラ、誰ガ尋ネテ來ルモノガアラウニ。淋シイコダ。

寂蓮法師

五十首歌奉りし時。

○くれて行く春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟。

暮レテ行ク春ノ止マル所ハ何處カ知ラナイガ。宇治川ノ柴ヲ積ンダ舟ガ霞ノ立チ籠メタ川下ノ方ニ下ッテ行ク。春ノ止マル所モ多分アノ方角デモアラウカ。二の句、古今集の「年毎に紅葉流る立田川湊や秋のとまりなるらむ」とあるよりとれり。

藤原伊綱

山家に三月盡をよみ侍りける。

來ぬまでも花ゆゑ人のまたれつる春も暮れぬるみ山邊の里。

山邊ノ里ハ尋ネテ來ル人モナイケレドモ、ソレデモ花ガ咲イタカラ、ヒヨットシタラ來ルモノモアルカト人ガ待タレタガ、到頭來ル人モナクテ、春モ暮レテシマッタ。

皇太后宮大夫俊成女

題知らず。

石上ふるのわさ田をうちかへしうらみかねたる春の暮かな。

一二返ス返スモ惜シクテ惜シクテ、恨メシクテ我慢ガ出來ナイ春ノ暮レダナア。一二の句は序なり。されど田をうちかへすこと時節によせあり。上の句後撰集の「うちかへし君ぞ戀ひしき石の上布留のわさ田のおもひ出てつゝ」の言葉を取れり。

讀人不知

寛平の御時、后の宮の歌合のうた。

またといふに止まらぬものと知りながら強ひてぞ惜しき、春の別れは。

待テト言ッタ所デ止マラナイモノトハ知ッテヰルガ、春ニ別レルノハドウシテモ惜シイモノダヨ。

宮内卿

山家暮春といへる心を。

柴の戸をさすや日影の名殘無く春暮れかゝる山の端の雲。

今日ハ春ノ最終ノ日デアルノニ、柴ノ戸ニ映ツタ日ノ光モ名殘ナク、山ノ端ノ雲ヲ彩ツテキタ入日スラ名殘無クナツテ終ツテ春モ今暮レヨウトシテキルヨ。柴の戸をさすに戸を閉すの連想薄くあるべし。然れども柴の戸を閉す事にて日影のさす餘は無しと言へる尾張は非常なるあやまりなり。

百首歌奉りし時。

攝政太政大臣

明日よりは志賀の花園稀にだに誰かは訪はむ、花のふるさと。

志賀ノ花園ハ花ノ咲イテキタ時ハ人ガ多ク尋ネテ來タモノデアルガ、最早今日限リデ春モ暮レテシマウカラ、明日カラハ此志賀ノ花園ヲ誰ガ訪ネテ來ルデアラカ。コンナ花ノ散ツテ終ツタ舊都ナドヲ、誰モ尋ネテ來ル人ハアルマイ。

新古今和歌集卷第三

夏歌

持統天皇

題しらず。

○春過ぎて夏來にけらし。白妙の衣ほすてふ天の香具山。

春ガ過キテ夏ガ來タト見エル、白イ夏衣ヲ干スト云フ天ノ香具山ニ、成ル程衣ガ干シテアルカラ。此歌萬葉一、「春過きて夏來るらし白栲の衣ほしたり天の香具山」とあるを燒直せるなり。

素性法師

○惜しめども止まらぬ春もあるものを言はぬにきたる夏衣かな。

イクラ惜ンデモ止マラナイ春モアルノニ、來テクレトモ言ハナイノニ來ル夏ダナア、モウ夏ニナツタ。イヤナコトダ。來たるを着たると見て、夏衣として文をなせり。衣に意味なし。

前大僧正慈圓

ちりはて、花の蔭なき木のもとにたつことやすき夏衣かな。

最早夏衣ヲ裁ツヤウニナツタソイ。モウ夏ニナツタヤイ。上の句序にして立つを裁つとかけたり。時節のかはり易きを嘗へるなり。本歌、古今集の「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花のかげかは。」

春を送りて昨日の如しといふことを。　源道濟

夏衣着て幾日にかなりぬらむ、殘れる花は今日もちりつゝ。

夏衣ニ着更ヘテカラ幾日タツタデアラウカ。咲キ殘ツテキル花ハ、今日モヤハリ散ツテキルガ。何ダカマダ春ガ過ギタハカリノヤウナ氣ガスル。

夏の始めの歌とてよみ侍りける。　皇太后宮大夫俊成女

折ふしもうつればかへつ、世の中の人の心の花染めの袖。

世ノ中ノ人ノ心ハ花染メノヤウニカハリヤスイモノダガ、時節ガ替レバ世ノ中ノ人ノ心モ變ツテ、春着ダ花染ノ袖ノ着物ヲ夏衣ニ着カヘタヨ。本歌古今「色見えてうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」同「世の中の人の心は花染のうつろひやすきものぞありける。」

卯花如月といへる心をよませ給ひける。　白河院御歌

卯の花のむら〳〵咲けるかきねをば雲間の月の影かとぞ見る。

卯ノ花ガ籬ニムラ〳〵ト所々集マツテ咲イテキルノヲ、雲ノトギレタ間カラ照ス月影デハナイカト思フヨ。眞白デ丁度月ノヤウニ見エル。

題しらず。　大宰大貳重家

卯の花の咲きぬる時は白妙の浪もてゆへる籬根とぞ見る。

垣根ニ卯ノ花ガ咲イタ時ハ花ガ眞白ナノデ、白イ浪デコシラヘタ垣根ノヤウニ見エルヨ。三四の句、古今の、「わたつみのかさしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路島山」の詞をとれり。

齊院にて侍りける時、神だちにて。　式子內親王

忘れめや、葵を草にひきむすび假寢の野邊の露のあけぼの。

私ハ葵ヲ結ンデ草枕トシテ、神館デ假寢ヲシタ野邊ノ露フカイ夜明ケノコトヲ忘レヨウカ。決シテ忘レハシナイヨ。美濃の說いとこちたし。

あふひをよめる。　小待從

いかなればそのかみ山の葵草年はふれども二葉なるらむ。

怎ウシテ其、神山ノ葵ノ草ハ、多クノ年ガ經ツテモ二葉ノマヽデキルノダラウ。生エタバカリノヤウニ二葉デキルトハ不思議ナコトダ。二の句のそのかみに昔の意あり。葵の草は二葉相對するものなればかくよめるなり。

最勝四天王院の障子に、あさかの沼かきたる所。　藤原雅經

野邊はいまだあさかの沼にかる草のかつみるまゝに茂る頃かな。

此頃ハ野邊ハ未、草ノ茂リヤウモ深クナイノニ、安積ノ沼デ人ガ苅リ取ル勝見ト云フ草ガ見テキルウチニ茂ッテ行クロイ。野の草をよめるなりといふ説あれども、藩賛に傍題はあまりなるべし。二四の句古今の「陸奥の安積の沼の花かつみかつ見る人にこひやわたらむ」よりとれり。

崇德院に百首歌奉りける時、夏の歌。　待賢門院安藝

櫻あさのをふの下草しげれ、たゞ、あかて別れし花の名なれば。

櫻麻ノ苧ガ生エテキル下ニ生エタ草ヨ。唯茂ッテクレヨ。見飽キナイデ別レタ櫻ノ花ト同ジ名ノ櫻麻ダカラ、其下草モナツカシイ心地ガスルカラ。櫻あさとあれど、萬葉十一「櫻麻のをふの下草露しあればあかしていゆけ母は知るとも」同十二、櫻麻のをふの下草早く生ひば妹が下紐解かざらましを」皆をとよみたれば是も櫻麻とすべきか。

題しらず。　曾禰好忠

花散りし庭の木の間もしげりあひて天照る月の影ぞまれなる。

花ガ散ッテ終ッテ、淋シク見エタ庭ノ木ノ間モ、今デハ葉ガ茂リ合ッテ、空ヲ照ラス月ノ影ノ洩レテ來ルノモ稀デアルヨ。

かりに來とうらみし人の絶えにしを草葉につけてしのぶころかな。

假初ニ實意無クテ尋ネテ來ル人ダト恨ミニ思ッテ居タ人ガ、スッカリ絶エテ、終ッテ、全ク來ナイヤウニナッタノヲ、忍草ナドノ茂ッテ行クノヲ見ルニツケテ、偲ブト云フ名カラ其人ノコトヲ思ヒ出スワイ。一の句苅りに來と言ひかけて文をなせり。

夏草はしげりにけりな、玉桙の道行く人もむすぶばかりに。　藤原元眞

夏草ハ㊀道中スル人モ迷ハナイヤウニ、道標ニ結ブ程迄ニ茂ッタワイ。

夏草は茂りにけれど郭公などわが宿に一聲もせぬ。　延喜御歌

夏草ハ茂ッタノニ郭公ヨ、何故我宿ニ一聲モ鳴カナイノカ。夏ニナレバ鳴クモノダノニ、夏ガ深クナッタ草ガ茂ル頃迄鳴カナイノハドウシタノカ。

鳴く聲をえやはしのばぬ、郭公初卯の花のかげにかくれて。　柿本人麿

郭公ガ初メテ啼イタ卯ノ花陰ニカクレテ、鳴ク聲ガ聞エルガ、鳴クヿヲ我慢シテ居ルコトガ出來ナイノカ知

ラン。花ガ奇麗ダカラ浮レテ鳴クノダラウカ。一の句反語と見るは悪し。

賀茂にまうでゝ侍りけるに。人の郭公なかなん（鳴ケバヨイ）と申しけるあけぼの、

片岡の木ずゑをかしく見え侍りければ。　紫式部

ほとゝぎす聲待つほどは片岡の森のしづくに立ちやぬれまし。

郭公ノ鳴クノヲ待ッテヰル間ハ、此片岡ノ森ノ下カゲニ立ッテ、柿セラ落チル雫ニ濕レヨウカナア。アンマリ片岡ノ森ノ景色ガヨイカラ。

賀茂にこもりたりける曉、子規鳴きければ。　辨乳母

郭公深山いづなる初聲をいづれの里の誰か聞くらむ。

アノ今郭公ノ鳴ク聲ガ聞エルガ、郭公ガ奥山ヲ出カケタバカリノ初聲ヲ私ト同ジヤウニ、何處ノ里ノ誰ガ聞クノデアラウカ。

題しらず。　讀人しらず

五月山卯の花月夜ほとゝぎす聞けども飽かず。又鳴かむかも。

五月ノ頃ノ山ノ卯ノ花ガ奇麗ニ咲イテ丁度月夜ノヤウニ見エル夜ニ、郭公ノ鳴ク聲ヲ聞イタケレドモ飽キナイ。マウ一度鳴ケバヨイガナア。

おのが妻戀ひつゝや鳴く、五月やみ神南備山の山ほとゝぎす。　中納言家持

五月ノ暗ノ夜ニ、神南備山ノ郭公ハ自分ノ妻ヲ戀ヒ慕ッテ鳴クノデアラウカ。類リニ鳴ク聲ガ聞エル。

郭公一聲鳴きて去ぬる夜はいかでか人のいをやすくぬる。

郭公ガ一聲鳴イテ家ノアタリヲ過ギ去ッタ晩ハ、ドウシテ人ガ安ラカニ眠ルヿガ出來ヨウニ。今一聲聞キタイト思ッテナカ〳〵眠ラレルモノデナイ。

ほとゝぎす鳴きつゝ出づる足引のやまとなでしこ咲きにけらしも。　大中臣能宣朝臣

〔五〕大和撫子モ最早咲イタラシイワイ。上の句やまといふ爲の序なり。折からの景物を詠み入れたる有心の序なり。

二聲と鳴きつと聞かば郭公衣かたしきうたゝねはせむ。　大納言經信

郭公ガ二聲鳴イタト聞イタナラバ、衣ノカタ袖ヲ下ニ敷イテ、獨デ假寢ヲシヨウ。一聲デハ假寢モシナイ。二聲ナラ假寢位ハシテモヨイ。澤山聞カナケレバ本當ニ床ニハ入ラナイ。

待客聞時鳥といへる心を。　白川院御製

ほとゝきすまだうらとけぬしのび音は來ぬ人を待つわれのみぞ聞く。

郭公ノマダ心ノ解ケナイヤウナ忍ンデ鳴ク聲ハ、約束シタバタリデマダ來ナイ人ヲ待ツテ居ル自分バカリガ獨デ聞クヨ。コンナニ遲クマデ起キテヰルモノハ他ニアルマイカラ。まだうちとけぬと云ふに、友と對坐せて心のうちとけぬ體と呼應せしめたり。

題しらず。　花園左大臣

聞きてしもなほぞ寢られぬ、郭公まちし夜ごろの心ならひに。

郭公ノ鳴クノヲ待ツテ寢ナカツタ夜ノ習慣ガツイテ、鳴ク聲ヲ聞イテモヤハリ寢ルコトガ出來ナイヨ。

神館にて郭公をきゝて。　前中納言匡房

卯の花のかきねならねど郭公月の桂のかげになくなり。

郭公ハ能ク卯ノ花ノ垣根ニナクト云フコトダガ、今鳴クノハ其卯ノ花ノ垣根デハナイガ、神館ニカケテアル葵ノ髮ノ際デ鳴イテヰルワイ。月の桂は唯、かつらと言はんが爲に用ゐしのみ。かつらは葵髮の事なり。

入道前關白右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍けるとき郭公の歌。　皇太后宮大夫俊成

昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ、山時鳥。

私ハ夜ノ雨ニ過キ去ツタ昔ノコトヲ思ヒヤツテ、草ノ庵ノ中デ獨袖ヲ絞ツテヰルノニ、此上ニ又山時鳥ヨ。オマヘノ鳴聲デ更ニ涙ヲ添ヘルヤウナコトヲスルナ。二三の句白樂天の「閑省花時錦帳下、孤山夜雨草庵中」より來れり。

雨注ぐ花橘に風すぎて山ほとゝぎす雲に鳴くなり。

雨ガ降リカヽル花橘ニ、風ガザアート吹キ渡ル時、山郭公ガ雲ノ上デ鳴ク聲ガスルワイ。

題しらず。　相模

聞かでただ寢なましものをほとゝぎすなかゝなりや、夜半の一聲。

郭公ノ鳴クノヲ聞カナイデイツソ早ク寢テシマヘバ良カツタノニ、夜半ニ一聲聞イタ爲ニ却テ寢ラレナイデ困ルヨ。

誰か里もとひもや來ると郭公心のかぎりまちぞわびまし。　紫式部

郭公ガ尋ネテ來ルカト、誰レノ住ム里デモ皆一生懸命郭公ヲ待詫ビテヰルコトデアラウヨ。

寛治八年前太政大臣高陽院の歌合に、郭公を。　周防内侍

夜をかさね待ちかね山のほとゝぎす雲井のよそに一聲ぞきく。

幾夜モ〳〵待チ兼ネテ山時鳥ノ聲ヲヤツト空ノアチラ遙ニ一聲聞イタヨ。ヤツト氣ガ晴レタ。待ちかねは摂津の名所なり。されども此處は只の言ひかけにて、此山の郭公にはあらず。

按察使公通

海邊郭公といふことをよみ侍りける。

ふた聲と聞かずば出てじ、ほとゝぎす、幾夜あかしの泊なりとも。

郭公ノナク聲ヲ二聲マデ、聞カナケレバ縱令幾夜明カサウトモ此明石ノ泊ヲ舟出ハスマイ。

民部卿範光

百首歌奉りし時夏歌ノ中に。

郭公なほ一聲は思ひ出でよ、老いその森の夜半の昔を。

郭公ヨ。大江公資ガ「東路の思ひ出にせむ時鳥老いその森の夜半の一聲」トイフ歌ヲ詠ンダアノ昔ヲ思ヒ出シテ一聲鳴イテクレヨ。公資の歌後拾遺集にあり。

八條院高倉

時鳥をよめる。

一聲は思ひぞあへぬ、郭公、たそがれ時の雲のまよひに。

雲ガ亂レテ飛ブ日暮方ニ鳴イタ郭公ノ一聲ハ、何ダカボンヤリシテ郭公トハ思ハレナカツタヨ。

摂政太政大臣

千五百番歌合に。

有明のつれなく見えし月は出ぬ、山ほとゝぎす待つ夜ながらに。

山郭公ハ宵カラ待ツタマヽデ、到頭鳴カナイデ、却テ出サウニモナカツタ有明ノ月ハ出タヨ。到頭夜ガ明ケテシマツタ。一二ノ句古今集の「有明のつれなく見えしわかれよりあかつきばかりうきものはなし」の詞をとれり。

皇太后宮大夫俊成

後德大寺左大臣ノ家に十首歌讀み侍りけるによみて遣しける。

吾が心如何にせよとて郭公雲間の月のかげになくらむ。

私ノ心ヲ如何シロト云ウテ郭公ハカナシサウナ雲間ノ月ノ光ニ、悲シゲニ泣クノデアラウカ。コンナニ悲シサウデハ心ガ亂レテ何トモ仕樣ガナイワイ。

前太政大臣

郭公の心をよみ侍りける。

郭公鳴きているさの山の端は月ゆゑよりも恨めしきかな。

時鳥ガ鳴イテカクレテシマツタ山ノ端ハ、月ガ入ルノガ惜シクテ恨メシイノヨリモ一層恨シイワイ。

權中納言親家

有明の月は待たぬに出でぬれどなほ山深き時鳥かな。

郭公ヲ待ツテヰルウチニ夜明ケニナツテ有明ノ月ハ待チモシナイニ最早出タケレドモ、時鳥ハマダ山深クニ隠レテ居テ少シモ出テ鳴カナイワイ。

杜間郭公といふことを。

藤原保季朝臣

過ぎにけり、信太の森の郭公、絶えぬ雫を袖に殘して。

信太ノ森デ鳴ク郭公ガ、悲シクテ止マラナイ涙ヲ私ノ袖ニ殘シテ置イテ、飛ンデ行ツタワイ。アンマリ郭公ノ聲ガ悲シイノデ、涙ガ止マラナイワイ。雫といへるは信太森の縁なり。

題知らず。

藤原家隆朝臣

如何にせん、來ぬ夜あまたのほとゝぎす待たじと思へば村雨の空。

イクラ待ツテモ郭公ガ來ナイ晩ガ多イノデ、モウ今夜コソハ待ツマイト決心シテ見ルト村雨ガ降リ出シテ來テ、如何ニモ郭公ノ鳴キサウナ晩ダ。ハテドウシタモノヤラ。本歌拾遺集「たのめつゝ來ぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞまつにまされる」

百首歌奉りしに

式子内親王

聲はして雲路にむせぶ郭公涙や注ぐ、宵の村雨。

聲ガ聞エテ雲ノ上デ咽ブヤウニ郭公ガ啼イテ居ルガ、今夜降ル村雨ハ其涙ガ落チタノデハナカラウカ。古今集の「聲はして泪は見えぬ郭公我衣手のひづをからなん」を本歌とせり。

千五百番歌合に。

權中納言公經

ほとゝぎす猶うとまれぬ心かな。なが鳴く里のよその夕暮。

郭公ヨ。オマヘハ此處バカリデハ無ク、晩ニナルト方々ノ里デ鳴クガ、ソレデモヤハリ私ハオマヘヲ思ヒ切ル氣ハ無イワイ。本歌古今集「郭公ながなく里の數多あれば猶うとまれぬ思ふものから」疎まれぬのぬは本歌にては完了の肯定なるに、此歌にては否定に用ゐたり。

題しらず。

西行法師

○聞かずとも此處をせにせむ、郭公、山田の原の杉の村立。

山田原ノ杉ノ澤山立ツテヰル所ハ、良イ景色デ郭公ノ鳴キサウナ所ダカラ縱令郭公ノ鳴クノヲ聞カナイニシテモ、私ハ此處ヲ聞ク場所トシテ此處ニ居ヨウ。

○郭公深き峯より出てにけり。外山の裾に聲の落ち來る。

郭公ハ深イ山カラ出テ來タワイ。今里近イ端山ノ麓ニ聲ガ落チルヤウニ高イ所カラ聞エテ來ルヨ。

山家曉郭公といへる心を。

後徳大寺左大臣

小笹葺く賤のまろ屋のかりの戸をあけ方に鳴く郭公かな。

笹デ葺イタ賤シイ者ガ住ンデヰル假屋ノ假ニ作ツタ戸ヲ、夜明ケ方明ケル時ニ郭公ガ鳴クワイ。あけ方かけ

同なり。

五首歌人々よませ侍りける時、夏の歌とて詠み侍りける。

攝政太政大臣

うちしめりあやめぞかほる、郭公鳴くや五月の雨の夕ぐれ。

郭公が鳴ク五月ノ雨ノ降ル晩ニ。シツトリト菖蒲ノ香ガスルヨ。しめりなどゝ其ノ心持ダ。美濃にてべて物のにほひはしめればまさる物なりといへるを、尾張乾げばまさる物なりと爭へるは滑稽なり。

述懷によせて百首歌よみ侍りける時。

皇太后宮大夫俊成

今日はまたあやめのねさへかけそへて亂れぞまさる、袖の白玉。

何時モ涙ガカヽツテキルノニ、今日ハ菖蒲ノ根デ拵ヘタ薬玉迄モカケ加ヘタノデ、袖ノ上デ薬玉ト涙ノ白玉ト亂レ合ツテキルヨ。二の句れは泣く音の意もあり。

五月五日薬玉遣し侍りける人に。

大納言經信

飽かなくに散りにし花のいろ〳〵は殘りにけりな、君が袂に。

見飽カナイ内ニ散リテシマツタ花ノ色々ガ、アナタノ袂ニ殘ツテ咲イテ居マスヨ。今日ハ五月五日デ色々ノ作花デ拵ヘタ薬玉ヲ貴女ノ袂ニ懸ケタノデ見飽カナイ内ニ散ツタ花ガマダ殘ツテキルヤウナ氣ガシマス。五月日造花薬玉を作り、これを袂几帳等にかくるを以てかくいへるなり。

部屋隔り

局ならびに住み侍りける頃、五月六日もろともに眺め明して、

上東門院小少將

あしたに長き根を包みて紫式部に遣しける。

なべて世のうきになかるゝ菖蒲草今日までかゝるねはいかゞ見る。

凡テ世ノ中ノ浮沼ニ流レテキル菖蒲草ノ、今日差シ上ゲル斯樣ナ根ハ何ト御覽ニナリマスカ。私ハ此一般世間ノツライノニ泣イテ、昨日ハ暮シヤシテ、今日迄モ矢張聲ヲ出シテ泣イテキマスガ、ソレヲアナタハ何ト思ヒナサルカ。ながるゝは泣かると流るとにかけたり。

返し。

紫式部

何事とあやめは分かで今日も猶袂にあまるねこそ絶えせね。

何故トモ分リマセンガ、今日モヤハリ袂デ拭ヒ切レナイ涙ガ絶エズ出マス。あやめは文目、菖蒲に、れは根音にかけたり。

山畦早苗といへる心を。

大納言經信

早苗とる山田の筧洩りにけり。ひく注連繩に露ぞこぼるゝ。

苗ヲトツテ植エル山田ニカケタ筧ヲ洩ツタワイ。田ノ四方ニ張ツテアル注連繩ニ露ガコボレカヽルヨ。

釋阿に九十賀給はせ侍りし時、屏風に五月雨。　攝政太政太臣

小山田に引く注連縄の打はへて朽ちやしぬらむ、五月雨の頃。

五月雨ノ頃ハ山田ニ引張ッテアル注連縄ガスッカリ朽ッテ終ウデアラウ。打はへては引延ばす意にて、注連を長く張ることゝ縄の類りに朽ることゝをかけていへり。

題知らず。　伊勢大輔

如何ばかり田子の裳裾もそぼつらむ、雲間も見えぬ頃の五月雨。

毎日降リツヾイテ雲ノ切レ々間モ見エ無イ此頃ノ五月雨ニハ。其ゾニ農夫ノ着物ノ裾ガ濡レル「デアラウカ。

○三島江の入江の眞菰雨降ればいとゞしほれて苅る人もなし。　大納言經信

三島江ノ入江ニ生エテヰル菰ハ、雨ガ降ルト常ヨリモ一層萎レテサウシテ又誰モソレヲ苅リニ來ル人モナイ。

眞菰苅る淀の澤水深けれど底まで月の影は見えけり。　前中納言匡房

人ガ眞菰ヲ苅ル淀ノ澤ノ水ハ五月雨ニ増シテ深クナッタケレドモ、月ノ影ハ澄ミ渡ッテ底迄モ見エルワイ。

雨中木繁といふ心を。　藤原基俊

玉かしは茂りにけりな、五月雨に葉もりの神のしめはふるまで。

五月雨ガ降ルノデ、葉守ノ神ガ注連ヲ張ッテ守ル程迄モ、玉柏ノ葉ガ茂ッタワイ。此歌幽齋抄には、五の句しめわぶるまでとあり。然らば占め侘ぶるにて。葉守の神が寄りつかれない程葉が茂つたの磯なり。何れにても磯は聞えたり。

百首歌よませ侍りけるに。　入道前關白太政大臣

五月雨はおうの河原の眞菰草苅らでや浪の下に朽ちなん。

五月雨ニハ、飫宇の河原ノ眞菰ガ水ガ殖エタ爲ニ、苅ラナイデ浪ノ下ニナッタ儘デ朽ッテシマウ「デアラウ。飫宇の河原は出雲にあり。

五月雨の心を。　藤原定家朝臣

玉桙の道行き人のことづても絶えてほど經る五月雨の頃。

アマリ五月雨ガ續クノデ此頃ハ一道ヲ行ク人モ稀レテアルカラ、人ノ言ヅテモ絶エテシマッテ、久シクナルヨ。尼張に此歌五月雨に似つかはしからずといへるは非なり。上句「戀しなば戀もしれとや玉桙の道行く人のことつてもなき」の調をとれり。

荒木田氏良

五月雨の雲の絶え間を眺めつゝ窓より西に月を待つかな。

五月雨ノ雲ノ切レ目ヲ眺メテ、窓カラ西ノ方ニ向ッテ月ノ出ルノヲ待ッタワイ。月ガ出ルノヲ東ノ方ヲ見テ待ッテ居タケレドモ雲ノ絶エ間ガ無イノデ、其中ニ夜ガ更ケテ到頭月ガ西ニナッテシマッタ。

八〇

前大納言忠良

百首歌奉りし時。

櫻咲くそともの木蔭露落ちて五月雨晴るゝ風渡るなり。

櫻ガ咲イテヰル私ノ家ノ後ノ方ノ木蔭ニハ露ガパラ〳〵ト散ッテ、五月雨ガ晴レヨウトシテ雨晴レノ風ガ吹キ渡ルワイ。アヽヨイ景色ダ。

藤原定家朝臣

五十首歌奉りし時

五月雨の月はつれなきみ山より、ひとりも出づる時鳥かな。

五月雨ノ空ニ、月ハ無情デ、イクラ待ッテモ出ナイノニ、其山ノ上ヨリ独時鳥バカリガマア出テ來タワイ。

太上天皇

太神宮に奉りし夏歌の中に。

郭公雲居の外に過ぎぬなり、晴れぬ思ひの五月雨の頃

氣ノ晴レナイ鬱陶シイ五月雨ノ頃ニ、郭公ガ雲ノカヽッテヰル空ノアチラヲ通ッテ鳴イタワイ。美濃に本歌として古今の「秋霧のともに立出てゝ別れなば晴れぬ思に戀ひやわたらむ」をとりたれども、さる關係あるべしとも見えず。晴れぬ思ひの詞も此歌によらずとも誰にても思ひ浮ふことなるべし。

二條院讃岐

建仁元年三月歌合に雨後郭公といへる心を。

五月雨の雲間の月の晴れ行くを暫時まちける郭公かな、

五月雨ノ雲ノ絶間カラ月ガ晴ヤカニ照スノヲ、暫時待ッテ居テ郭公ガナイタワイ。雲ガ晴レテ月ガ出タラスグニ郭公ガナイタ。

皇太后宮大夫俊成

題知らず。

誰かまた花橘に思ひ出でむ、われも昔の人となりせば。

私モ亦死ンデ昔ノ人トナッタナラバ。花橘ノ香ニツケテ私ガ昔ノ人ヲ思ッタ通リニ、花橘ノ香デ誰ガ私ノヲ思ヒ出シテクレルダラウ。

右衛門督通具

行末を誰しのべとて夕風にちぎりかおかむ、宿の橘。

宿ノ橘ヨ。私ガ死ンダ後デ、橘ノ香ヲサセテ、私ノヲ誰ニ思ヒ出サシテクレヨト夕風ニ約束シテ置カウカ。誰モ私ノヲ思ヒ出スモノモアルマイカラ、其様ナ必要ハナイ。

式子内親王

百首歌奉りし時夏の歌。

歸りこぬ昔を今と思ひ寢の夢の枕ににほふたちばな。

歸ラナイ昔ノコトヲ今ノコトノヤウニ思ツテ寢テ、夢ニ昔ノコトヲ見タ枕ノホトリニ、橘ノ香ガシテ來ルヨ。花橘ノ香ハ昔ヲ思ヒ出サセルト云フノハ本當ノコトダ。二の句、今とを今になすよしもがなの意なりといへる美濃は附會の說なり。

前大納言忠良

橘の花散る軒の忍ぶ草昔をかけて露ぞこぼるゝ。

橘ノ花ガ散リカヽル軒ノ忍草ヲ見ルト偲ブト云フ名カラ昔ノコトガ思ヒ出サレテ涙ガコボレルヨ。露は忍草の緣なり。涙のことなり。

五十首歌奉りし時。

前大僧正慈圓

五月闇みじかき夜半のうたゝねに花橘の袖にすゞしき。

五月ノ暗ノ短イ夜ニ、ウタヽ寢ヲシテ居ルト、花橘ノ香ヲ送ツテ來ル風ガ私ノ袖ニ涼シク吹クヨ。

題知らず。

讀人知らず

尋ぬべき人は軒端の故里にそれかと薫る庭の橘。

私ノ尋ネル人ハ立退イテシマツタ故里ニ、其人ノ香デハナイカト思ハレルヤウニ、庭ノ橘ガ薫ツテキル。軒端は退きにかけたり。

ほとゝぎす花橘の香をとめて鳴くは昔の人や戀しき。

郭公ガ花橘ノ香ヲタヅネテ鳴イテ居ルガ、アレハ死ンダ昔ノ人ガ戀シイカラカシラ。橘ノ香ハ昔ノ人ノ袖ノ香ニ似テヰルト云フカラ。

皇太后宮大夫俊成女

橘のにほふあたりのうたゝ寢は夢も昔の袖の香ぞする。

橘ノ花ガ良イ香ヲスルアタリデ、轉寢ヲスルト、夢ニモ昔ノ人ノ袖ノ香ガスルヨ。花橘ノ香ハ昔ヲ思ヒ出サセルト出フガ本當ダナ。

藤原家隆朝臣

今年より花咲きそむる橘のいかで昔の香に匂ふらむ。

今年カラ花ガ咲キ初メタ橘ガ、ドウシテ昔ノ人ノ袖ノ香ガスルノデアラウ。不思議ナコトダ。

藤原定家朝臣

守覺法親王五十首歌讀ませ侍りける時。

夕ぐれはいづれの雲の名殘とて花橘に風のふくらむ。

俗ニ死ンダ人ハ雲ニナルト云フガ、夕方ニナルト死ンダ誰ガナツタ雲ヲ吹イタ名殘リデ、花橘ニ風ガ吹イテ、

昔ノ人ノ一ヲ私ニ思ヒ出サセルノデアラウ。

橘に郭公鳴きければよめる。　　増基法師

ほとゝぎす花橘のかばかりに鳴くや昔の名殘なるらむ。

郭公ガ花橘ノ香ニ、此樣ニ鳴クノハ昔ノ一ヲ思ヒ出シテゞアラウ。三の句かけ詞なり。此歌他本になし。

堀川院御時、ささいの宮にて、閏五月郭公といふ心をよのこども　　權中納言國信

ほとゝぎす五月水無月わきかねてやすらふ聲ぞ空にきこゆる。

今日ハ閏ノガ月ナノデ郭公ガ自分ガ鳴クベキ五月デアルカ、ソレトモ山ニ歸ルベキ六月デアルカワカラナイノデ、マゴツイテキル聲ガ空ニ聞エルヨ。

題不知。　　白河院御歌

○庭の面は月もらぬまでなりにけり、梢に夏の陰茂りつゝ。

庭ニハ木毎ニ綠ノ蔭深ク茂ツテ、月影モ洩ラナイヤウニナツタワイ。夏モ深クナツタナア。

我宿のそともに立てる楢の葉のしげみにすゞむ夏は來にけり。　　惠慶法師

私ノ家ノ後ニ生エテ居ル楢ノ葉ノ茂ツタ綠ノ蔭ニ涼ミヲスル夏トナツタワイ。

攝政太政大臣家百首歌合に、鵜河をよみ侍りける。　　前大僧正慈圓

鵜かひ舟あはれとぞ見る、もゝのふの八十宇治川の夕やみの空。

㊂八十宇治川ノ夕方ノ暗イ時ニ、鵜飼ヲシテ、魚ヲ捕ツテ居ル舟ヲ見ルト、何トナク物哀レナ心地ガスルヨ。二の句篝火にて見たるなりとの野州說は思ひ過ぎたり。

鵜かひ舟高瀨さしこすほどなれや、むすぼほれゆく篝火のかげ。　　寂蓮法師

鵜飼舟ガ今淺瀨ヲ棹デ漕イデ越シテヰル時ト見エルワイ。篝火ノ光ガ舟ノユレル爲ニ縺レテ來タヨ。

千五百番歌合に。　　皇太后宮大夫俊成

大井川かがりさし行く鵜かひ舟幾瀨に夏の夜をあかすらむ。

篝火ヲ焚イテ大井川ヲ棹ス鵜飼舟ハ幾何ノ淺瀨ヲ此短イ夏ノ夜ニ越ヘデアラウカ。澤山淺瀨ヲ越スデアラウナ。

久かたの中なる川のうかひ舟如何に契りて暗をまつらむ。　　藤原定家朝臣

月ノ中ニ生エテキル桂ト云フ名ヲ持ツタ此桂川ノ鵜カヒ舟ハ、怎ウイフ因縁デ暗ニナルノヲ待ツテ出テ來ルノデアラウ。月夜ニ出サウナモノダニ、不思議ナ「ダ。一の句月の枕詞なるをやがて月の意に用ゐしなり。

百首歌奉りし時。

いさり火の昔の光ほの見えて蘆屋の里に飛ぶ螢かな。

攝政太政大臣

昔業平が「晴るゝ夜の星か川邊の螢かもわがすむ方の蟹のたく火か」トヨンダアノ漁火ノヤウノ光ガホノカニ見エテ、芦屋ノ里ニ螢ガ飛ンデキルワイ。螢ノ光ガ丁度漁火ノヤウニ見エル。

窓ちかき竹の葉すさむ風の音にいとゞみじかきうたゝねの夢。

式子内親王

窓近クニ植エテアル竹ノ葉ニ、折々音ヲ立テル風ノ爲ニ目ヲサマサレテ、只サヘ短カイ夏ノ夜ノ轉寢ノ夢ガ一層短カイ。朗詠の風生竹夜窓間風とある意を取れり。（八代集抄美濃による）

鳥羽にて竹風夜涼といふことを人々つからまつりしに。

○まど近きいさゝむら竹風吹けば秋に驚く夏の夜の夢。

春宮權大夫公繼

窓近クノ笹竹ノ叢ニ風ガ吹クノデ、夏ノ夜ノ夢ガサメテ見レバ、世ノ中ガ秋ノヤウニ涼シイ。秋に驚くを「夏の夜の夢が秋になりてさめたるなり」といへる尾張説はわろし。

五十首歌奉りし時

むすぶ手に影亂れ行く山の井のあかでも月のかたぶきにけり。

前大僧正慈圓

手デ掬フト、山ノ清水ニ波ガ立ツテ、宿ツテキル月影モ亂レルモノダガ、丁度其樣ニ心ガ落付カズ、ユツクリト見ル間モナクテ月ガ西ノ山ニ入リサウニナツテシマツタワイ。本歌古今「掬ぶ手のしづくにごる山の井のあかでも人のわかれぬるかな」

寂勝四天王院の障子に、清見關書きたるところ。

清見潟月はつれなき天の戸をまたでもしらむ浪の上かな。

權大納言通光

清見潟ヲ見レバ、月ハ強情ニマダ殘ツテキル空ニ、月ノ入ルノヲ待タズニ夜ガアケテ浪ノ上ガ白クナツテ來タワイ。夏の夜の短きさまなり。八代集抄には「名におふ所の月なればさぞ清からむと待つほどに雜面く出やらぬに短夜なれば月をもまちあへず波の上うち白みて明しと也」とあれど、これは、またでも白むといふに留意せざりし謬なり。もし此抄の如くに言はゞ、月出づるを待ちて夜の明くるが常のことのやうになるべし。さる理あらむや。

家百首歌合に。

かさねても涼しかりけり、夏衣うすき袂にやどる月かげ。

攝政太政大臣

夏衣ノ薄イ袂ノ上ニ宿ル月影ハ重ネテモ涼シカツタワイ。衣ヲ重ネルノハ暑イモノダガ、月影ヲ重ネルノハ

涼シイ。

攝政太政大臣家にて、詩歌を合せけるに、水邊涼自秋といふこと をよみ侍りける。

有家朝臣

○涼しさは秋やかへりてはつせ川布留河の邊の杉の下かげ。

此初瀬川布留川ノ邊ノ杉ノ木ノ下陰ノ涼シイコトハ、秋ガ却テ恥ツルデアラウ。秋ヨリモ涼シイ位ダ。初瀬川布留川同じ川なり。大和にあり。はつせ川を恥つにかけたり。

題しらず。

西行法師

○道の邊に清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ちとまりつれ。

道ノ邊ニ清水ガ流レテヰル柳ノ陰ハ、暫時ノ積リデ立止ッタヨ。シカシアマリ涼シイノデツイ長ク休ンデシマッタ。

よられつる野もせの草のかげろひて涼しく曇る夕立のそら。

照ル日光ガ強イノデ、縋レ縮ンダ野一面ニ生エタ草モ雲ノ爲ニ陰ッテ勢ヲ恢復シテ、夕立ガ來サウナ空ハ涼シ過ッタヨ。

崇德院に百首歌奉りける時。

藤原清輔朝臣

おのづから涼しくもあるか、夏衣ひもゆふぐれの雨の名殘に。

㊀日モ暮方ニナッテ降ッタ夕立ノ名殘デ、自然ト涼シイワイ。四の句紐結ふの義にて夏衣にかゝるなり。

千五百番歌合に。

權中納言公經

露すがる庭の玉笹うちなびき一むらすぎぬ、夕立の雲。

露ガ危ウゲニ宿ッテヰル庭ノ笹ガ靡イテ、一村ノ夕立ノ雲ガ風ト共ニ雨ヲ降ラシテ過ギテ行ッタ。

雲隔遠望といへる心をよみ侍りける。

源俊頼朝臣

十市には夕立すらし。久方の天のかく山雲かくれ行く。

十市ノ方デハ夕立ガシテヰルラシイ。㊀天ノ香具山ガ段々雲ニ隱レテ行ク。天の香具山、十市の里共に大和にあり。

夏月をよめる。

從三位頼政

○庭のおもはまだかはかぬに夕立の空さりげなく澄める月かな。

庭ノ上ハマダ乾カナイノニ、夕立ノ降ッタ空ハ、ソンナ夕立ノ降ッタ樣子モ無ク澄ミ渡ッテ月ガ出タワイ。

百首歌中に。

式子内親王

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山に日ぐらしの聲。

夕立ノ雲モ名殘無ク晴レテ夏の夕日ガ隱レヨウトシテ居ル山デ、蜩ノ鳴ク聲ガスル。

前大納言忠良

千五百番歌合に。

○ゆふづく日さすや庵の柴の戸にさびしくもあるか、日ぐらしの聲。

夕方ニナッタノデ閉ザタ柴ノ戸ニ夕日ガ映ッテ蜩ノ鳴ク聲ガ淋シク聞エルワイ。さすは夕日と柴の戸にかゝれり。

攝政太政大臣

百首歌奉りし時。

秋近きけしきの森に鳴く蟬のなみだの露や下葉そむらむ。

秋近イ景色ニナッテキル景色ノ森ニ鳴ク蟬ノ紅イ涙ノ露ガ木々ノ下葉ヲソメルノデアラウ。けしきの森大隅にありと八雲御抄に見ゆ。尾濃に涙の露を紅涙なりといへる說はわろしと言へるはいかゞ。此頃の歌にかくよめるは皆紅涙のことなり。

二條院讃岐

なく蟬の聲も涼しき夕ぐれに秋をかけたる森の下露。

鳴ク蟬ノ聲モ涼シイ夕方ニ、森ノ中デハ木カラ落チル露モ冷デ夏デアリナガラ秋ヲ兼タヤウデアル。

螢の飛びのぼるを見てよみ侍りける。

壬生忠見

いづちとか夜は螢のぼるらむ、行き方しらぬ草の枕に。

何地ヘト志シテ、夜ニナルト螢ガ飛上ルノデアラウカ。草ノ間ニ行ク所モ分カラナクナルカ、何地ニ行クノデアラウ。下の句觀者の境過を述べたるなりと言へる抄の說は非なり。

五十首歌奉りし時。

攝政太政大臣

螢飛ぶ野澤にしげる蘆の根のよな〳〵したにかよふ秋風。

螢ガ飛ビカフ野澤ニ茂ッタ蘆ニハ毎夜〳〵忍ンデ秋風ガ通ッテクルヨ。蘆とよ。と緣あり。根とし。だと緣あり。

刑部卿頼輔歌合し侍りけるに、納涼をよみ侍りける。

俊惠法師

○楸生ふるかた山かげに忍びつゝふきけるものを、秋の初風。

楸ノ生エテヰル片山ノ陰デハ、内所デ秋ノ初風ガ吹イテ居タノニ、今迄少シモ知ラズニ秋風ヲ待ッテ居タヨ。早ク此處ニ來レバヨカッタ。楸は支那にて立秋に用ゐる木なりといふ。即ち秋に關係あり。

曙麥露滋といふことを。

高倉院御製

白露の玉もて結へるませの中に光さへそふ床夏の花。

露ガ澤山オイタノデ、白露ノ玉ヲ拵ヘタヤウナ籬ノ中ニ、床夏ノ花ガ露ノ光迄モ添ヘテ咲イテキル。

夕顔をよめる。　　前太政大臣

白露の情おきけることの葉や、ほの〳〵見えし夕顔の花。

ホンヤリト見エタ夕顔ノ花ヨ。其花ニ就テ源氏ト夕顔トガ、ヤリ取リシタノハ情ノ籠ッタ歌デアッタヨ。此歌源氏物語夕顔の巻の心なり。

百首歌よみ侍りける中に。

たそがれの軒端の荻にともすればほに出てぬ秋ぞ下にことゝふ。

黄昏時ニナルト、軒端ノ荻ニドウカスルト、マダ表ニハアラハレナイ秋ガ内所デ尋ネテ來ルヨ。ドウカスルト、秋ラシイ風ガ軒端ノ荻ニ吹クヨ。

夏の歌よてよみ侍りける　　前大僧正慈圓

雲まよふ夕に秋をこめながら風もほにいでぬをぎの上かな。

雲ガ亂レ飛ブ夕方ノ空ニハ、秋ノ景色ヲ持ッテキナガラ、未穂ヲ出サナイ荻ノ上ニ秋風モ表ニアラハレテ吹カナイワイ。

太神宮に奉りし夏の歌の中に。　　太上天皇

山里の峯のあま雲とだえしてゆふべ涼しさの槇の下露。

山里ハ峰ニ懸ッテ居タ雨雲モ切レ目ガ見エテ、夕方涼シゲニ雨ノ名殘ノ槇ノ木ノ下露ガ落チルヨ。

文治六年女御入内屏風に。　　入道前關白太政大臣

岩井汲むあたりの小笹玉こえてかつ〳〵結ぶ秋の夕つゆ。

人ガ岩ノ間ノ清水ヲ汲ミ上ゲル邊ニ生エテキル笹ノ上ニ水ガ掛ッテ、段々ト秋ノ夕露ガ結ブヤウニナル。

千五百番歌合に。　　宮内卿

かた枝さすをふの浦梨初秋になりもならずも風ぞ身にしむ。

片枝生ヒ茂ッタ苧生ノ浦ノ梨ノ木ハ、實ガナッテ、初秋ニナッテモナラナクテモ、風ガ涼シクテ身ニ沁ミルヨ。四の句梨の實成ることにもかけていへり。をふの浦前に出づ。本歌、古今集「苧生の浦に片枝さしおほひなる梨のなりもならずも寢てかたらはむ」

百首歌奉りし時。　　前大僧正慈圓

夏ごろもかたへ涼しくなりぬなり。夜や更けぬらむ、ゆさあひの空。

夏衣ノ片々ガ涼シクナッタワイ。夏ト秋トガ行アフ今夜モ大ブン更ケタラシイ。夏ト秋トガ半分ッヾダカラ儘ガ半分涼シイノダラウ。本歌、古今集「夏と秋と行かふ空の通路はかたへすゞしく風や吹くらむ」

延喜御時月次の屏風に。

夏はつる扇と秋の白露といづれかさきにおかむとすらむ。

壬生忠岑

夏ガ終ツテ扇ヲ手カラ放スノト、秋ガ來テ白露ガ降ルノト、孰レガ先デアラウカ。おくは扇を放すと露の結ぶと兩方へ言ひかけたり。

○みそぎする河の瀬見ればから衣日もゆふ暮に波ぞ立ちける。

貫之

六月祓ヲスル河ノ瀬ヲ見ルト㊐日モ早夕方ニナツテ、風ガ吹イテ波ガ立ツテルヨ。から衣は紐結ぶとかゝるなり。

新古今和歌集卷第四

秋歌ノ上

題しらず。

かみなびの三室の山の葛かづら裏吹きかへす秋は來にけり。

中納言家持

神南備ノ三室ノ山ノ葛蔓ノ葉ガ風ニ吹カレテ翻ヘル秋ガ來タワイ。葛の葉は裏白くて翻へるが目立つ故にかくいへるなり。古例多し。

百首の歌にはつ秋の心を。

崇德院御歌

○いつしかと荻の葉むけの片よりにそゞや秋とぞ風もきこゆる。

藤原季通朝臣

何時ノ間ニカ西風ガ吹キ出シテ荻ノ葉ガ片方ニバカリキマツテ靡クヤウニナツテ、夏トハ丸デ風ノ音モカハツタノデ、アヽ秋ガ來タナト思ハレルヨ。

このねぬる夜の間に秋は來にけらし。あさけの風の昨日にも似ぬ。

昨夜晩殷タ内ニ秋ガ來タノデアラウ。今朝ハ夜明ケノ風ガ昨日トハ違ッテ大層涼シイ。

文治六年女御入内ノ屏風に。　後德大寺左大臣

○いつもきく麓の里と思へども昨日にかはる山おろしの風。

此私ノ住ンデヰル麓ノ里デ、何時デモ明ク風ノ音トハ思フケレドモ、今日聞ク山下シノ風ハ昨日ト變ッテヰル。

百首歌よみ侍りける中に。　藤原家隆朝臣

昨日だにとはむと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり。

○別ニ面白イノモナイ夏ノ中ノ昨日デモ、尋ネテ見ヨウト思ッテヰタ攝津國ノ生田ノ森ニ秋ガ來タワイ。尙更尋ネテ見ヨウ。本歌詞花集「君住まばとはましものを津の國の生田の森の秋の初風」

最勝四天王院ノ障子に高砂かきたるところ。　藤原秀能

吹く風の色こそ見えね。高砂の尾の上の松に秋は來にけり。

吹ク風ニ秋ノ色コソ見エナイケレモ、高砂ノ峯ノ上ノ松ニハ風ノ音ガ變ッテ秋ガ來タワイ。爭ハレヌモノダ。

百首歌奉りし時。　皇太后宮大夫俊成

伏見山松の陰より見渡せばあくる田の面に秋風ぞ吹く。

伏見山ノ松ノ木陰ヨリ見渡スト、今、夜ガ明ケタ田ノ面ニ秋風ガ吹イテヰルヨ。

守覺法親王五十首歌よませ侍りける時。　藤原家隆朝臣

あけぬるか。衣手寒し、菅原や伏見の里の秋の初風。

夜ガ明ケタノデアラウカ。菅原ノ伏見ノ里ニ腰テ居ルト秋ノ初風ガ肌寒ク吹イテヰル。ふしみの里にて伏しぬる義を含ませたり。伏見里は山城にあり。

千五百番歌合に　攝政太政大臣

ふか草の露のよすがを契にて里をばかれず秋は來にけり。

深草ノ里ノ草深イ所ノ露ノ涙デヰル少シバカリノ據所アル約束ヲ違ヘズニ、此里ヲ見ステナイデ今年モ秋ガ來タワイ。四の句ハ伊勢物語の、「今ぞ知る苦しきものと人またん里をばかれずとふべかりけり」よりとれり。

あはれ又如何にしのばむ袖の露野ばらの風に秋は來にけり。　右衞門督通具

嗚呼又ドウシテ袖ニ散ル涙ノ露ヲコラヘルコトガ出來ヨウソ。野原ヲ吹ク風ノ音モ物淋シク秋ガ來タワイ。

一の句の又は、輕き又なり。悲しき秋となれるが、如何にして又堪ふべきといふ程の意なり、元來悲しき身

なることを言へるなり。尾張の亦の説は不可なり。

敷砂の枕の上に過さぬなり、露をたづぬる秋の初風。

源　具親

露ノ在所ヲ尋ネテ吹ク秋ノ初風ガ、涙デ濡ツボイ私ノ枕ノ上ヲ吹イテ通ツタワイ。秋風ト露トハ縁ガ深イト見エテ、枕ノ上ノ涙ノ露モ見過サズニ尋ネテ來タヨ。幽齋説に「さてもわが枕の上をは過きて何處へ行くぞわが泪を知らぬかとよめり」とあるは誤れり。露けき故に枕の上を吹きたるなり。

水莖の岡の葛葉も色つきて今朝うらかなし、秋の初風。

顯昭法師

水莖ノ岡ノ葛ノ葉モ赤クスツカリ秋ラシクナツテ今朝ハ心悲シク秋ノ初風ガ吹ク。淋シイ景色ダ。うらかなしのうらは心の裏なれども一方には裏の義となりて葛の葉に絲あり。水莖の岡近江にあり。

秋はたゞ心よりおく夕露を袖のほかとも思ひけるかな。

越前

秋ハ自分ノ心デ悲ムカラシテ涙ガ夕露トナツテ袖ニ置クノデアルノニ、袖ノ外ノ草木ノ葉ニバカリ露ガ置クモノト思ツタワイ。四の句は後撰集の「我ならぬ草葉も物は思ひけり袖より外に置けるしらつゆ」より取れり。

五十首奉りし時秋の歌

藤原雅經

昨日までよそに忍びし下の末荻葉の露に秋風ぞ吹く。

昨日マデハ他所ニ聞エナイヤウニ隠レテ荻ノ下ニバカリ吹イテ居タ秋風ガ、今日ハ外カラ見エルヤウニ荻ノ末葉ノ露ヲ散ラシテ吹イテキルヨ。

太神宮へ奉りし秋の歌の中に

朝露のをかのかやはら山風に亂れて物は秋ぞ悲しき。

朝露ノ置イタ岡ノ萱原ガ山風ニ吹キ亂レルヲ見ルニツケテモ心亂レテ秋ハ物悲シイモノデアル。此歌他本になし。

題知らず。

おしなべて物を思はぬ人にだに心をつくる秋の初風。

西行法師

世間一同、誰レデモ彼レデモ物事ヲ考ヘナイ人ニデスラモ、淋シイ秋ノ初風ハ物思ヒヲサセルモノダ。

○あはれ如何に草葉の露のこぼるらむ、秋風立ちぬ宮城野の原

宮城野ノ原ニハ秋風ガ吹キ始メタ。嗚呼甚麼ニ草葉ノ露ガコボレルコトデアラカ。

崇德院に百首歌奉りける時

みしぶつき植ゑし山田に引板はへて又袖ぬらす秋は來にけり。

皇太后宮大夫俊成

夏ノ頃水澁ガ付イテ、袖ヲ濕シテ植エタ山田ニ、鳥ヲオドス爲ニ引板ヲ張ッテ田ノ番ヲシテ田ノ假蘆ニ居ッテ、悲シサニ袖ヲ濕ス秋ガ來タワイ。奠濃の註は少しく言ひ足らず。本歌萬葉集、「衣手に氷澁つくまで植ゑし田を引板我はへまもれる苦し、」

中納言中將に侍りける時、家に山家早秋といふ心をよませ侍りけるに。

法性寺入道前關白太政大臣

朝霧やたつたの山の里ならで秋來にけりと誰か知らまし。

朝霧ノ立ッテヰル立田山ノ里ノ人デナクテハ、秋ガ來タト云フコトヲ誰ガ知ラウゾ。山ノ方ハ早ク秋ラシクナルカラ山里ノ人ハ早ク秋ヲ知ルモノダ。

題知らず。

中務卿具平親王

夕ぐれは荻ふく風の音まさる。今はた如何に寢覺せられむ。

夕方ニナルト荻吹ク風ノ音ガヒドクナッテ來タ。嗚呼此風ノ音ノ爲ニ是カラ又甚麼ニ夜中ニ目ヲ覺スコトデアラウゾ。アヽツクヅク忌ナ風ダ。

夕されば荻の葉むけを吹く風にことぞともなく涙落ちけり。

後德大寺左大臣

夕方ニナルト、荻ノ葉ヲ一方ニバカリ靡カセテ吹ク風ニ、コレト云フ譯ハナイガ。涙ガ落チタワイ。何トナク秋風ハ淋シイモノダ。

崇德院に百首歌奉りし時。

皇太后宮大夫俊成

荻の葉も契ありてや秋風の音づれそむるつまとなるらむ。

人モ前世ノ因緣デ夫婦ニナルモノダカ、荻ノ葉モ前世ノ緣ガアルノデ秋風ガ通ヒ初メル寄リ所(夫妻)トナルノデアラウ。

題しらず。

七條院權大夫

○秋來ぬと松吹く風も知らせけり、かならず荻の上葉ならねど。

荻ノ上風ハ秋ヲ知ラセルモノダガ、強ヲ荻ノ上葉デハナイケレド、松吹ク風モ亦秋ガ來タト知ラセタワイ。

題をさくりてこれかれ歌よみたるに、信太の杜の秋風をよめる。

藤原經衡

日を經つゝ音こそまされ、和泉なる信太の森の千枝の秋風。

和泉ノ國ノ信太ノ森ノ千本モ枝ノアル大楠ヲ吹ク風ハ、日ガタツニ從テ音ガヒドクナッテ行クヨ。千枝とは楠の千枝なり、古今六帖に、「和泉なる信太の森の楠の千枝に分れて物をこそ思へ。」今猶信太杜に千枝の楠といふあり。

百首歌に

うたゝねの朝けの袖にかはるなり、ならす扇の秋の初風。　式子内親王

昨夜マデハ扇ヲツカツテ風ヲ取ツタガ、其扇ノ風ガ轉寢ノ夢カラサメテ見ルト、夜明ケノ袖ニ秋ノ初風トカハツテ吹イテキルワイ。秋ト云フコトハ爭ハレヌモノダ。

題しらず。

手もたゆくならす扇のおきどころ忘るばかりに秋風ぞ吹く。　相模

今迄手モ疲レル程ツカツテキタ扇ノ置キ場所ヲモ忘レル位ニ涼シク秋風ガ吹クヨ。

秋風は吹き結べども白露の亂れて置かぬ草の葉ぞなき。　大貳三位

秋風ガ吹イテ露ヲ結ブケレドモ、白露ガ亂レテ宿ツテキナイ草ノ葉ハ一ツモナイヨ。結ブノニ亂レルノハ變ナコトダ。結ぶと亂るとを對にして文をなしたるなり。

朝ぼらけ荻の上葉の露見ればやゝ肌寒し秋の初風。　曾禰好忠

夜明ケ方ニ荻ノ上葉ニ宿ツタ露ヲ見ルト、折カラ吹ク秋ノ初風ガ稍肌ニ寒イヤウナ心地ガスル。

吹きむすぶ風はむかしの秋ながらありしにも似ぬ袖の露かな。　小野小町

露ヲ吹キ結ブ風ハ昔ノ秋ノ通リデアルケレドモ、私ノ袖ノ上ノ露ハ昔ノ樣デハナイワイ。身ノ衰ヘタノヲ悲ンデ涙ノ露ニ澤山露ガ宿テキル。

延喜御時月次屏風に。

大空をわれもながめて彦星の妻まつ夜さへひとりかもねむ。　紀貫之

大空ヲ私モ亦眺メテ、彦星ガ妻ヲ待ツテ年ニ一度逢フト云フ今夜デサヘモ自分ハ一人デ寢ルノカナア。私ハ年ニ一度モ戀シイ人ニ逢フノガ出來ナイノダ。彦星ハ牽牛星即チ男星なり。

題しらず。

此夕降りくる雨は彦星のとわたる舟のかいの雫か。　山邊赤人

今夜ハ七夕ダノニ雨ガ降ツテ來タガ、今夜天カラ降ツテ來ル雨ハ彦星ガ織女ニ逢フ爲ニ天ノ川ノ狹イ所ヲ急イデ渡ル舟ノ櫂ノ雫デアラウカ。此歌萬葉十には「この夕降りくる雨は彦星の早やこく舟の櫂のしづくか」とあり。

宇治關白太政大臣家に七夕の心をよみ侍りける。　權大納言長家

年を經て住むべき宿の池水は星合の影も面なれやせむ。

行末長ク太政大臣殿ガ御住ミニナルベキ此家ノ池ノ水ハ年ニ一度ノ彦星ト機女トガ逢フ七夕ノ夜ノ星影モ度重ツテ見馴レルヿデアラウ。御目出度イヿダ。すむは住むに澄むをかけたり。

花山院御時七夕の歌つかうまつりけるに。　藏原長兼

袖ひぢて我手に掬ぶ水の面にあまつ星合の空を見るかな。

袖ヲ濡シテ私ノ手ニスクヒ上ゲル水ノ上ニ、天ノ男女二星ノ逢フ空ガ映ツテ見エルワイ。

七月七日七夕まつりする所にてよみける、　祭主輔親

雲間より星合の空を見わたせばしづ心無き天の川浪。

雲ノ絶間カラシテ牽牛織女ノ二ノ星ガ逢フ空ヲ見渡スト、定メテ星モ急イデ天ノ川ヲ渡ツテ居ルダラウト思ハレテ、天ノ川ノ浪モセワシナク騒イデ見エル。雲の騒ぐを浪に見立てたるなり。

七夕の歌とてよみ侍りける。　大宰大貳高遠

たなばたの天の羽衣打重ねぬる夜すがらしき秋風ぞ吹く。

織女ト彦星トガ、一緒ニ天ノ羽衣ヲ打重ネテ寝ル今夜ハ、涼シク秋風ガ吹クヨ。

小雜

たなばたの衣のつまを心して吹きなかへしそ、秋の初風、

牽牛織女二ノ星ノ衣ノ裾ハ氣ヲ付ケテ吹キ返ヘサナイヤウニシロ。秋ノ初風ヨ。返スト云フコトハ忌ムコトダカラ。つまは妻をもかけたり返すといふことを忌める歌なり。

たなばたのと渡る舟の梶の葉にいく秋かきつ、露の玉づさ。　皇太后宮大夫俊成

棚機ハ㊁彦星ニ送ル爲ニ梶ノ葉ニ、ハカナイ手紙ヲ幾年書イタノデアラウカ、一二の句序なれどもおのづから棚機の事を言へる趣はあるべし。かぢは櫂と梶にかけたるなり。梶の葉は楮の葉なり。即紙の事なり。

百首歌の中に　式子内親王

ながむれは衣手すゞし、久方の天の河原の秋の夕ぐれ。

㊁天ノ河原デ牽牛織女ノ二ノ星ガ逢フタ方ニ、空ヲ眺メルト別シテ今夜ハ何時モヨリモ涼シイヨ。

家に百首歌よみ侍りける時。　入道前關白太政大臣

いかばかり身にしみぬらむ、棚機のつを待つ宵の天の河風。

一タイ人ヲ待ツテヰル時ハ風ノ音モ身ニ沁ミルモノダガ、棚機ガ夫ノ彦星ノ來ルノヲ待ツテヰル宵ニ吹ク天ノ川ノ風ハ、待チカネタ其心ニハ甚麼ニ身ニシミテ感ジタデアラウ。

七夕の心を

星あひの夕涼しき天の河紅葉の橋をわたる秋風。

棚機ガ逢フ夕方ハ涼シクテ、天ノ河ノ紅葉デ出來タ橋ヲ秋風ガ吹キ渡ルヨ。何ト言ヘナイヨイ景色ダ。わたるは橋の縁なり。古今集の「天の川紅葉を橋にわたせばや棚機つめの秋をしもまつ」によりて天の川に紅葉の橋ありとせり。

一〇六　　權中納言公經

七夕の逢瀬絶えせぬあまの川如何なる秋かわたりそめけむ。

牽牛織女ノ夫婦ノ星ガ逢フコトガ絶エナイ此天ノ川ハ、一タイ何時ノ秋カラシテ渡リ初メタノデアラウ。星ト云モノハ大昔カラアルモノダカラ天ノ川ヲ渡ッテ逢フト云フコトノ起リモ餘程昔カラデアラウ。瀬は川に縁あり。

待賢門院堀川

わくらばに天の川浪よるながら明くる空にはまかせずもがな。

夫婦ノ星ガ稀ニ逢フ今夜デアルカラシテ、天ノ川ノ川浪ハ夜ノマヽニシテ置イテ縱令夜ガアケテモ明ケル空ト一緒ニ白マナイヤウニシタイモノダ。よるは波の寄るに夜を言ひかけたり。

女御・徽子女王

いとゞくし思ひけぬべし、棚機の別れの袖における白露。

棚機ガ別レル時ニ袖ニ置イタ涙ノ白露ニ、只サヘ別レノ悲シイ彦星ノ心ハ別シテヒドク消エルヤウデアラウ。露は消ゆるに縁あり。

大中臣能宣朝臣

たなばたは今や別るゝ天の川霧立ちて千鳥なくなり。

棚機彦星ハ今別レルノデアラウカ。天ノ川ニハ川霧ガ立チコメテ千鳥ガ鳴クワイ。何トナク悲シイ景色ダ。

紀貫之

堀川院御時百首歌の中に萩をよみ侍りける。

河水に鹿のしがらみかけてけり、浮きて流れぬ秋萩のはな。

鹿ガ萩ノ花ヲ踏ミツケタアトハ丁度籐ノ様ニナッテキルカラ、ヨク世間デ鹿ハ籐ヲカケルト云フガ。水ノ上ニ浮イテ流レナイ秋萩ノ花ハ、河ノ中ニ鹿ガ萩ノ花デ籐ヲ懸ケタヤウダワイ。上の句は古今の「秋萩をしがらみ伏せて鳴く鹿の目には見えずて音のさやけさ」よりとれり。

前中納言匡房

題しらず。

狩衣我とは摺らじ、露しげき野原の萩の花にまかせて。

野ヘ行クト萩ノ花デ自然ニ若物ガ染マルモノダガ私ハ狩衣ハ野原ノ萩ノ花ガ染メテクレルノニ任セテ置イ

一〇七　　従三位頼政

テ、自分デ摺ツテ染メルヤウナコトハスマイ。自然ニ萩ノ花デ染マルノガ風流ダカラ。

一〇八

秋萩を折らでは過ぎじ、月草の花すり衣露にぬるとも。

縦令月草ノ花ヲ摺ツテ染メタ此衣ガ露ニ濡レヨウトモ、秋萩ノ花ヲ折ラズニ通リ過ギルヤウナコトハスマイ。萩ノ花ガ奇麗ダカラ。着物ナドハドウデモヨイ。

權僧正永縁

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに、

顯昭法師

萩が花真袖にかけて高圓の尾の上の宮に傾巾振るや誰れ。

女ハ人ニ合圖ヲスル時ニ着物ニツケタ領巾ヲ振ルガ、今、アレ、アスコデ、萩ノ花ヲ袖ニ付ケテ高圓ノ山ノ上ニアル宮デ領巾ヲ振ツテ居ル少女ガアルガアレハ、誰デアルカ。誠ニヤサシイ姿ダ。高圓山は大和にあり。萩の名所なり。

題しらず。

祐子内親王家紀伊

置く露もしづ心なく秋風に亂れてさける眞野の萩原。

秋風ガ吹クノデ、置ク露モ心ガ落チツカズ亂レ散ツテ、眞野ノ萩原ノ花ハ露ノ亂レルヤウニ亂レテ咲イテキル。アヽヨイ景色ダ。眞野は大和にあり。

人麿

秋萩の咲き散る野邊の夕露にぬれつゝさませ、夜はふけぬとも。

若シ私ノコトヲ思フナラバ、縦令夜ハ更ケタニシテモ、秋萩ノ花ガ咲イテハ散ツテキル野ノ夕方ノ露ニ濡レナガラ、私ノ所ヘ御出デナサイ。

中納言家持

さを鹿の朝立つ小野の秋萩に玉と見るまで置ける白露。

朝行ツテ見ルト鹿ガ立ツテキル野ノ秋萩ノ花ニ、玉カト思ハレル程白露ガ置イテキルヨ。マコトニ良イ景色ダ。

凡河内躬恒

秋の野を分け行く露にうつりつゝわが衣手は花の香ぞする。

秋ノ野ヲ分ケテ行クト色々ノ花ノ露ニ染マッテ、吾ガ着物ハ花ノ香ガスルヨ。

小野小町

誰れをかもまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし。

待乳山ノ女郎花ハ誰ヲ待ツテ咲イテ居ルノデアラウカ。ドフモ秋ニハ逢ハウト約束シタ人ガアルラシイ。待乳山は紀伊にあり。

藤原元眞

女郎花野邊のふる里思ひ出てゝやどりし蟲の聲や戀しき。

女郎ヨ。モト生エテ居タ野邊ヲ思ヒ出シテ、其時分オマヘニ宿ツテ鳴イテ居タ虫ノ聲ガ戀シイカ。野カラ取ツテ來テ庭ニ植エタラ何ダカサムシサウニ見エルカ。

千五百番歌合に。

左近中將良平

夕されば玉散る野邊の女郎花枕定めぬ秋風ぞ吹く。

夕方ニナルト野邊ノ女郎花ハ露ノ玉ヲ散ラシテ彼方此方ト方向モ定メズ秋風ガ吹クヨ。此歌の裏には、夕方ニナルト女ハ魂モ消エルバカリデアル。男ガ倦キガ來デ諸所方々ニ女ヲ拵ラヘルカラ。の意を含めたり。

蘭をよめる。

公猷法師

ふちばかまぬしは誰ともしら露のこぼれて匂ふ野邊の秋風。

藤袴ノ花ハ持ヲ主ハ誰トモ分カラナイガ野ヲ吹ク秋風ニ白露ヲコボシテ咲イテ居ル。

崇德院に百首歌奉りける時。

藤原清輔朝臣

うす霧のまがきの花の朝しめり秋は夕と誰か言ひけむ。

薄霧ノカヽツタ籬ニ咲イテ居ル花ガ朝露ニスレタ景色ハ誠ニオモシロイ。秋ノ景色ハ夕暮ニカギルト誰カ言ツタコトデアラウカ。這麼ニ朝ノ景色ガオモシロイニ。

入道前關白太政大臣右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りけるに。

皇太后宮大夫俊成

いとかくや袖は萎れし、野邊に出てゝ昔も秋の花は見しかど。

野ニ出デ若イ時ニ秋ノ花ハ見タケレドモ、這麼ニヒドク涙ノ爲ニ袖ガ萎レタコトハナカツタ。私ハ老年ニナツタノデ涙脆クナツタワイ。

筑紫に侍りける時秋野を見てよみ侍りける。

大納言經信

花見にと人やりならぬ野邊に來て心のかぎりつくしつるかな。

花ヲ見ニ自分ノ心カラ野邊ニ出カケテ來タノニ何ダカ悲シクナツテ心ノ限リ歎イタワイ。五の句に筑紫の意をきかせたり。

題しらず。

曾禰好忠

おきて見むと思ひし程にかれにけり、露よりけなる朝顏の花。

朝顏ノ花ノ上ニ露ガ置イテ居ル樣子ヲ朝起キテ見ヨウト思ツテタ内ニ萎レテシマツタ。露ヨリモ一層脆イ朝顏ノ花デアル。

山かつの垣ほにさける朝顔はしのゝめならてあふよしもなし。

山里ノ樵夫ノ家ノ垣ニ咲イテキル朝顔ハ夜ノ明方デ無クテハ見ルコトガ出來ナイ。スグニ萎ンデシマカ。殊ニ山賤といへるは東雲ノ篠ノ間にかけたるなり。

坂上是則

うら枯るゝ淺茅が原の刈萱の亂れて物を思ふ頃かな。

㊀此頃ハイロ〳〵ト心モ亂レテ物ヲ思フヲイ。上の句序なり。末が枯れた淺茅が原の中の刈萱のやうにの意なり。

人麿

さを鹿の入野の薄はつを花いつしか妹が手枕にせむ。

男鹿ガハイツテ居ル野ノ薄ノ、初メテ咲ク尾花ハ見事ニ咲イタ。此景色ヲ何時妻ト一緒ニ睦シク見ルコトガ出來ルデアラウ。早クサウシタイモノダナ。手枕にするとは睦しく隔なき義なり。

讀人不知

小倉山麓の野邊の花すゝきほのかに見ゆる秋の夕ぐれ。

小倉山ノ麓ノ野邊ニ咲イタ花薄ガホンヤリト見エル秋ノ夕暮ヨ。面白イ景色ダワイ。ほのかのほは遠にかけたり。小倉山は、暗に通ずればほのかといふに呼應したり。

ほのかにも風は吹かなん、花すゝきむすぼゝれつゝ露にぬるとも。

縱令花薄ガ靡キ亂レテ其爲ニ自分ハ露ニ濡レテモヨイカラ、少シ風ガ吹ケバヨイカナア。風ニ靡イテ露ノ散ル景色ガサゾヨイダラウカラ。

女御徽子女王

百首歌に。

花すゝきまた露深し、穂に出てゝなかめじと思ふ秋のさかりを。

花薄ハ心ノ中ヲ穂ニ出シテシマツタカラ最早空ヲ眺メテ悲シムコトモアルマイト思ハレル秋ノ盛ノ時節ダノニ又露ヲ宿シテ悲ンデキル樣子ダ。怨ウシタノカ知ラヌ。一三四五二と次第して見るべし。本歌、拾遺集「忍ぶれは苦しかりけりしの薄秋の盛りになりやしなまし」幽齋の抄に、本歌として「今よりは植ゑてだに見じ花薄穂に出づる秋は侘しかりけり」を擧げ、花薄を穂に出て詠むれば悲しき故見まじと思へるに、露深く穂に出てたるを見ては眺めて心をなやますなりと解けるは誤なり。

式子内親王

攝政太政大臣家百首歌よませ侍りけるに。

野邊ごとに音づれわたる秋風をあだにも靡く花薄かな。

何處ノ野デモ音ヅレテ吹ク秋風デアルノニ、ソンナ浮氣ナ秋風ニスグ倦キラレルヽモ知ラナイデ無益ニモ花

八條院六條

薄ガ靡クヤイ。

和歌所の歌合に朝草花といふことを。　左衛門督通光

あけぬとて野邊より山に入る鹿のあと吹きおくる萩の下風。

夜ガ明ケタト、野カラ山ノ中ヘ入ッテ行ク鹿ノアトヲ、花ガ美シク咲イテヰル萩ノ下風ガ吹キ送ルヨ。

題しらず。　前大僧正慈圓

身にとまる思ひを萩のうは葉にて此頃かなし、秋の夕ぐれ。

始メ萩ノ上葉ノ風ノ音ニ秋ガ悲シイト思ッタノガ身ニシミ込ンダノデ、ソレカラト云フモノハ萩ノ上風ヲ聞カナイデモ此頃秋ノ夕方ハ悲シイ感ジガスル。

崇德院の御時百首歌めしけるに萩を。　大藏卿行宗

身のほどを思ひつゞくる夕ぐれの萩の上葉に風わたるなり。

私ノ身ノ上ヲ思ヒ續ケテ悲ンデヰル夕暮ニ、萩ノ上葉ニ風ガ吹キ渡ルヤイ。悲サガ一層深クナッテクルヨ。

秋歌よみ侍りけるに。　源重之女

秋はたゞ物をこそ思へ、露かゝる萩の上吹く風につけても。

露ノカヽッテ居ル萩ノ葉ノ上デ吹ク風ノ音ヲ聞クニツケテモ、秋ハ只悲シサニ物思ヒニ沈ムモノデアルヨ。世上自他の樣ゝ思ひつゞくる心にやといへる八代集抄說は附會なり。

堀川院に百首歌奉りける時。　藤原基俊

秋風のやゝ膚寒く吹くなべに萩の上葉の音ぞかなしき。

秋ガソロ〳〵ト深クナッテ秋風ガ稍膚寒ク吹クニツレテ、萩ノ上葉ヲ吹ク風ノ音ガ悲シク身ニ泌ミルヨ。

百首歌奉りし時。　攝政太政大臣

萩の葉に吹けば嵐の秋なるをまちける夜半のさ男鹿の聲。

萩ノ葉ニ吹ケバ秋ノ嵐ハ悲シイモノデアルノニ、ソノ上ニソレヲ待チ受ケテ鳴ク夜ノ男鹿ノ聲ガスルヨ。サテモ悲シイ「カナ。八代集抄、美濃「嵐は萩の葉に吹けはかなしき物を又其嵐のつてに鹿の音を待けることよ」とやうに說きたれど、多くの文字を補はればかく聞えぬが如し。暫く尾張に從ふ。

おしなべて思ひしことのかず〳〵に尙色まさる秋の夕ぐれ。

常ハ多クノ悲シミモ引ノルメテ一ツニシテ悲ンデ居ッタガ、一ッ〳〵ニ別レテ其上ニ又其悲シガ甚シクナッテ行ク秋ノ夕暮ヨ。嗚呼サテモ悲シイ「カナ。

題しらず。

暮かゝる空しき空の秋を見て覺えずたまる袖の露かな。

暮レカヽツテ草木ノ色モ見エナイ空ノ秋景色ヲ見テ、何トナク悲シクナツテ知ラズ〳〵ニ袖ノ上ニ涙ノ露ガタマルワイ。八代集抄にむなしき空を虛空と解せるは誤まり。木草のなき空といへる尾張に從ふべし。

家に百首歌合し侍りけるに。

○物おもはてかゝる露やは袖に置く。ながめてけりな、秋の夕ぐれ。

物ヲ思ハナイデ此樣ナ紅イ露ガ袖ノ上ニ宿ルモノデアラウカ。決シテ那麼筈ハナイ。必ズ紅涙ヲ流シタニ違ヒナイ。シテ見ルト自分ハ秋ノ夕暮ノ景色ヲ悲シミナガラ眺メタワイナア。

前大僧正慈圓

をのこども詩をつくりて歌に合せ侍りしに山路秋行といふことを。

深山路やいつより秋の色ならむ、みざゝし雲の夕ぐれの空。

深山ノ路ハ何時カラ這麼秋ノ色ニナツタノデアラウカ。木々ガ紅葉シタノデ夕暮ノ景色ハ今迄見ナカツタ赤イ雲ガ棚引イテ面白イ景色デアルヨ。

題しらず。

寂蓮法師

○淋しさは其色としも無かりけり。槇立つ山の秋の夕ぐれ。

槇ノ木ガ一面ニ生エテキル山ノ秋ノ夕暮ハ何トナク淋シイガ只、青々トシテ、ドノ木ガ秋ノ色ナシデ居ルカラ淋シイト云フコモ無イワイ。

○心無き身にもあはれは知られけり。鴫立つ澤の秋の夕暮。

鴫ノ飛ビ立ツ澤邊ノ秋ノ夕方ノ景色ハ、何ノ情モナイ自分ノヤウナモノニモ身ニシミテ哀レヲ感ジタワイ。鴫立澤を地名とする俗說はわろし。若しかくせば此歌の興味索然たらむ。

西行法師

○見わたせば花も紅葉もなかりけり。浦の苫屋の秋の夕ぐれ。

遙ニ遠ク濱邊ヲ見渡スト花モ無ク紅葉モ無カツタワイ。海邊ノ苫葺キ小家ガ立ツテキル秋ノ夕暮ノ景色ハ誠ニ淋シイ。此歌古來二說あり。一は見渡せば浦の苫屋の秋の夕くれは花も無く紅葉も無いが大層おもしろいと說くものにて、八代集抄に師說として出てたり。美濃も亦これに則れり。一は花も紅葉も及ばぬほどの好景なりと解するものにして、同じく八代集抄に一說としてあげ、尾張のはこれを取れり。二說孰れを可とも言ひがたし。飜つて思ふに、秋の夕をおもしろしと說くは此時代の思想なりや否や。現に前の二歌共に淋しみを歌へるにあらずや。然らばこれ亦淋しき方に見るべきにあらざるなきか。即前人の說を悉く退けて前述の解をなせり。敢て識者の高敎をまつ。

藤原定家朝臣

五十首歌奉りし時。

藤原雅經朝臣

たへてやは思ひありともいかじせん、葎の宿の秋の夕ぐれ。

思フ人ト住ムナラバ葎ノ宿デモヨイト云フ考ガ縱令有ツタニシタ所デ此淋シイ秋ノ夕暮ニ荒レ果テタ葎ノ宿ニ住ンデヰルヿガ出來ヨウカ。トテモ我慢シキレルモノデナイ。本歌、伊勢物語、「思ひあらば葎の宿にれもしなんひじきものには袖をしつゝも、」

宮内卿

秋の歌とてよみ侍りける。

思ふことさしてそれとはなき物を秋の夕を心にぞとふ。

思フヿガ別段ソレト言ウテ無イノニ、秋ノ夕暮ガ道慶ニ悲シイノハ怎ウユウ譯デアルカト心ニ問ウテ見ル。

鴨長明

秋風のいたりいたらぬ袖はあらじ。たゞ我からの露の夕ぐれ。

秋風ハ誰ノ袖ニモ同ジヤウニ吹クモノデ、吹イタリ吹カナカツタリスルヿハナイノニ、私ノ袖バカリ道慶ニ涙ノ露ニ濕レルノハ皆私ノ心デ秋ノ夕暮ヲ悲シク思フカラデアル。此歌の上の句、古來集の「春の色のいたりいたらぬ里はあらじさけるさかざる花の見ゆらん」の調に摸したり。

西行法師

おぼつかな、秋はいかなる故のあればすゞろに物の悲しかるらむ。

怎ウモ不思議ダ、秋ハ怎ウユウ譯カアルカラ何トナク萬事悲シイデアラウカ。

式子内親王

それながら昔にもあらぬ秋風にいとゞながめをしづのをたまき。

秋風ハ昔ノ秋風デアルガ、自分ガ昔ト違ツタノデ、何ダカ昔ノ秋風ノヤウナ氣ガシナイデ、愈物思ヒニ沈ンデ空ヲ眺メルヨ。「結句昔を今になすよしもがなの意を含めたり」と奥濃にいへるを、「しづのをたまきは上の句の昔に相應して一首をしたつる器財なり。別に襲ある事にあらず。」と尾張に駁したるは當を得たり。

藤原長能

題しらず。

日ぐらしのなく夕くれぞ憂かりける、いつも聽せぬ思ひなれども。

何時デモ常ニ私ノ悲ミハ絶エナイノデアルガ、殊ニ蜩ノ鳴ク秋ノ夕暮ハ悲シカツタワイ。

和泉式部

秋くれば常盤の山の松風もうつるばかりに身にぞしみける。

何時モカハラヌ常盤山ノ松風ノ音モ、秋ニナルト變ツタノデハナイカト思ハレルヤウニ身ニ沁ミルヨ。常盤山山城にあり。

曾禰好忠

秋風のよもに吹さくる音羽山なにの草木かのどけかるべき。

秋風が四方ニ吹キ來ル音ノスル音羽山ハ此秋風ノ爲ニ甚麼ナ草木ガ心靜ニシテヰル「ガ出來ヨウゾ。草木ハ皆萎レテ終フヨ。音羽山音にかけたり。山城にあり。

相模

曉の露も涙も止まらでうらむる風の聲ぞ殘れる。

戀シイ男ト逢ッテ分レタ明ケ方ニハ、露モ頻ニ散リ亂レ、悲シサニ涙モ亦頻ニ落チテ、恨メシサウナ風ノ音ガ聞エテヰルヨ。此歌の解異說あるべしと雖、明詠に、「風從二昨夜一聲猶怨、露及二明朝一淚不禁」とあるに、かれるものなるべければ、かく解くを以て正當と信ず。

法性寺入道前關白太政大臣家の歌合に野風。

藤原基俊

高圓の野路の篠原末さわぎそよや木がらし今日吹きぬなり。

高圓ノ野ノ中ノ路ノアタリノ篠原ガ其末葉ヲナラシテ亂レテヰル。呼戲木枯ノ風ガ今日吹イテルワイ。

千五百番歌合に。

左衛門督通具

深草の里の月かげ淋しさもすみこしまゝの野邊の秋風。

深草ノ里ノ月影ノ淋シイコモ、亦野邊吹ク秋風ノ音モ、昔自分ガ住ンデヰタ時ト同ジコトデアル。

五十首歌奉りし時杜間月といふことを。

皇太后宮大夫俊成

大あらきの森の木の間をもりかねて人たのめなる秋の夜の月。

大アラキノ森ノ間ヲ洩ルコトガ出來ナイデ、人ニハ唯賴モシク思ハセタバカリノ秋ノ夜ノ月ヨ。大荒木トフカラ木ノ間ガ疎クテ月ガ洩ルダラウト賴モシク思ッタノニ。

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに。

藤原家隆朝臣

有明の月待つ宿の袖の上に人だのめなるよひの稻妻。

有明ノ月ノ出ルノヲ待ッテヰル袖ノ上ニ、宵ノ稻妻ガ時々閃イテ、月デハナイカト人ニ賴モシク思ハセル。

攝政太政大臣家百首歌合に。

藤原有家朝臣

風わたるあさちが末の露にだにやどりもはてぬ宵の稻妻。

風ガ吹キ渡ル淺茅ノ葉末ノ露ハ極メテハカナイモノデ結ブトスグニ散ルモノダガ其露ノ散ル迄ノ短イ間モ宵ノ稻妻ハ其上ニ宿ッテ居ラズニチラト映ッタバカリデスグニ消エルモノダ。實ニハカナイモノダ。

水無瀨にて十首歌奉りし時。

左衛門督通光

むさし野や行けども秋のはてぞなき。いかなる風の末に吹くらむ。

武藏野ハイクラ行ッテモ〳〵淋シイ秋ノ景色ノ限リモナイカ、此儘デ進ンデ行ッタナラ、甚麼悲シイ風ガ野

ノ末ニハ吹イテ居ルデアラウ。

百首歌奉りし時月の歌の中に。　前大僧正慈円

いつまでか涙曇らで月は見し。秋まちえても秋ぞ戀しき。

一タイ自分ハ何時頃迄涙ニ曇ラサズニ月ヲ見タデアラウ。此頃デハ晴レ渡ツタ月ヲ見テモ涙ノ爲ニ曇ツテ見エルカラ、折角秋ヲ待ツテ秋ガ來テモ、澄ンダ月ヲ見ル「ガ出來ナイカラ、矢張月ノ澄ンダ秋ガ戀シイヨ。

ながめわびぬ。秋よりほかの宿もがな。野にも山にも月やすむらむ。　式子内親王

秋ノ景色ノ哀レナノニ外ヲ眺メテ悲シサニ堪ヘナイヨ。嗚呼此悲シイ秋ノ外ノ家ガアレバヨイガナア。例シ世ヲ遁レテ野山ニ隱レタ所デ野ニモ山ニモ同ジヤウニ悲シク月ガ澄ンデ居ルダラウ。仕方ガナイナア。

題しらず。　圓融院御歌

月影のはつ秋風と吹き行けば心づくしに物をこそ思へ。

月影モ初秋ノ月影トナリ、風モ初秋ノ風トナツテ悲シク吹イテ行クト、悲シサニ心ノカギリ物ヲ思ヒ悲シムヨ。

あしびきの山のあなたに住む人は待たでや秋の月を見るらむ。　三條院御歌

❶山ノ彼方ニ住ンデ居ル人ハ秋ノ月ノ出ルノヲ待タズニ見ル「デアラウ。月ハ山カラ出ルカラ、山ノアチラハ早ク出ルダラウカラ。

雲間ノ微月といふことを。　堀川院御歌

敷島や高圓山の雲間より光さしそふ弓張の月。

磯城島ノ高圓山ノ雲ノ間カラシテ、イツモリモ光カ一層マシテ皎々タル弓張ノ月ガ照ラスヨ。高田は的に通ず。弓張月の縁なり。

題しらず。　堀川右大臣

人よりも心のかぎりながめつる月は誰ともわかじものゆゑ。

月ハ人ノ「ヲ誰彼ト見分ケテ、人ニヨツテ感ジヲ違ヘルト云フ」ハ出來ナイモノデアルガ自分ハ他ノ人ヨリモ心ノ限リヲ詠メテハ悲シダヨ。此歌のものゆゑ在來の説ものだからの義として解釋に苦しみたり。これはものながらの義ものからと同じ。古今集にも「秋ならで逢ふこと難き女郎花天の河原に生ひぬものゆゑ」とあるにあらずや。

あやなくも曇らぬ宵をいとふかな、しのぶの里の秋の夜の月。　橘爲仲朝臣

人ハ月ノヨイ晩ヲ誰デモ好ノムニ、私ハ不道理ニモ月影ノ蚤ラナイ宵ヲ厭フワイ。浮世ヲ忍ンデ住ム里ニ秋ノ夜ノ月ノアマリ皎々トシテ非ルノハ忍ブ甲斐ナイ心地ガセラレルカラ。

法性寺入道前關白太政大臣

風吹けば玉散る萩の下露にはかなくやどる野邊の月かな。

風ガ吹クト玉ノヤウニ散ル萩ノ下露ニ甲斐ナクモ野邊ノ月ガ宿ルワイ。直グニ散ツテ終フ露ニ月ガ宿ルトハハカナイコダ。

従三位頼政

今宵誰れすゞ吹く風を身にしめて吉野の嶽に月を見るらむ。

遁世シテ山籠リヲシテ今夜ハ誰ガ篠ヲ吹ク風ノ音ヲ身ニシミテ感ジナカラ、吉野ノ山デ月ヲ見ルデアラウカ。

法性寺入道前關白太政大臣家に月の歌あまたよみ侍りけるに。

大宰大貳重家

月見れば思ひぞあへぬ。山高みいづれの年の雪にかあるらむ。

月ヲ見ルト丁度雪ノヤウニ見エタドウモ心ガ迷ツテ月ノ光トハ思ハレナイガアレハ山ガ高イノデ何時ノ年降ツタ位デ消エズニヰル雪デアラウ。

和歌所の歌合に湖邊月こといふとを。

藤原家隆朝臣

鴉の海や月の光のうつろへば浪の花にも秋は見えけり。

八千草ノ花ガ咲クノデ秋ニナツタト云フコトハワカルモノダガ、涙ノ上ハイツモ同シヤウデ秋ノ景色ト云フモノハ別ニ見エナイト世間デ云フガ鴉ノ海デ月ノ光ガ水ニウツルト波ノ白イノニ月光ガ映ツテ花ノヤウニ見エルガ、其ノ涙ノ花ニモ矢張草木ト同ジヤウニ秋ノ景色ガ見エルワイ。此歌古今の「草も木も色は變れとわだつみの波の花にぞ秋なかりける」といふを本歌として其裏をいへるなり。

百首歌奉りし時、秋の歌の中に。

前大僧正慈圓

更け行かば烟もあらじ。鹽竈のうらみなはてそ、秋の夜の月。

夜ガ更ケテ行ツタナラバ鹽竈ノ浦人モ寢テ終ツテ鹽燒ク烟ハ無クナルデアラウカラ、今烟ニ秋ノ夜ノ月ガ蚤ツテ見エルカラトテ何時マデモ恨ンデバカリ居ルナ。モウ少シ我慢シテ居レ。

皇太后宮大夫俊成女

ことわりの秋にはあへぬ涙かな、月の桂もかはる光に。

月ノ中ニアル桂モ紅葉シテ月ノ光ガヤハリ照リマサルノデ、道理デ秋ノ悲シサニ堪ヘラレナイデ、私ノ涙モ常トハ變ツテ澤山落チルワイ。尾張の二三句の説明いとこちたし。此歌古今集の「千早ふる神のいかきには ふ蔦の秋にはあへず紅葉しにけり」、仝「久かたの月の桂も秋は猶もみぢすればやてりまさるらん」の二首を本歌としたり。

ながめつゝ思ふもさびし、ひさかたの月の都のあけかたの空。

藤原家隆朝臣

㊂月ノ都月宮殿ノ夜明ケノ空ハサゾカシ淋シカラウト思ハレルヨ自分ガアケ方ニ外ヲ眺メテ思ヒナルニ付ケテモ、淋シク想像セラレル。

五十首歌奉りし時、月前草花

ふるさとのもとあらの小萩さきしよりよな〳〵庭の月ぞうつろふ。

摂政太政大臣

人ガ住マナクナツタ故里ニアル本ノ方ノマバラナ小萩ノ花ガ咲イテカラ、毎晩毎晩庭ノ月ノ影カ其萩ノ露ニ映ル。淋シイ景色ダ。本歌古今集「宮城野の本あらの小萩露を重み、風をまつごと君をこそまて」

建仁元年三月歌合に山家秋月といふことをよみ侍りし。

時しもあれ、古郷人はおとともせで深山の月に秋風ぞ吹く。

淋シサニ古郷人デモ來サウナモノト思ツテ居ルケレドモ、古郷人ハ一向訪ネテモ來ズ。只サヘ淋シイ折モ折、深山ノ月ノ明ラカナノニ秋風カ吹キ渡ルヨ。嗚呼淋シイ「ダ。美濃の説ハ駁したる尾張は例の盲蛇尻をとり。たるなり。歸するところ相同じ。

八月十五夜和歌所歌合に深山月といふことを

深からぬ外山の庵の寢覺だにさぞな木のまの月はさびしき。

寂蓮法師

深クナイ里ニ近イ山ノ庵ノ寢覺デスラモ此ヤウニ淋シイカラ、サゾカシ深山ノ木ノ間ノ月ハ淋シイ「デアラウ。さぞなを斯の如くと説きたる美濃は考へすごしたるなり。題の上よりも亦調子の上より思ふも決してかく解すべからざるなり。

月前松風。

月は猶もらぬ木の間も住吉の松をつくして秋風ぞ吹く。

鴨長明

月ノ光ハマダ洩ラナイ繁ツタ住吉ノ松ノ木ノ間マデモ、其松ヲ殘ラズ秋風ガ吹キ渡ルヨ。月ノ光ハサヽナイヤウナ所ヘモ風ハ通フモノダ。

なかむれば千々に物思ふ月に又わが身ひとつのみねの松風。

藤原秀能

月ヲ眺メルト色々物思ハレルノニ其上ニ又山中ニ住ンデ、私カ唯一人デ峯ノ松風カ音ヲ立テヽ吹クノヲ聞クヨ。アヽ淋シイ。古今集の「月見れば千々に物こそ悲しけれ吾が身一つの秋にはあらねど」の調をとれり。

山月といふことをよみ侍りける

足引の山路の苔の露の上にねざめ夜ふかき月を見るかな。

㊀山道ニ生エテヰル苔ニ宿ツタ露ノ上ニ、旅寢ヲシテ、オチツイテ眠ラレナイノデ、夜中ニ目ヲ覺シテ、夜

深ケノ月ヲ見タワイ。

八月十五夜和歌所の歌合に海邊秋月といふことを。

宮内卿

心あるをじまの蜑のたもとかな、月やどれとは濡れぬものから。

月影カ宿ル爲ニトテ濡レタ譯デハナイガ、浪ニ濡レタ袖ノ上ニ月カ宿ッテ雄島ノ蜑ノ秋ハ丁度何カ心カアルヤウニ思ハレルワイ。

宜秋門院丹後

忘れじな、難波の秋のよはの空ことうらにすむ月は見るとも。

今カラ後デ、他ノ海邊ニ澄ム月ヲ見ルコトガアラウトモ、私ハ決シテ難波ノ浦ノ秋ノ夜ノ月影ハ忘レハシナイヨ。ホントニ良イ月夜デ一生忘レラレサウニモナイ。

鴨長明

松島やしほくむあまの秋の袖。月は物思ふならひのみかは。

秋ノ夜ニ松島ノ海人ノ汐汲ム蜑ノ袖ニ月ガ宿ッテキル。シテ見ルト月ハ物ヲ思ッテ涙ヲ流ス人ノ袖ニバカリ宿ルモノデハナカッタヨ。私ハ今迄月ハ袖ノ涙ニバカリ宿ルモノト思ッテ居タガ。

七條院大納言

言とはむ、野島が崎のあま衣波と月とにいかゞしほるゝ。

私ハ都デ月ヲ見テ袖ヲ濡シテキルガ、野島ガ崎ノ海人ノ着物ハ波ノ爲ヤ又月ノ爲ニドンナニ萎レルカ問イテ見ヨウ。私ノハ月バカリデサヘコンナニ濡レルカラ波マデカヽッタラ、サゾ濡レルコトダラウ。野島カ崎淡路にあり。

藤原家隆朝臣

秋の夜の月やをしまの天の原明け方近き沖のつり舟。

空ガ明ケ方近イ頃ニ沖ノ釣舟ガ出タノハ、秋ノ夜ノ月ヲ雄島ノ蜑カ惜ムノデモットヨク見ル爲デアラウ。二の句雄島は惜しに、三の句天の原は蜑にかけたり。

前大僧正慈圓

題しらず。

うき身にはながむるかひもなかりけり、心に曇る秋の夜の月。

私ノヤウナ悲シイ身ノ上デハ秋ノ夜モ心ノ晴レナイ爲ニ曇ッテ見エテ眺メル甲斐モ無カッタワイ。

大江千里

いづくにか今宵の月の曇るべき。小倉の山も名をやかふらむ。

此明ラカナ今夜ノ月ハ何處デモ盛ル所ハアルマイ。小倉山ハ暗イ山ト云フ名デアルガ、小倉山ニモ月ガ明ラカニ照スデアラウカラ、是カラ名ヲ更ヘナケレバナルマイ。

心こそあくがれにけれ、秋の夜の夜深き月をひとり見しより。

源道濟

秋ノ夜ノ夜中ノ月ヲ一人デ見テカラアンマリヨイ景色ナノデ心ガ浮立ツ氣ガソワ〳〵シテナラナイワイ。

かはらじな、知るも知らぬも秋の夜の月まつほどの心ばかりは。

上東門院小少將

人ノ心ハ樣々デアルケレドモ知ツタ人デモ知ラナイ人デモ誰デモ昔、秋ノ夜ノ月ヲ俟ツ時ノ心丈ハ異ハナイモノダ。ホントニ月ハ早ク見タイモノダ。

たのめたる人は無けれど秋の夜は月見て寢べき心地こそせぬ。

和泉式部

別ニ來ルト當ニシタ人ハ無イケレドモ、秋ノ夜ハ月ヲ眺メテ而白イノデ寢ル氣ニナラナイヨ。

月を見てつかはしける。

藤原範永朝臣

見る人の袖をぞしぼる秋の夜は月に如何なる影かそふらむ。

月ヲ見ル人ノ袖ガ涙ニ濡レテ絞ラレルヨ。秋ノ夜ハ月ニ甚麼影ガ加ハルノデアンナニ皆ガ悲シイト思フデアラウ。

返し。

さがみ

身に添へる影とこそ見れ、秋の月袖にうつらぬ折し無ければ。

秋ノ月ヲ見ルト悲シサニ涙ガ出テ袖ニハ月ガウツラナイ時ガナイカラシテ、秋ノ月ハ私ノ身ニ離レズニ始終添ウテキル形ト思ハレマスルヨ。

永承四年内裏歌合に。

大納言經信

月影の澄み渡るかな、天の原雲吹き拂ふ夜半のあらしに。

夜中ニ吹ク嵐ガ大空ノ雲ヲ吹キ拂フノデ月ノ影ガ澄ミワタルワイ。

題知らず。

左衛門督通光

龍田山夜半にあらしの松吹けば雲にはうとき峰の月かげ。

龍田山デ夜中ニ嵐ガ松ヲ吹クト雲ガ拂ハレテ、峰ノ上ニ照ル月影ハ雲ニハ疎クナツテ松ニ親シクナル。美濃に三の句を先吹けばと說きしは誤なり。其他此歌についての說明例に似ず拙し。

崇德院に百首歌奉りけるに。

左京大夫顯輔

秋風にたなびく雲のたえまより洩れ出づる月の影のさやけさ。

秋風ニ吹カレテ空ニ靡イタ雲ノ切レ目カラシテ洩レテ出ル月ノ光ノ明ラカナ事ヨ。

道因法

題知らず。

山の端に雲のよこぎる宵の間に出でゝも月ぞ猶またれける。

山ノ上ニ雲ガカヽツテ居ル宵ノ間ハ、月ガ出テモ見ルヿガ出來ナイカラヤハリ月ガ待タレルヨ。

般富門院大輔

ながめつゝ思ふに濡るゝ袂かな。幾よかは見む、秋の夜の月。

空ヲ眺メテ自分ガ年老イタヿヲ思ヘバ悲サニ袂ガ濡レルワイ。嗚呼秋ノ夜ノ月モ是カラ先幾年見ルヿカ出來ルデアラウカ。心細イヿダ。

式子内親王

宵のまにさてもねぬべきものならば山の端近きものは思はじ。

宵ノ内ニ月ヲ見捨テヽ寢ルヿカ出來ルモノナラバ、山ノ端近クニナツテ將ニ隱レヨウトシテヰルノヲ此樣ニ歎ク思ハアルマイモノヲ。何時迄モ起キテ居タノデ道理悲シイ思ヲスル。

更くるまでながめればこそ悲しけれ。思ひもいれじ、秋の夜の月。

此ノ夜ノ月ヲ夜カ更ケル迄眺メテ居レバコソ悲シイノデアル。ダカラシテ私ハモウ是カラ深ク心ヲ入ズニ一寸宵ノ間丈見ルヿニシヨウ。

五十首歌奉りし時。

雲は皆はらひはてたる秋風を松に殘して月を見るかな。

雲ハ皆秋風ニ拂ヒ盡ヂレテ月ハ明ラカニナリ其秋風ハ松ニ殘ツテ松風ノ音ガ面白イ時ニ月ヲ見ルワイ、松に殘しての解美濃悪し。

攝政太政大臣

家に月五十首歌よませ侍りける時。

月だにもなぐさめがたき秋のよの心もしらぬ松の風かな。

月影デスラモ淋シクテ私ノ心ヲ慰メルヿガ出來ナイノニ、秋ノ夜ニ私ノ心モ知ラズニ尚一層悲シゲニ松風ガ吹クワイ。ア、困ツタヿダ。

藤原定家朝臣

さむしろや待つ夜の秋の風更けて月をかたしく宇治の橋姫。

人ヲ待ツ夜ノ秋ノ風ガ更ケテ、誰モ來ナイデ狹筵ニ宇治ノ橋姫ハ月ノ光ヲ片方ニ敷イテ丸寢ヲスルヿデアラウカ。一の句やはにやの意なり。宇治の橋姫は宇治橋のほとりに出てたる遊女なり。本歌、古今集「さむしろに衣かたしき今宵もか我をまつらん宇治の橋姫」

題知らず。

秋の夜のながきかひこそなかりけれ。まつに更けぬる有明の月。

秋ノ夜ノ長イ甲斐モ無カツタヨ。有明ノ月ヲ待ツテキルウチニ夜ガ更ケタ。月ハ出テモ見ル間ガ短カクテ駄目ダ。

右大將忠經

一三四

五十首歌奉りけるに野徑月。

行く末は空もひとつの武藏野に草の原より出づる月かげ。

見渡ス末ハ空モ草モ一緒ニナツテ見エル廣イ武藏野ニ草原カラシテ月ガ出テ來ルヨ。アヽ心細イ。

攝政太政大臣

雨後月。

月をなほまつらむものか、村雨のはれ行く雲の末の里人。

村雨ガ此方カラ彼方ヘ次第ニ晴レテ行クソノ行ク先ノ里人ハ、月ノ雲ヲ出ルノヲマダ待ツテキルデアラウ。此方ハモウ月ガ能ク見エルカ。

宮內卿

題しらず。

秋の夜は宿かる月も露ながら袖にふきこす荻の上風。

秋ノ夜ハ荻ノ上風ガ吹クノデ荻ノ葉ノ露ニ宿ツテキル月マデガ露ト一緒ニナツテ、私ノ袖ヲ越シテユクヨ。

右衞門督通具

秋の月しのに宿かる影たけてをさゝが原に露ふけにけり。

秋ノ月ガ篠ノ上ニ一ペイニ宿ヲ借リテ宿ンデキル影ガ闌ケテ、小笹ガ原ニ露ガ深ク置イタワイ。しのには篠と茂くとの兩義なり。

源家長

此歌は、月を見て袖に涙の宿るを、荻の上の露の風のまに〳〵飛び來れるやうに言へるなり。

元久元年八月十五夜和歌所にて田家見月といふことを。

風渡る山田の庵をもる月やほなみにむすぶ氷なるらむ。

風ガ吹キ渡ツテ寒イ庵ノ隙間ヲ洩レテ照ス此月ハ、田ノ中ニ波ノヤウニ靡イテキル稻ノ穗ゴトニ氷ノヤウニ光ツテキルコトデアラウ。

前太政大臣

和歌所歌合に田家ノ月を。

雁の來る伏見の小田に夢さめてねぬ夜の庵に月を見るかな。

伏見ノ小田ニ寢テ雁ノ來テ鳴ク聲ニ目ヲサマシテ、後ハ眠ルヿモ出來ナイデ庵ノ中ニ月ヲ見テキタワイ。

前大僧正慈圓

皇太后宮大夫俊成女

一三五

稲葉ふく風にまかせてすむ庵は月ぞまことにもりあかしける。

稲葉ヲ吹ク風ニ任カセテ用心モセズニ住ンデキル庵、ハ人ハ眠ッテ居ルガ月ガ夜徹シ隙間カラ洩レテ來テ本當ニ番ヲシテキルヨ。もりはかけ詞なり。

題しらず。

あくがれてねぬ夜の塵のつもるまで月に拂はぬ床のさむしろ。

月ニ浮レテ寢ナイ夜ガ續イテ、塵ガ積ルマデモ月ノ爲ニ床ノ莚ヲ拂除シナイ。

大中臣定雅

秋の田のかりねの床のいなむしろ月やどれともしげる露かな。

秋ノ田ノ庵ニ假寢ヲシテキル床ノ莚席ノ上ニ月ガ宿レトカ此樣ニヒドク露ガ置イタワイ。

崇德院御時百首歌めしけるに。

左京大夫顯輔

秋の山のいほさす賤の苫をあらみ月としもにやもりあかすらむ。

秋ノ田ニ庵ヲ作ッテ住ンデ居ル農夫ハ屋根ニ葺イタ苫ガアライノデ、洩ル月影ト共ニ田ノ番ヲシテ夜ヲ明カスノデアラウ。もりは洩り守りにかゝれり。

百首歌奉りし時秋ノ歌。

式子內親王

秋の色はまがきにうとくなりゆけど手枕なるゝ閨の月かげ。

秋ノ千草ノ花ノ色ハ籬ニ段々少クナッテ行クケレドモ、閨ニ照リ込ム月ノ光ハ段々冴エテ來テ枕ニ馴レ親ンデ枕ノアタリヲ能ク照スヨ。うとくとなるゝと相對ぜり。暮秋の歌なりといへる玄旨說は妄なり。

秋の歌の中に。

秋の露や袂にいたく結ぶらむ。長き夜あかずやどる月かな。

秋ノ露ガ俺ノ袂ニヒドク結ブノデアラウカ。長イ夜中俺カメニ月ガ袂ニ宿ッテキルワイ。上の句悲しさに流るゝ涕なるなわざと露にやと疑ひて宣へるなり。

太上天皇

千五百番歌合に。

更に又暮をたのめと明けにけり、月はつれなき秋の夜の空。

月ハ押シ强クマダ西ニ入ラナイデ空ニ殘ッテキルノニ、日ガ暮レテ月ガ出ルノヲアテニシテキルト、秋ノ夜ノ空ハ、月ハ今夜ニ限ッタコトハナイカラ、又日ノ暮レルノヲ當テニシテキヨト言フヤウニ明ケテ終ッタワイ。

左衞門督通光

經房卿家歌合に曉月の心をよめる。

おほかたの秋の寢覺の露けくばまたたが袖に有明の月。

世ノ中ノスベテノ人ノ秋ノ寢覺ガ、私ノヤウニ涙ヲ流シテ露ッポイモノナラバ、自分バカリデナク又誰カノ

二條院讃岐

袖ノ涙ノ上ニ此有明ノ月ガ宿ツテ居ルテアラウ。

五十首歌奉りし時。

はらひかねさこそは露のしげからめ、宿るか、月の袖のせばきに。

藤原雅經

一三八

掃ツテモ掃ツテモ宿ル露ハドンナニ多カラウトモ、道理ニ袖ガ狹イノニヨク月ガ宿ツテキルコトヨナア。官位低く秩禄かならねば物思ひて涙を落すことをいへるなり。

新古今和歌集卷第五

秋歌下

和歌所にてをのこども歌よみ侍りしに夕鹿といふことを。

藤原家隆朝臣

下紅葉かつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿の鳴くらむ。

今鹿ノ悲シサウナ聲ガ聞エルガ、アレハ木ノ下ノ方ノ紅葉ガ後カラ後カラ、散ル山ノ、夕方降ル時雨ニ濡レテ、妻ヲ戀ヒナガラ獨リデ鹿ガ鳴クノデアラウカ。

百首歌奉りし時。

入道左大臣

山おろしに鹿の音高くきこゆなり。尾の上の月に小夜や更けぬる。

山カラ吹キオロス風ニツレテ鹿ノ鳴ク聲ガ聞エルワイ。多分、峯ノ上ニハ月ガ照ツテ夜ガ更ケタノデアノヤウニ鹿ガ鳴クノデアラウ。

寂蓮法師

一三九

野分せし小野の草ぶしあれはてゝみ山に深きさをしかの聲。

秋ノ暴風ガ吹イテ野原ノ鹿ノ草ノ床ガ荒レテシマッタノデ野ニ居ラレナイデ山ニハイッタカラ、鹿ノ聲ガ奥山深クデスルヨ。

題しらず。　　俊惠法師

あらしふく眞葛が原に鳴く鹿はうらみてのみやつまを戀ふらむ。

葛ノ葉ハ風ニ翻ッテ白イ裏ヲ見セルモノデ、ソレガ丁度恨ミト云フ言葉ニ通ジテ居ルカラ、嵐ガ吹キワタル葛ノ生エテキル原ニ鳴ク鹿ハ恨ンデ妻ヲ戀ウテバカリキルダラウ。

妻戀ふる鹿の立ちどをたづぬればさ山がすそに秋風ぞふく。　　前中納言匡房

妻ヲ戀ヒ慕ッテ鳴ク鹿ノキル所ハ何處カト尋ネテ見ルト、姿ハ見エナイデ、山ノ麓ニ秋風ガ吹イテキルヨ。淋シイ景色ダ。さ山のさに意味なし。

百首歌奉りし時、秋の歌。　　惟明親王

み山べの松の梢をわたるなり、嵐に宿すさを鹿の聲。

嵐ガ吹クノニツレテ嵐ト一緒ニナッテ來ル鹿ノ聲ガ、山ノ松ノ木ノ上ヲ過ギテ行クワイ。

晩聞鹿といふことをよみ侍し。　　土御門内大臣

我ならぬ人もあはれやまさるらむ、鹿鳴く山の秋の夕ぐれ。

私ハ山デ夕方ニ鹿ノ鳴ク聲ヲ聞クト悲シクテナラナイガ、鹿ガ鳴ク山ノ秋ノ夕暮ハ我バカリデナク誰デモ常ヨリモ格別哀ヲ感ズルコトデアラウ。

百首歌よみ侍りけるに。　　攝政太政大臣

たぐへ來る松のあらしやたゆむらむ、尾の上に歸るさを鹿のこゑ。

鹿ノ聲ヲ伴ッテ吹ク松ノ嵐ガ勢弱クナッタデアラウカ。今迄此處迄近ク聞エテキタ鹿ノ聲ガ遠クナッテ、遙ノ山ノ上ニ聞エルヤウニナッタ。

千五百番歌合に。　　前大僧正慈圓

鳴く鹿の聲に目覺めて偲ぶかな、見はてぬ夢の秋のおもひを。

秋ノ哀ヲ夢ニ見テマデ見終ラナイウチニ鹿ガ鳴ク聲ニ目ヲ覺シテ夢ニ見終ラナカッタ先ノ秋ノ哀ヲ甚麼デアラウカト思ヒヤルワイ。

家に歌合し侍りけるに鹿をよめる。　　權中納言俊忠

夜もすがら妻とふ鹿の鳴くなべに小萩が原の露ぞこぼるゝ。

終夜妻ヲ尋ネテ歩イテ鹿ガ鳴クノニツレテ、萩ガ生エテキル野ノ露ガ零レ落チルヨ。

題しらず。

ねざめして久しくなりぬ。秋の夜はあけやしらむ。鹿ぞなくなる。

源道濟

目ガ覺メテカラモウ久シクナッタ。秋ノ長イ夜モ明ケタデアラウカ。鹿ノ鳴ク聲ガ聞エルヨ。

小山田の庵近く鳴く鹿の音におどろかされて驚かすかな。

西行法師

番ヲスル爲ニ山ノ田ノ中ノ庵ニキテ、思ハズ眠ッテキルト、スグ庵近クデ鳴ク鹿ノ聲ニ驚カサレテ目ヲ醒マシテ、慌テテ鳴子ヲ引イテ鹿ヲ驚カスワイ。

白川院鳥羽におはしましけるに田家秋興といへる事を人々よみ侍りけるに。

中宮大夫師忠

山里の稲葉の風に寢覺して夜ふかく鹿のこゑをきくかな。

山里ニ宿ッテ稲葉ヲ吹ク風ノ音デ目ヲサマシテ、夜ガ更ケテ鹿ノナク聲ヲ聞イタワイ。面白イワダ。

郁芳門院前栽合によみ侍りける。

藤原顯綱朝臣

ひとりねやいとどさびしき、さを鹿の朝ふすを野の葛のうら風。

牡鹿ガ朝臥テキル野ニハ葛ノ葉ノ裏ヲ吹キカヘス風ガ吹クガ、獨寢ハ實ニ淋シイワデアラウ。

題しらず。

たつた山梢まばらになるまゝにふかくも鹿のそよぐなるかな。

俊惠法師

立田山ノ木ガ、葉ガ落チテ疎ニナルニツケテ、木ノ葉ハ戰ガナイヤウニナルガ、山深ク鹿ガザワ〳〵ト落葉ヲ踏分ケルノガ丁度木ノ葉ノ戰ケヤウニ聞エルワイ。

祐子內親王家歌合ののち鹿の歌よみ侍りけるに。

權大納言長家

過ぎて行く秋の形見にさを鹿の己が鳴く音もをしくや有るらむ。

男鹿ノ聲ハ過ギ去ッテ行ク秋ノ形見デアルカラ、男鹿モ自分ノ鳴ク聲ガ惜イノデアラウ。其爲カ此頃ハ鹿ノナク音モ稀ニナッタ。

攝政太政大臣家の百首歌合に。

前大僧正慈圓

わきてなど庵もる袖のしをるらむ、稲葉にかぎる秋の風かは。

稲葉バカリニ淋シイ秋風ハ吹クモノデナイノニ、何故別シテ田ノ假庵ニ番シテ居ル私ノ袖ガ涙ノ爲ニヌレルワデアラウノ。變ナワダ。

題しらず。

秋田もるかり庵つくり吾が居れば衣手さむし。露ぞおきける。

秋ノ田ノ番ヲスル爲ニ、假庵ヲ作ッテ私ガ居ルト、着物ノ袖ガ寒イ。ヤア露ガ袖ニ置イタワイ。此歌萬葉集巻十には「秋田かるかり庵作りあが居れば衣手寒く露ぞおきにける」とあり。

讀人しらず

一四四

秋來れば朝けの風の手を寒み山田のいたをまかせてごゝく。

秋ガ來ルト明ケ方ノ風ニ手ガ冷タイノデ山田ノ引板ヲ自分デ引カナイデ風ガ鳴ラスノニ任セテ置イテ其音ヲ聞イテヰルヨ。

前中納言匡房

時鳥なく五月雨に植ゑし田をかりがねさむみ秋ぞくれぬる。

時鳥ノ鳴ク五月雨ノ降ル時ニ苗ヲ植エタ田ヲ、苅ル時分ガ來テ雁ノ鳴ク聲ガ寒ク聞エルノデ、秋ガ暮レ方ニナッタ」ガワカルヨ。かりは苅、雁にかけ用ゐたり。

善滋爲政朝臣

今よりは秋風寒くなりぬべし。いかでか獨り長き夜をねむ。

中納言家持

今カラハ秋風ガ寒クナルデアラウ。肩寒クテ、淋シイカラ、怎ウシテ此長夜ニ寢ルノガ出來ヨウゾ。戀シイ人ト一緒ニ寢タイモノダ。此歌萬葉卷三に「今よりは秋風さむくふきなんをいかてかひとりなかき夜をねむ」

秋されば雁のはかぜに霜ふりて寒さよな〳〵時雨さへふる。

秋ガ來ルト空ヲ飛ンデ行ノ雁ノ翼ノ風デ霜ガ降ッテ、唯サヘ淋シクテツライノニ、寒イ毎晩毎晩時雨マデモ降ル。

人麿

さを鹿の妻とふ山の岡べなるわさ田は苅らじ、霜はおくとも。

男鹿ガ妻ヲタヅネテ鳴ク山ノ岡ノホトリニアル早稲ノ田ハ秋ノ末ニナッテ霜ガ降ルヤウニナッテモ苅ルマイ。鹿ノ鳴クノヲ邪魔スルカラ。

其之

かりてほす山田の稲は袖ひぢて植ゑし早苗と見えずもあるかな。

今秋ニナッタノデ苅ッテ干ス山ノ田ノ稲ハ夏ノ初ニ袖ヲ濡シテ植エタ早苗トハトテモ思ハレナイワイ。一寸ノ間ニ出來テシマッテ、何ダカ虚ノヤウダ。

菅贈太政大臣

一四五

草葉には玉と見えつゝわび人の袖の涙の秋の白露。

秋ノ白露ハ草ノ葉ニ宿ツタ所ハ玉ト見エルガ、世ヲ悲ミナガラ住ンデヰル人ノ袖ニハ涙トナツテ宿ツテヰル。私ノヤウニ世ヲ悲シンデ送ツテヰルモノ、袖ニハ草葉ノ露ト同シヤウニ澤山涙ガ宿ツテヰル。

中納言家持

我やどの尾花が末の白露の置きし日よりぞ秋風も吹く。

私ノ家ニアル尾花ノ末ニ白露ガ置イタ日カラ秋風モ吹キ初メタヨ。露ハ秋ニナルト逆ヘズニスグニ置クモノダナア。

恵慶法師

秋といへば契りおきてや結ぶらむ、淺茅が原の今朝の白露。

淺茅ノ生エテヰル原ニ今朝置ク白露ハ誤テ秋ニナツタラスグ結バウト約束ヲシテ置イテ秋ニナツタト言フト直ニ結ブノデアラウ。秋ガ來タラ直ニ露ガ結ンダガ、前カラ約束デモシテ置カナケレバコンナ筈ハナイ。

人麿

秋されば置く白露に我が宿の淺茅が上葉色づきにけり。

秋ニナルト白露ガ宿ルノデ私ノ家ノ淺茅ノ上葉ガ赤ク色ガツイタワイ。

天暦御歌

おぼつかな、野にも山にも白露の何事をかは思ひおくらむ。

人ガ思ヒヲ遣スヿヲ思ヒ置クト云フガ、白露ガアンナニ置イタノハ白露ハ何事ヲ此樣ニ野ニモ山ニモ思ヒノコシテ置クヿデアラウゾ。ドウモ不思議ナヿダ。露ダカラ別ニ思フヿモアルマイノニ。

後冷泉院みこのみやと申しける時、尋野花といへる心を。

堀川右大臣

露しげみ野べを分けつゝから衣ぬれてぞかへる、花のしづくに。

露ガ澤山置イタノデ、花ヲ見ニ野邊ノ草ヲ押シ分ケテ行クト、花ノ雫デ私ノ着物ガ濡レテ歸ツタヨ。

閑庭露滋といふことを。

藤原基俊

庭の面にしげる蓬にことよせて心のまゝにおける露かな。

庭ノ面ニ茂ツタ蓬ニカコツケテ、コンナニ荒レタ庭ダカライクラヒドク置イテモカマワナイト思ツテ、遠慮ナク露ガ置イタワイ。

白河院にて野草露繁といへる心を男の子どもつかふまつりけるに。

贈左大臣長實

秋の野の草葉をしなみ置く露にぬれてや人のたづね行くらむ。

秋ノ野ノ草ノ葉ヲ押シ靡カシテ澤山ニ置イタ露ニ濡レテ人ガ野ノ花ナドヲ尋ネニ行クデアラウ。

百首歌奉りし時。　寂蓮法師

物思ふ袖より露やならひけむ、秋かぜ吹けばたへぬものとは。

物思ウテ袖ニ宿ル涙ノ露ハ秋風ガ吹ク頃ハ悲シサニポロ〳〵ト袖カラコボレ落チルモノデアルガ、草木ニオク露モ秋風ガ吹クト堪ヘラレナイデ落チルモノダト云フ「チ、物ヲ思ッテ袖カラ落チル涙ニ習ッタノデアラウカ。露ガ秋風ニ散ルヨ。

秋の歌の中に。　太上天皇

露は袖に物思ふころぞさぞな置く、かならず秋のならひならねど。

露ハ袖ニ必シモ秋バカリ置クト云フ習デハナク物思フ時ハイツデモ置クモノダガ、取別ケテ景色ノ悲シイ秋ニハ物ヲヒドク思フ頃デアルカラヒドクオクモノデアル。コレ此通リニヒドク私ノ袖ニ露ガヤドッタ。

野原より露の光を尋ね來てわが衣手に秋風ぞ吹く。

野原デハ風ガ露ノ置イタアタリヲ吹クガ、野原カラ私ノ袖ニ置イタ涙ノ露ヲ尋ネテ來テ、私ノ袖ニ秋風ガ吹クヨ。

題しらず。　西行法師

きり〴〵す夜さむに秋のなるまゝによわるか。聲の遠ざかり行く。

秋モ更ケテ夜寒イ時ニナルニツレテ蟋ガ弱ルノデアラウカ。鳴ク聲ガ遠クナッテ行クヤウニ思ハレル。五の句尾張に一義として、此頃はやう〳〵たえまをおくとなりとあげたるは從ふべからず。

守覺法親王家五十首歌中に。　藤原家隆朝臣

蟲の音もながき夜あかぬ故里になほ思ひ添ふ松風ぞ吹く。

故里ニ來テ見ルト虫ノ音バカリデモ淋シクッテ永イ夜中倦キナイデ絶エズ物淋シクテイロ〳〵ト物ヲ考ヘ出スノニ、尙一層物思ヒヲ加ヘル松風ガ吹クヨ。ア、淋シイ。

百首歌の中に。　子内親王

あともなき庭の淺茅にむすぼゝれ露の底なる松蟲の聲。

人ノ尋ネタ跡モナイ庭ノ淺茅ノ中デ、イロ〳〵ト心ガ亂レテ露ノ下ノ方デ鳴イテヰル松虫ノ聲ガ聞エル。人モ來ナイノニ何ヲ待ツノデアラウ。淺茅ハ短かくて繁らざる茅をいふなり。

題しらず。　藤原輔尹朝臣

秋風は身にしむばかり吹きにけり。今やうつらむ妹がさころも。

秋風ハ身ニ沁ミワタルヤウニ淋シク吹イタワイ。秋ハ砧ヲ打ツ時ダカラ、今頃ガ丁度故郷ノ妻ガ衣ヲ打ツ時

デアラウ。

衣打つ音は枕にすがはらや伏見の夢を幾夜殘しつ。

衣ヲ打ツ砧ノ音ガ枕ニ近クシテ淋シイ菅原ノ伏見ノ里ノ宿ニ寢テ、砧ノ音デ夜中ニ目ヲサマシテ、夢ヲ終リマデ見テ終ハナカツタ」ガ幾晩アツタラウ。三の句菅原かけ詞なり、伏見も臥しに通じ夢に緣あり。

前大僧正慈圓

一五〇

千五百番歌合に秋のうた。

衣うつみやまの庵のしば〳〵も知らぬ夢路にむすぶ手枕。

衣ヲ打ツ音ガ聞エル山ノ柴ノ庵デハ、屢砧ノ音デ手枕ヲシテ寢テ見テキル夢ヲサマサシテ其度毎ニ新シイ夢ヲ見ルヨ、しば〳〵はかけ詞なり。

權中納言公經

和歌所歌合に月のもとに衣をうつといふことを。

里はあれて月やあらぬと恨みてもたれあさぢふに衣打つらむ。

月ハ昔ノマ、デアルガ里ハ荒レテ終ツタト、此變リ易イ世ヲ恨ンデマア、誰ガ淺茅ノ生エタアタリデ衣ヲ打ツテヰルノデアラウカ。一二の句轉倒して見るべし。

摂政太政大臣

宮内卿

まどろまで詠めよとてのすさび哉。麻のさ衣月にうつこる。

今夜月ノ佳イノニ砧ノ音ガスルガ、アノヤウニ麻ノ着物ヲ月夜ニ打ツ音ノスルノハ、世ノ人ニ眠ラズニ空ヲ詠メヨトテ打ツ仕業デアラウワイ。

千五百番歌合に。

秋とだに忘れむと思ふ月かげをさもあやにくにうつ衣かな。

月ノ景色ガ悲シイノデ秋ト云フ」ハ忘レテ終ツテ他ノ時節ト思ツテ月ヲ見ヨウト思フノニ、サテモ相惡ニ衣ヲウツ音ガスルワイ。此悲シイ砧ノ音ヲ聞イテハ秋ヲ忘レル」ハトテモ出來ナイ。

藤原定家朝臣

搗衣をよみ侍りける。

ふるさとに衣うつとは行く雁や旅の空にもなきて告ぐらむ。

私ハ今留守居ナシテヰルガ私ガ故郷デ衣ヲ搗ツテヰルト云フ」ハ、今空ヲ鳴イテ通ル雁ガ旅ニ出テヰル夫ニ鳴イテ告ゲ知ラセルデアラウ。留守して衣をうつ妻が旅の夫をおもひてよめる心なり。

大納言經信

中納言兼輔家ノ屏風ノ歌。

雁鳴きて吹く風寒みから衣君をぞたぬ夜ぞなる。

雁ガ鳴イテ吹ク風ガ寒イノデ、私ハアナタノオカヘリヲ待チカネテ衣ヲ搗タナイ晩ハナイヨ。

貫之

擣衣の心を。

みよしの、山の秋風小夜ふけて故里寒く衣うつなり。

藤原雅經

吉野山ヲ吹キ渡ル秋風ノ音ガ淋シク夜モ更ケテ昔都ノアツタヒツソリトシタ吉野ノ里ニ衣ウツ音ガ寒ク聞エルワイ。アヽ、淋シイワダ。此歌古今集の「みよしの、山の白雪つもるらし故里寒くなりまさるなり」を本歌とせり。

千度うつ砧の音に夢さめて物思ふ袖の露ぞくだくる。

式子内親王

千度モ擣ツ砧ノ音ガ頻リニ聞エルノデ夢ヲサマシテ、悲シサニ物思ヒニ沈ンデ泣イテヰル私ノ袖ニ宿ツタ涙ノ露ガ砕ケテ落チルヨ。砕くるはうつの縁語なり。

百首歌奉りし時。

ふけにけり、山の端近く月冴えて十市の里に衣うつこゑ。

道信朝臣

夜ガ更ケタワイ。四ノ山ノ端近クニ月ガ冴エ渡ツテ十市ノ里デ衣ヲウツ音ガ聞エル。

九月十三夜月くまなく侍りけるをながめあかしてよみ侍りける。

秋はつる小夜更けがたの月見れば袖もこらず露ぞおきける。

藤原定家朝臣

秋モ末ニナツタ頃、夜ガ更ケタ時分ノ月ヲ見ルト、何トナク悲シクナツテ涙ガコボレテ、袖モ一杯ニ涙ノ露ガ宿ツタヨ。

百首ノ歌奉りし時。

獨りぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月かげ。

寂蓮法師

獨リデ寢ル山鳥ノ長イ垂レ下ツタ尾ニ霜ガヒドク置クノガ、山鳥ノ寢テ居ル床ノ上ニ照ル月ノ光デ見エル。寒イ永イ夜ニ獨リデ寢ルノハサゾ淋シイコトデアラウ。美濃の説は全く誤解なり。

攝政太政大臣大將に侍りける時月歌五十首よませ侍りけるに。

人目見し野邊のけしきはさら枯れて露のよすがに宿る月かな。

大納言經信

花ノ盛リニハソレヲ見ニ行ク人ノ影モ見エタ野邊モ、此頃ハ草ガ枯レタノデ景色モダメニナツテ、遊ビニ出ル人ノ姿モ見エズ唯スコシバカリノ緣ヲタヨリニ月ガ露ノ上ニ宿ツテヰルワイ。露は少しの義にかけたり。

月の歌とてよみ侍りける。

秋の夜は衣さむしろかさねても月の光にしくものぞなき。

秋ノ夜ハ着物ヤ蒲ヲ重ネテ着ル程寒イ思ヒナシテモ、ヤハリ月ノ光ヲ眺メルノニ及デモノハナイ。霧クテモ月ヲ見ルノガ一番面白イ。下の句、「てりもせず曇りもはてぬ春の夜の朧ろ月夜にしくものぞなき」よりとれり。

九月ついたちがたに。

秋の夜ははや長月になりにけり。ことはりなりや、寢覺せらるゝ。

花山院御歌

此頃ハ秋モモウ夜ノ長イ九月ニナッタワイ。道理デコソ夜中ニヨク眼ガ覺メル。夜中ニ目ヲサマスノハ忌ナモノダ。

五十首歌奉りし時。

むらさめの露もまだ干ぬ槇の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮。

寂蓮法師

村雨ガ降ッテ通ッタアトノ名殘トシテ殘ッタ露モマダ乾カナイデキル槇ノ葉ノ上ニ又霧ガムラ〳〵ト立チ上ル秋ノ夕暮ノ景色ヨ。雨ガ晴レタト思ッタラ又スグ霧ニ蔽ッテシマッタ。深山ノ秋ノ夕暮ハ淋シイモノダ。

秋の歌とて。

淋しさは深山の秋の朝ぐもり霧にしをるゝ槇の下露。

太上天皇

淋シイモノハ深山ノ秋ノ朝空ガ曇ッテ霧ニ濡レテ萎レタ槇ノ葉カラ、霧ノ間マッタ露ガポタ〳〵ト落チル景色デアル。

河霧といふことを。

あけぼのや川瀬の波の高瀬舟下すか、人の袖のあさ霧。

左衛門督通光

夜明ケ方ニ人ノ袖ガ秋霧ノ途切レタ間カラ見エルノハ、川ノ淺瀬ノ波ノ高イ中ヲ高瀬舟ガ下スノデアラウカ。五の句解に苦しむ。暫らく八代集抄及美濃の説に從ふ。

堀河院御時百首歌奉りけるに霧をよめる。

麓をば宇治の川霧立ちこめて雲井に見ゆる朝日山かな。

權大納言公實

麓ノ方ヲ宇治ノ川霧ガ立チ罩メテキルノデ、朝日山ガ空ニ浮イテキルヤウニ見エルワイ。

題しらず。

山里に霧のまがきのへだてずば遠方人の袖も見てまし。

曾禰好忠

山里ニ霧ガ籬ノヤウニ立チ隔テナイナラバ遠クノ方ヲ往キ來スル人ノ着物ノ袖ヲモ見ヨウモノヲ。山里ハ霧ガ罩メテ麓ヲ見ルヿガ出來ナイノハ惜シイヿダ。

なく雁のねをのみぞきく、小倉山霧立ちはるゝ時しなければ。

清原深養父

小倉山ハ霧ノ晴レル時ガナイカラシテ何モ見エナイカラ姿ハ見エナイデ鳴ク雁ノ聲バカリヲ聞クヨ。

人　雁

かきほなる荻の葉そよぎ秋風のふくなるなべに雁ぞ鳴くなる。

雁ノ荻ノ葉ガソヨ〳〵ト音シテ秋風ガ吹クニツレテ雁ガ鳴クヨ。

秋風に山飛びこゆる雁のいや遠ざかり雲かくれつゝ。

秋風ガ吹ク空ニ山ヲ飛ビ越エル雁ガ、イヨ〳〵遠クナツテ行ツテ遂ニ雲ニカクレテ終ツタ。

凡河内躬恒

初雁の羽風すゞしくなるなべに誰れか旅寐の衣かへさぬ。

初雁ノ聲悲シク聞エテ秋風ガ涼シクナルニツレテ、故郷ノ人ガ戀シクナツテ故郷ノ夢デモ見ヨウト誰ガ旅寐ノ衣ヲ裏返シテ寢ナイモノガアラウカ。衣ヲ裏返シテ寢レバ思フ人ヲ夢ニ見ルト云フカラ屹度誰デモサウスルニチガヒナイ。初雁の羽風とは。初雁の鳴く折ニ吹く風ガ洒落れて言へるなり。

讀人しらず

かりがねは風にさほひて過ぐれどもわが待つ人の言づてもなし。

雁ハ風ト競爭シテ急イデ飛ンデ行クガ、私ガ待ツテヰル人ノ音信ハ少シモナイ。雁ハ人ノ音信ヲ持ツテ來ルト云フノニ怨ウシタコトヤラ。

横雲の風に分かるゝ東雲に山飛びこゆる初雁の聲。

山ニ棚引イテヰタ雲ガ、風ノ爲ニ山カラ離レテ行ク明ケ方ニ、其山ヲ飛ビ越エテ行ク初雁ノ聲ガ聞エル。アヽヨイ景色ダ。

西行法師

白雲を翅にかけて行く雁の門田の面の友したふなる。

白イ雲ヲ翅ニ懸ケテ空高ク飛ブ雁ガ門ノ前ノ田ノ面ニ居ル友達ヲ慕ツテ鳴キ降ル聲ガ聞エルソイ。尾張に春雁の歌なるをこゝに入れるは撰集のあやまり也といへるはわろし。

五十首歌奉りし時、月前聞雁といふことを。　前大僧正慈圓

大江山かたぶく月の影さえて鳥羽田の面に落つる雁がね。

大江山ノ頂ニ隱レヨウトシテヰル月ノ光ガ冴エ渡ツテ、鳥羽田ノ面ニ下リテ來ル雁ノ聲ガスル。

題不知。　朝惠法師

むら雲や雁の羽風にはれぬらむ。聲さく空にすめる月かげ。

村雲ガ雁ノ羽タヽキスル風デ晴レタノデアラウカ。雁ノ聲ガスル空ニ少シモ雲ガ無クテ月ノ光ガ澄ミ渡ツテヰル。

吹きまよふ雲居をわたる初雁の翼にならすよもの秋風。

風ガヒドク吹ク空ヲ鳴イテ通ル初雁ノ翅ニ、四方カラノ秋風ガ吹キ馴レルヨ。ヒドク吹ク秋風ノ中ニ雁ガ羽ヲ動カシテ空ヲ飛ブノガ見エル。

皇太后宮大夫俊成女

一五八

詩に合せし歌の中に山路秋行といへることを。

秋風の袖に吹きまく嶺の雲を翼にかけて雁も鳴くなり。

秋風ガ私ノ袖ニ、山ノ上ノ雲ヲ吹キ巻イテ來ルガ、私バカリカ其雲ヲ雁モ亦翼ニカケテ鳴クワイ。山路ハ淋シイモノダナア。

藤原家隆朝臣

五十首歌奉りし時菊、籬、月といへるこゝろを。

霜をまつまがきの菊のよひのまに置きまよふ色は山のはの月。

霜ガ置イタラスグ駄目ニナルデアラウト思ハレル程今丁度眞盛リニ咲イテ居ル菊ノ花ノ上ニ、宵ノ内ニ霜ガ降ツタノデハナカラウカト思ハレルヤウナ眞白ナ色ハ、山ノ端ニカクレヨウトシテ居ル月ノ光ノ照スノデアツタ。

宮内卿

鳥羽院御時、内裏より菊をめしけるに奉るとて結びつけ侍りける。

九重にうつろひぬとも菊の花もとのまがきを思ひ忘るな。

今抑ニ從ツテ此菊ノ花ヲ御所ヘ差シ上ゲルガ、禁中ニ移ツタトテモ、菊ノ花ヨ。元汝ガ生エテキタ私ノ家ノ籬根ヲ忘レルナヨ。

花園左大臣

題しらず。

今よりは又咲く花も無きものをいたくな置きそ、菊の上の露。

今カラハモウ咲ク花モ無イノダカラ、菊ノ花ノ上ノ露ヨ。アマリヒドク置クナヨ。花ガ枯レルトイケナイカラ。

權中納言定頼

かれ行く野べの蕣を。

秋風にしをるゝ野邊の花よりも蟲の音いたくかれにけるかな。

秋風ニ萎レテ野ノ花モ大ブン枯レタガ、シカシ夫ヨリモ却テ蟲ノ鳴ク聲ノ方ガヒドク枯レテシマツタワイ。

中務卿具平親王

題しらず。

寢覺めする袖さへさむく秋の夜のあらし吹くなり。松蟲の聲。

夜中ニ目ヲ覺マスト袖サヘモ寒イ秋ノ夜ニ、嵐迄モ吹クワイ。嗚呼此淋シイ夜ニ松虫ノ聲モ聞エルガ、嘸松

大江嘉言